
双頭の竜

175の佃煮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双頭の竜

【Nコード】

N 6 4 4 6 G

【作者名】

1 7 5 の佃煮

【あらすじ】

男が居間で見たのは充電している少女の姿だった。共に暮らすことになった二人は、科学力を持て余した各国を回りながらぐだぐだと戦渦に巻き込まれていく。レールガンで切り開く、厨二ハードS

F

0100：蛇足

突然だが、私のすぐ目の前にはヘッドロックをされ銃口をこめかに突きつけられた男の後頭部がある。

懐のベビーイーグルを手に取り、人通りの少ない路地裏に入ってしまったアベックを追いかけたのはつい先ほどのこと。別に金に困っている訳ではなかったが、この時期にこの町を観光気分で歩いている無神経な余所者達を見て無性に腹が立ったのだ。そして女の腕は掴み損ねたものの、幸運にも目の前で転んだこのひよろひよろした片割れの男を人質にすることができたという訳である。

しかし、だ。私はとても混乱している。

「いいざまだな」

女は私の腕の中にいる男に向かって、吐き出すようにそう言った。暗い路地裏の中で一際目立って淡い光を流している、肩ほどで二つに縛られた金色の長髪は、その長さのせいで彼女の身長の高さを強調している。ふっくらした顔の輪郭からも落ち着きの無い仕草からも幼い印象を受ける。裾のひらひらした可愛らしい青のワンピースを着ているのだが、どういう訳かその上に爺臭いぶかぶかの作業着を羽織っていた。

「見飽きたら助けられないか？」

「やだ」

観光客は銃を見た瞬間に血相を変えて財布を置いていくものだったと記憶しているのだが、この男女は平然と会話を続けている。

首を絞めたまま男の顔を覗いた。恐怖や驚愕というよりも、諦めたような——そう、幸薄そうな表情をしている。面長で彫りの深い顔立ちにも関わらずした、お洒落の『お』の字も感じない髪型と眉間に寄せたシワの賜物か。

「おい、黙れ。俺は金目のものを出せと言っているんだ！」

思わずその寝癖のついたようにぼさぼさの頭に銃口を当てなおして怒鳴ってしまった。

これではまるで追い剥ぎではないか！ いや、実際そうなのだが。しかし思い切った行動をしたにも関わらず、期待していた謝罪の言葉はなく再び二人の間で会話が再開される。

「ああ、いいこと考えた。——その胴体あたしが貰うから、お前殺される」

「他人の体に移植するには拒絶反応が不可避でだな……」

「ん？ そうしたら汚らわしい一物も付いてくるのか」

私を無視して交わされる妙な掛け合い。

イチモツ？ 移植？ 拒絶反応？ 何故強盗に襲われながら臓器売買の話をしているのか。……イチモツ？

「まあ、そうなるな。胸の大きさはたいして変わらない——つく」

言葉を遮るように男の首を締め上げる。人質として機能しているように見えない彼から銃口を離し、手首を90度回して女を狙った。

「黙れ！ 本当にこいつをぶっ放すぞ?!」

私の叫び声が家々の壁で響く。会話は止んだ。汗ばんだ手でグリップを握りなおす。

女の不機嫌そうな視線がこちらに向けられる。その瞬間体が焼かれるような感覚を覚え、男の首を絞めたまま一步後ずさった。これはそう、死を意識せざるを得ない戦場での緊迫感によく似ている。

「一体なんなんだ、お前らは?!」

思わず先程と同じくらいの声の大きさを叫んだ。フロントサイト越しに見えるあの小柄な体には、氷の中で燃える炎のように何かが押し込められている。私はそれを生物的に感じ取り、無意識の内に警戒しているのだろう。

「撃つてみる」

予想外の返答に、口を半開きにして凝視せざるを得なかった。女は手のひらを上に向け、指を何度も折りたたんで『来い』というジェスチャーをしている。

「あたしがなんなのか知りたいんだろ? それが一番手っ取り早い」

殺すつもりはなかったが、恐怖の為か引き金に掛けられた指が無意識にきりきりと絞られていった。この引き金を引けば、パラベラム弾は彼女の胸部、白い肌に擦傷環を作って貫通し、臓物に致命傷を与えて命を奪う。ああ、流れる冷や汗が背中をくすぐって気持ち悪い。

一発の銃声がレンガの壁で反響し、それとほぼ同時に金色の光沢

を持った真鍮の薬莢が石畳の上に軽やかに転がった。

どういう訳か、私の手の中にある銃は硝煙の立ち上る銃口を空に向けている。

「あ……？」

その奇妙な状況を理解できず、声を漏らしてしまった。スライドに死んだはずの女の手が被さっている。グリップを握る私の指に微かに掛かった彼女の指は冷たかった。

「なかなかいい反応してるな、お前。少し焦ったぞ」

手が伸びてきている先、横から聞こえた女の声。つい先刻まで正面で仁王立ちしていた彼女の姿は、いつの間にか私の右側に移っていた。

「ッ?!」

彼女の手を振り払い、男の首に腕を掛けたまま後ろに飛び退く。彼はされるがままに引きずられている。

「スポーツ選手には見えないし、もしかして軍人だったりするの?」

「とうの昔に退役した。お前は何だ？」

銃弾の当たった形跡がなく、何事も無かったかのように言葉を續けてくる女に同じ問いを繰り返す。

感触を確かめるように手を何度も開閉しながら、ゆっくりと体をこちらに向けてきた。考えたくはないが、引き金を引く刹那に私の

横に回りこむような芸当をしていたのだとすれば、彼女の動きは既に身体能力がどうこう述べるレベルではない。

「約束してたからな。——あたしはサイボーグだ」

「サイツ——?!」

女が軽やかに地面を蹴った。銃を向けなおそうと思うが、時既に遅い。辛うじて認識した次の姿は、腰を落として蓄えていたバネを、私の眼下で思い切り開放しているところだった。

顎に衝撃を受け、バチバチと音を立てて光の粒が視界に散る。

サイボーグといえばSFに出てくる改造人間のことはなかったか。冗談か本当かは知らないが、妙に納得させられている自分があった。

「あ、過激派のこと聞くの忘れた」

流れる灰色の景色を見ながら女の声聞いた。脳が揺れる。足の裏の感覚がなく、どうやら私は宙を舞っているらしい。意識が遠のき、世界は黒くなった。

0100：蛇足（後書き）

2作目になります。前作から読んで下さっている方がいたら嬉しい限りです。力を入れる方向性が間違っている気がしますが、どうぞよろしく願います。

トンデモ武器・兵器の解説や計算はホームページ上に載せています。素人考察ですが好きな方はどうぞ。

顔だけがじんわりと熱い。赤い臉から差し込む光のせいで目が痛い。

嫌々ベッドから体を起こすと、東側の窓のカーテンが寄せられていた。どうやら既に彼女が起きているらしい。

寝癖なのか髪型なのかよく分からないぼさぼさの頭を掻きながら、辺りを見渡す。狭い空間に、詰め込まれるようにしてシングルベッドが二つ置かれたホテルの一室。血糖の足りない頭を傾げていたが、ようやく自分がここににいる理由を思い出した。

昨日は飛行場から直接目的地であるカルバフに向かった。しかし到着早々道に迷い、あげくに追い剥ぎと遭遇。出鼻を挫かれた私達は、大事をとって州都バダグートに泊まることになった。いくら彼女でも寝首を掻かれたらひとたまりも無い———と想いたい。

よるめきながらズボンを履き替えていると、ドアから相変わらず不機嫌そうな顔をしている女が顔を出した。

「おはよう、シャル。昨日はよく寝られたか？」

「まったく全然」

女は小さな口で返事をしながら、散らかったスーツケースを漁っている。やがて一切れの食パンほどの大きさである栄養タンクを取り出し、透き通った金色の髪をたなびかせながら部屋を出て行った。彼女はシャルロット。諜報と戦闘を目的に作られたサイボーグらしい。らしい、というのは改造したのが私ではないからで、詳しいことはよく分からない。自分から話そうとはしないし、こちらも興味が無いから聞いたことがない。ただ互いに三ヶ月前に交わされた奇妙な契約を律儀に守っているだけである。

「とはいえ、なんでこんな所までついてきているんだろうな、俺は……」

ため息をつきながらズボンのベルトを締め、朝食を摂るため一人ホテル内のレストランに向かった。

私の運転する軽トラックは、再びカルバフの町に向かっている。訪れた初日から強盗に会うとは疫病神にでも憑かれているかのような運の悪さだった。バックミラーにはこちらに背中を向けて荷台に座る元凶が映っている。長い髪を風に流し、手足を伸ばして弛緩しており気持ち良さそうに見える。

「なんか用か？」

視線に気が付いたシャルが、車内に聞こえるように大きな声を出した。野生動物並みの警戒心に感心しつつ、窓用ハンドルを回して

ガラスを下ろす。

「そのデボン・カワード氏というのは何者なんだ？」

はるばる地球を半周してきたのには訳がある。

二日前、私は家におり、シリアルを頬張りながらニュースを見ていた。テレビの画面にはイフク州で集団拉致されたという人々の名前が挙がっていたのだが、その中であつたデボン・カワードの名前を見てシャルが大声を上げた。なんでも前に科学者である彼の姿を見たことがあり、今どこにあるか分からないという、彼女が『昔働いていた場所』を知っているかもしれないということだった。その日の内にチケットと黒いパスポートを用意させられて、出発し到着したのが昨日である。

「偉い人らしかつたけど、詳しいことは覚えてない」

「それにしても、よく名前を覚えてたな？」

「会えば分かる。——名は体を表すというか、何というか」

「オチが読めたぞ」

百数年前、未曾有の不況により各国は次々に国家破産して統合され、当時百数十あつた国の数は三十前後まで減ることになった。そのことは結果的に科学技術の統合と向上をもたらし、当時切迫していたエネルギー問題を大方解決するという偉業を成し遂げた訳だが、今となつては独立を望んでいる各州がその技術を軍事に注ぎ込んでおり、核戦争を彷彿させる危険な状態が続いている。

ここイフク州ではその活動が特に盛んで、顔を見れば覚えられるというデボン氏をさらつたのは、独立運動を進めている集団の中で

も過激派に属する武装集団である。

これは共に数ヶ月過ごした上での勘だが、シャルは彼らとドンパチをするつもりでいる。

高い時間分解能を持つ目に、筋肉と比べ物にならない高出力のアクチュエータを持った彼女は、人間とは運動能力が根本的に違う。出血さえ無ければ熊だろうが小隊だろうが一人で倒せると、技師である自分が太鼓判を押しておく。

しかし、だ。いくら契約のことがあるとはいえ、普通の人間である私はそんな危険な戦場にまでついて行く義理は無い。

「救出するのも戦うのも勝手だが、俺は危ないことには関わらないぞ」

「それは良かった。脇で傍観されても迷惑だからな」

それきりカルバフに着くまで言葉が交わされることはなかった。

喧騒な市場の一角で私は大きくため息をつき、壁に寄りかかった。午前中からぶっ通してシャルと二人で過激派とデボン氏達のことについて聞き込みを行っているのだが、全く収穫が無い。正確には人見知りする彼女は後について来るだけなので、私一人で聞き込みを行っているようなものだ。人ごみの中を歩き回ったことで、ただでさえも少ない体力が余計に奪われている。

「おばちゃん、これで買えるだけ頂戴」

丁度横で開いていた屋台に近寄り、籠に入ったレモンによく似た楕円形で綺麗に黄色に染まっている果実を指差しながら紙幣を渡した。何の食べ物かは知らないが、疲れたときは糖分に限る。

「デーツだね、はいよ」

人懐っこい笑顔のおばさんから紙袋一杯に入れられたデーツと言うらしい果物を受け取りながら、ついでに過激派のことを聞いてみることにした。

「ありがとう。ところで、こちら辺で拉致があつたって話聞いたところある？」

「またその質問かい。——まあ興味があるのは結構だけど、あんまり首を突っ込まない方がいいと思うけどね？」

「『また』って、前にも同じこと聞いた人がいたの？」

「店を開いてすぐだったよ。丁度あんた達みたいに男女の二人連れだったね」

視線を追って後ろを振り向くと、すぐ傍にシャルが立っていた。彼女もおばさんの話を聞いていたらしい。

「それで？」

「いやぁね、知らないって言ったら早々に去っていったわよ」

それ以上情報を得ることも出来なさそうだったので、礼を言って

店を後にした。

私達と同じことを調べている二人組がいるらしい。かといって、物好きがいるんだな、くらいにしか思わなかったのだが。

「結局デボン氏については何も分からず、か……」

デーツをかじりながら、隣を歩くシャルに声をかけたが、相槌と生返事を返された。視線を伏せて、考え事でもしているらしい。

ふと、デボン氏を救い出し『昔働いていた場所』を聞き出した後はどうなるのだろうかと考えた。そもそも私達が契約したのは、シャルがそこに帰る事を切望していたからである。ということは自分はお払い箱になり、彼女の面倒を見ることも無くなるのだろうか。

「——食べるか？」

それ以上深く考えることを止め、デーツを紙袋から一つ取り出し横に差し出した。この果実は確かに甘くて美味しいのだが飽きやすく、二つ目から停滞していた。

「お前は馬鹿か。あたしは食べられないって知ってるだろ」

「一応ダミーの胃はついてるし、舌の機能も残ってるんだから、たまにはいいと思うぞ」

「いつもは掃除が大変とか言ってるくせに、今日は気持ち悪いな。……じゃあ一つだけ」

シャルが恐る恐る黄色の果実に手を伸ばす――

「いたッ、お前らアッ!!」

——が、叫び声に遮られ手を引つ込めた。

周りの道行く人々の頭でできた地平線の中に、男の頭が一つ抜きん出ており、人を掻き分けてこちらに近づいてくる。日に焼けた筋肉質な体、私の強そうな太い眉、どこかで見た男だと思ったが、昨日私達を襲ってきた男ではないか。シャルが黙って私の前に立った。

「まだこの町にいたんだな、助かったぜ」

男は肩で息をしながら近寄って来ると、砕けた調子で勝手に話を始めた。どうやら昨日の因縁をつけに来たわけではないようだ。

「俺だ、昨日お前らにこっ酷くやられた——」

「はあ、その節はどうも……」

私達の怪訝そうな顔を見て、彼が焦って自己紹介を始めた。男の名前はムンタダル、町外れの畑で市場に出すための野菜を栽培しているらしい。何とか通りで妻が売っているから、入り用なら顔を出してくれ。販促も欠かさない。

「そうだ、こんなこと話してる場合じゃなかった！ お前らに伝言を預かってるんだよ」

「伝言？」

自慢ではないが、私はこの州どころか地元にもあまり知り合いが

いない。シャルとてそれは同じはずである。

「なんだ、あいつらと知り合いじゃなかったのか？ お前と同じワッペンをつけてたから、てっきりそうかと思ったんだが」

ムンタダルはシャルの上着の左腕についている印を指差して言った。

彼女はあの作業着を異常に大切にしており滅多に触らせないのだが、前に機嫌が良い時にそのワッペンをじっくり見せてもらったことがある。正距離図法の地球が縫いこまれた盾の中央に、長細い六角形が描かれたデザインだったと思う。確かその下には『SEPH I ROTO』という文字があった。

——そんなことを俯き加減で考えていたが、顔を上げるとムンタダルがシャルに襟を掴まれ泣きそうな顔をしていた。大の男が自分より遥かに小さい女に睨まれて、すくんでいる様相。絵にならない。

「それでどんな奴らだった？！」

「ちょうどお前らみたいなのアベックだよ、全部話すから落ち着いてくれ」

「あ……、ごめん……」

シャルがしおらしくなり手を離す。どうもおばさんの話を聞いている様子がおかしい。

「——そうだな、昼頃だ。片付けの準備をしていたら奴らのワッペンが見えたもんだから、昨日の二人組の仲間か、って尋ねたんだ。そうしたらえらい綺麗な姉ちゃんが二人とは誰か、って聞き返してくるからよ、お前らのことを話してやった」

襟の乱れたムンタダルが息を継ぐ。

「彼女は俺の話を大人しく聞いてくれたんだが、終わると微笑んでこう言っただ。『彼女に手を引くように伝えてくれますか？』いえ、話をすれば何のことか分かりますから』ってよ」

「そう……、二人の特徴は？」

「女の方は背が高く、整った顔立ちだったな。そう、髪型はハーフアップだ。——野郎の顔はあんまり見ていなかったが、ヘラヘラしていた気がする」

返答を聞くと、シャルは深刻な顔をして黙り込んでしまった。どうやらその二人は彼女の知り合いのようだが、昔働いていたという場所と関係あるのだろうか。

「おい兄ちゃん、どういうことなんだ？」

「悪いな、俺にもよく分からないんだ」

男二人で首を傾げていたが、駄目もとで彼にも例の質問をしてみることにした。

「ところで、あんた過激派の建物の場所って分かるか？ いや、知らなけ——」

「ん？ ああ、あのでかい壁のことか」

「れば——って、知ってるのか?!」

顔を上げたシャルと共に詰め寄ると、ムンタダルは任せておけと親指で自分を指差した。

もともと人の寄り付かない薄暗い石畳の道、まして夜になれば人の気配は全くない。目の前にそびえ立った、5mはあろうかという巨大な壁を見た。このコンクリートの構造物は、周囲の伝統的なレンガ造りの建物の中で一際浮いている。

ムンタダル情報は正確だったようで、外人がここに連れ込まれたという目撃証言も得た。おそらくここにあの科学者がいる。私に手を引くように伝言を伝えさせた女のことも気になるが、あの機械マニアと気まずい毎日を過ごしながらも掴んだ、ゾハルに関する情報を得られるかもしれない貴重なチャンスだ、絶対におじゃんにする訳にはいかない。

彼、アルバスは朝の宣言どおり、軽トラックの中で一人待機している。元々そういう契約なのだから文句は無い。

銃器を準備する時間が無かったので、装備は自分の身一つである。相手は武装しているとはいえただの人間だ、『あれ』は車に置いてきた。

腰を落とし、乱れることの無い呼吸を整える。いくら姿勢はコンプレッサの方で自動制御してくれるとはいえ、着地は自分で行わなければならない。

空気音を漏らしながら勢いよく脚部を伸ばし、地面を斜めに蹴った。壁が下方に消え、道から見えなかった建物の全域が姿を現す。重心を前に倒し、壁のへりの有刺鉄線が無かった僅かなスペースに着地した。

一面が砂という洒落つ気のない庭に見張りや番犬は見当たらない。建物は数個の平屋から構成されており、赤外線カメラやサーモグラフィの機能は無いので部屋の中まで確認することはできないが、いくつかの窓から光が漏れているのが見えた。

ふと帰ったらアルバスに暗視ゴーグルでも作らせようかと思いついたところで、なんだかんだで彼に頼っている自分に気がつき腹立たしくなった。

庭に降り立ち、音を立てずに一気に走り抜けて一番近くの壁を背にした。耳を澄ましてみるが、建物の中から物音が聞こえない。電気はついていたので人はいるはずである。不思議に思いながら、上体を回し窓から中を覗いた。

「え……？」

目を疑う。

石造りの灰色の廊下に鮮やかな紅色の斑点が噴き付けられ、所々に黒ずくめの男達が伏し、前衛芸術のような異様なコントラストを醸し出していた。

床には一昔前のアサルトライフルと薬莢が転がっており、ここで戦闘があったことを物語っている。私は当初の目的を忘れ、呆然としてその光景を眺めていた。

どれくらいの間そうしていただろうか。建物の中から多数の銃声が聞こえ正気に戻った。

「馬鹿っ——」

自分を罵倒し気合を入れなおす。戦闘があつたということは、ここに私の先を越した人物がいるということに他ならない。

全力で地面を蹴り、角を回り込んだところにあつたはずの正面玄関目がけて壁沿いに駆け出した。ガラスの破片のリスクを考えれば、多少時間が掛かっても扉から入った方がいい。もっとエレガントに潜入する予定だったが、この際扉を突き破るとしよう。いや、その方が私らしい。

意気揚々と拳を握って行つたが、角を曲がつた先でまたもや足を止めさせられた。

正面玄関の扉は既に開いていた。いや、扉は閉まっているのだが開通していた。何のことだか分からないが、まさにそんな感じた。

重々しい扉に近づく。鋼と思しき厚い金属の板の中央は大きく四角に、まるで紙のように容易に切り抜かれている。高温にされ溶かされたのだろっ、断面が垂れるようにして固まっていた。

——えらい綺麗な姉ちゃん。背が高く、整った顔立ち。髪型はハーフアップ。ムンタダルの言葉を思い出す。話を聞いたときはまさかとは思っていたが、間違いなくここにあの女がいる。

四角い穴をくぐると、横たわった男達が迎えてくれた。目的の場所に案内でもしてくれているかのように連なつて転がっている。荒い息をしている彼らを跨いで廊下を駆け抜けた。

銃声の音源が近い。またもや四角く切り抜かれている扉をくぐつてから足を止めた。両脇にダンボールの積まれているここは倉庫の

ようだ。今まで通ってきた廊下よりも薄暗く、ワンピースに作業服を被っただけのこの格好では肌寒い。

「ちくしょおおー!!」

死角になっっている棚の陰から、男の緊迫した叫び声と共に連続した銃声が聞こえてきた。銃口から噴かれた火が、断続してコンクリートの壁に人間の影を映している。棚を背にして立ち、慎重に声のした方向を覗く。

顔に、鉄の臭いが鼻につく生暖かい液体がかかった。

倉庫の中央で見た光景、それは男が体を横に裂かれ、天井に向かって発砲を続ける自動小銃共々冷たい地面に崩れ落ちている瞬間だった。

倒れた男の向こうで、冷静に剣についた血を払っている背の高い女。その感情の無い———というか無愛想な顔も、結われた髪に挿された焼き鳥の串みたいな簪かんざしも、とてもよく見覚えがある。そして彼女の身長より大きな大剣も。

「ライラッ!!」

女はこちらを向き一瞬少し驚いた顔をしたが、すぐに表情を曇らせた。

「やはりあなただったんですね、ダート……」

「ダート?! —— 本当にここに來てたのか?!」

ダート、久しぶりに呼ばれたその名前に違和感を感じた。彼女の

声に反応し、男が物陰から姿を現す。彼の後ろにはぞろぞろと中年男性が連なっている。その中に、名前の通り牛に似た面構えをしたデボン・カワードの姿もあった。

「どういつもりですか？　なぜあなたがここへ？」

女は依然切っ先を下にして剣を構えており、いつでも戦える姿勢でいる。私と同じ灰色の作業服の上下を馬鹿真面目に着ており、左肩にはSEPHIROTOの部隊章。

「——ゾハルの場所を聞き出しに来た」

「何でだ、お前はあそこに帰ったら殺されるんだぞ?!」

声を荒げている、オールバックの余り毛を後ろで縛った彼は、確かレウムとかいう技師だったと思う。

「それでも、あたしの居場所はあそこだけだから……」

脇を締め腰を落とし、両拳を顔の前に構えた。

「中佐、科学者の皆さんをお願いしてもよろしいでしょうか？」

彼女が視線を私に向けたまま口を開く。断固として脇を通すつもりは無い、そんなことを刻み込んでくるような目。

「それは構わないが、お前はどうする気だ、ケセト——」

「彼女の目的はおそらく彼らの奪取です。安全な場所まで退避できるまで時間を稼ぎます」

「……くそつ、時間を稼ぐだけだからな！——さあ先生方、こちらへどうぞ」

男は苛立たしげに頭を掻いていたが、科学者達を連れこちらと反対方向の扉から出て行った。追わずに構えたままにいる私を、ケセトが不思議そうに眺めている。

「意外ですね、追おうとしないなんて」

「確かにここに来た目的はデボンだったけど、お前に聞いたあなたの方が手っ取り早そうだからな」

二人を敵に回して、情報を知っているかも分からないデボン氏を連れ出すよりも、確実にゾハルの場所を知っている一人を倒す方がいいに決まっている。ただ、どちらの場合でも最大の障害が立ち塞がる訳だが。

「徒手空拳で『ケテブ・メレリ』とやり合うつもりですか？　しばらく見ない間に冗談が上手くなりましたね」

刃と垂直に立っている大きなリカッソを回転させながら、腹の部分に大きな穴が開いている銀色の刀身が返された。

ケテブ・メレリ——ユダヤの伝承に出てくる真昼と灼熱の夏の王の名をとった巨大武器である。背中の出力ポートに繋いだ同軸ケーブルを通して電気を流すことで刀身が発熱し、鋼の融点を遙かに超える2000Kまで加熱される。もちろん触れれば治癒が困難な大怪我を負い、紙一重で斬撃を避けても大気を伝わる熱気で体を焼かれる厄介な兵器だ。

幸い今は刃の色から分かるように熱を帯びていない。今が攻撃の

チャンスである。

後ろの足で地面を蹴って水平に跳び、ケセトの懐に入った。交わった視線の先、眠そうに開いた瞼の向こうに、こちらを冷ややかに見下ろす黒い瞳が見える。全て見透かしたような態度が気に食わない。腰を大きく回しながら突き出した左の拳が、上体をずらした彼女の顔の横を通り過ぎた。

「ちっ……！」

左足を上げて慣性のまま横面に浴びせ蹴りをかまそうとするが、それもスウエーバックした彼女の鼻先の空気を薙いだ。

いくら筋収縮時間が早かろうが、反応速度が速かろうが、同じ条件を持った相手には何の恩恵も無い。そう、彼女も私と同じサイボーグなのだから。

足を引き寄せ構えなおし、最初の位置から一步も動いていない女を睨んだ。

「……町で聞いた話によると、今のあなたには相棒がいるそうですね」

「相棒かどうかは別として、技師ならいるぞ」

「ゾハルのことを綺麗さっぱり忘れて、彼とひっそりと暮らすことをオススメしますか？」

「しつこいな。あそこはあたしの居場所じゃない、所詮兵器は戦場が居場所なんだ」

溢れていた感情を言葉にして連ねる。

「——だから、どんな手段を使ってもゾハルに戻ってやる」

ケセトが大きく息を吐きながら俯いた。

融通の利かない彼女に私の思いが伝わるはずがない。分かっているが、以前のように力を貸してくれることを期待している自分がいた。

視線が上がる。先程までの眠そうな目とは打って変わり、ギラギラと殺気を籠めていた。

「あなたの覚悟はよく分かりました。時間稼ぎとは失礼なことをしてしまいましたね」

「失礼なのはいつものことだろ」

「——『ガルガリン』はまだ持っているのですか？」

「返せっていうのか？ でっかいことやってる割に、変なところでケチだな」

「いいえ。せめてあなたがあれを持っていれば——」

下を向いていた切っ先が中段に上げられた。赤熱を通り越し、刃先は黄色、腹は白色に光を放っている。これだけ距離をおいているというのに、露出している顔や足に熱気が伝わってくる。

「——少しはいい勝負ができただろうにと、惜しんでいるだけです」

「！——」

ケセトがケテブ・メレリを薙ぎながらこちらに跳び込んで来る。足首を狙った光の刃を高く跳んで避け、天井近くで緩やかに前宙をしてから着地した。互いに背中を向けたまま、肩越しに相手を睨む。私はあの大剣より強力な近接武器を知らない。このまま丸腰で戦ったところで、あつという間に四肢を裂かれて焼き炭にされるだろう。そう、丸腰で戦った場合は。

大剣が剣先を前にして上段に構えられる。次の瞬間、同時に互いに振り向き円を描くように駆け出した。

私の射程まで詰める気はないらしく、つかず離れず距離を置いて光の刃の突きが放たれる。素早く足を捌いて大きく避けていくが、刀身から発せられている熱で後退せざるを得ない。壁際に追い込まれているのは分かっているのだが、絶えず繰り出される攻撃を避けるので必死だった。

とうとう靴の踵が壁に当たる。

ケセトが躊躇することなくケテブ・メレリを切り返して横に振る。無意識のうち、薙がれた大剣に合わせるようにして同じ向きに身を投げた。私がいた場所の壁が一字に裂かれていくのが見えた。

なんとか壁際という窮地を脱したものの、無防備に地面を転がる。

「終わりです、ダアト——！」

「——ッ?！」

視線を前に向けると、ケセトが大剣を袈裟に振り上げながらこちらに突進してくるところだった。足を伸ばしきっているこの状態では、攻撃を避けるだけの脚力を得ることができない。光の刃が大き

な弧を描きながら顔に迫る。

私は、口の端を吊り上げた。

「お前が——死んでくたばれ!!」

——銃口を女の胸に向けた。中古品であろう時代遅れの突撃銃は、私のすぐ後ろで倒れている男のものである。

彼女をこの銃がある場所におびき寄せるのが唯一の作戦だった。予想以上に腕を上げてくれていたお陰で死に掛けたが、まんまとこちらに向かつて走って来てくれた。

——引き金を引く。幸か不幸か、残されていた銃弾はチャンバーの一発のみ。撃鉄に叩かれ飛び出した撃針が雷管を穿ち、旋回する黄蘆色の弾頭が発射炎と共に排出される。

刹那彼女が反射で腕を折りたたみ、7・62mm×39弾は大剣のリカッソに斜めに入射し弾かれた。

「——くっ?!」

無常にも壁に当たり、ひしゃげる銃弾。彼女を倒す最初にして最後のチャンス、それはまるで全世界の神に見放されたような運の悪さで潰えた。

「最後に何か言い残すことはありますか？」

ケセトが立ち上がり、大剣の切っ先をこちらに向けてそう尋ねた。顔に刃の熱気が伝わってくる。一度は死んだ身、さほど恐怖は感じなかった。

言い残すこと、遺言か。トラウマになるくらいの悪口雑言を残してやってもいいが、その前に一つだけ心配事があった。

「建物の外に、ここしばらく世話になった男がいる。あいつに一人で帰れ、と伝えてくれるか？」

「——それは構いませんが、どうせなら自分で伝えてみてはいかがでしょうか？」

彼女が剣先をこちらに向けたまま後ろを振り返る。怪訝に思いながら視線の先を追った。

「ああ、言われなくてもそうするさ。……一人と一体で帰ってやる」

建物の外で待機しているはずの男の声が聞こえた。彼女の背後、棚の影からハンドガンらしきものを構えた男が蟹歩きで姿を現す。寝癖だか天然パーマだか分からないばさばさ頭、無駄に縦に伸びてひよろひよろの体、何故彼がここにいるのか。

「アルバス——！　なんでお前がいる？！」

「剣を下ろして向こうの扉から出て行け。——この銃はただの銃じゃないぞ、対シャル用に調整した高出力レーザー銃だからな」

アルバスは質問に答えず、二本の電極が飛び出している銃口をケセトに向けている。

確かあれは以前私がくらったことのある武器だ。しばらく生体部分が麻痺したものの、機能停止や戦闘不能になるほどの効果は無かったはずである。そもそも彼の腕では接射でもしなければ当たらないと思う。

しかし彼女はそれを知ってか知らずか、温度が下がり赤くなった大剣を下ろし、こちらに背を向けた。

「それは恐ろしいですね。大人しく帰らせてもらいましょう」

ケテブ・メレリが背中 of ベルトに仕舞われた。身長より長い大剣の柄が頭の後ろで飛び出している。

「今回の件はゾハルに報告されます。賽は投げられたですよ」

彼女はしみじみとそう話すと、こちらを振り返ることもなく倉庫を後にした。

0103：回る炎の剣

私達は過激派の建物の庭を突っ切り、正門前の道に止めてある車へと向かっている。途中何度か武装した男達と遭遇したが、問答無用でシャルが沈黙させた。

「馬鹿、お前なんで来た?!」

「遅いから様子を見に来たんだよ!」

当初私は何があっても関わらないつもりでいた。しかし虫の知らせと言うのだろうか、何かこのままシャルに会えなくなるような胸騒ぎを覚え、びくびくしながら倒れていた男達を跨いで来たのだ。

「だいたい、なんでサイボーグがここにいるんだ? デボン氏はどうした?」

「あいつらは科学者達の救出に来たんだ。多分デボンはこの町を出てる」

つまり危険な状況にさらされただけで、何も得ていないということではないか。目頭を押さえた。

「止まれ! 人質を連れ出したのは貴様らだな!」

二人を覆うように背後から光が浴びせられ、興奮した声が拡声器から流れてきた。迷惑なことに、私達が科学者達を奪取したのだと勘違いされているらしい。

「止まれと言われて止まる馬鹿がいるかってんだよ……」

あっかんべーをしようと走りながら後ろを振り返ったが、次の瞬間には目を輝かせて足を止めていた。

「本当に止まる馬鹿がいたよ……」

シャルが嫌味を言っているが耳に入らない。

光源には人の3倍はある大きな影があった。人間によく似た直立二足歩行のフォルム、砂漠迷彩色をした複合装甲の鎧に、脇に抱えた90mmライフル砲。そう、人型汎用戦闘兵器『TETRAM』である。

「すごい……、エールクラッセを現物で拝むのは初めてだ。ああ、あのゴツイフォルムに、大気に響くモータ音……。エンジニアを名乗る者なら誰でも、あの極太い油圧シリンダを触りたいと思うよな？」

シャルに感想を聞こうと振り向いたところ、ちょうど迫ってきた手にアイアンクローをされた。

「痛い、痛い?!」

「選択肢は二つ。あたしにこのまま引つ張られるか、自分で走るか？」

親指と小指がぎりぎりど鈍い音を立てて、容赦なくこめかみに食い込んでくる。消えかねない意識の中で、彼女に引張られれば命の保証が無いことだけは理解できた。

「走る、走ります！」

手が離される。ただいま現世。泣く泣くTETRAMに背を向け、シャルと併走して車を目指す。

「発砲許可！」

男の声と共に、轟音を上げて斜め前の地面が吹き飛んだ。全身に砂が痛いくらいに浴びせられる。

「人間相手に90mmを撃ちやがった?！」

「人間じゃないのが一体混ざってるからな」

彼女が服についた砂を払いながら独り言のように呟いた。どうやら啖呵のことが気に入らなかったようだ。

「まだ根に持ってるのか? 悪かったって」

「――舌嚙まないように黙ってる、ッ！」

急に視界が反転し、体が軽くなった。シャルが私を担いで跳んだらしい。次の瞬間腹部に強烈な衝撃を受け、意識がとびかけた。

「あ……りがとう……、今度があったら、もう少しソフトに頼む……」

腹に食い込んでいた肩から地面に降ろされた。

石畳の敷かれたこの場所は、正門から出たところにある道のようなだ。すぐ側にレンタルした軽トラックが停めてある。

私は急いでキーを開け運転席に乗り込み、エンジンをかけた。シヤルが荷台に飛び乗ったのをバックミラーで確認し、シフトレバーを振りながらアクセルを勢いよく踏み込む。みるみるうちに壁と門が小さくなっていく。

「よしっ、これで一安心だな！」

窓用ハンドルを回してガラスを下げ、半身を乗り出して振り返り、こちらに背中を向けて座っているシヤルに話しかけた。

「——ガルガリンの状態はどうなってる？」

彼女が道の向こうを冷静に眺めながら、足元にある棺桶のような黒く長細いケースを指差す。

「んあ？ お前が持つてくと思ってフル充電しといたが、どうした？」

「今日のお前、不気味なくらい役に立つな」

バックミラーに、正門から出てくる人型の影が映る。この距離から人間の影が見えるはずがなく、だいたい門との縮尺がおかしい。頭部が首の付け根から回ってこちらに向き、単眼が車の周辺を眩しく照らしてきた。

「TETRAM?! あいつら、町の外まで追ってくるつもりか？」

！」

石畳を碎きながら、鋼鉄の肢体がゆっくりとしたピッチで走り出す。

しかしいくらTETRAMの中でも鈍足のエールクラッセとはいえ、このようなぼんこつの軽トラックなんかよりも遥かに速い。そしてこの障害物の無い幅広い道だ、あつという間に追いつかれるだろう。イフクに来てから――、いや、彼女と出会ってから本当に疫病神が憑いたのではないだろうか。

「車を止める、後はあたしがやる」

荷台で仁王立ちをしているシャルの姿を見て、その意味を理解した。言われた通りに道の真ん中で車を止める。

巨大なケースから姿を現したのは、同様に巨大な銃である。元来の銃とは異なり縦に裂けた、黒光りする方柱の砲身。前部グリップの立つくすんだ緑色の機関部には、円柱形をした六個のキャパシタが横向きにつけられており、銃床周辺には排莢口や後部グリップが密集し雑然としている。

シャルは銃床から伸びる同軸ケーブルを背中に繋ぎ、荷台から飛び降りた。1トンを超える重量を持つ銃が軽々と腹の前で構えられ、銃口がTETRAMに向けられる。

「あれはどこに人間が乗ってるんだ？」

「腹部だ。微妙に蓋みたいなのが見えるだろ」

運転席から降りて質問に答える。

「分かった。あたしの後ろにいる、衝撃波で死にたくなかったらな」別に冗談を言っているわけではない。14口径105mmレールガン、『ガルガリン』。キャパシタにあらかじめ溜められている電荷を一斉に開放し、砲身を形作る向かい合わせになった金属板の間に電流を流して伝導体の砲弾をローレンツ力により射出する。初速は音速の5倍に達し、20km先の目標物を破壊できるとんでもない兵器である。

TETRAMが上体を上下させ、ガシヤンガシヤンとショックアブソーバにより緩衝された金属音を立てながら走ってくる。ピッチこそ遅いが、ストライドの大きな脚でぐんぐんと距離を詰める。およそ距離は200m。

シャルがタイミングを取るように前のグリップを握りなおす。巨人と対面し威圧を感じているだろうに、至って冷静。距離は100m。

距離が50m前後になった時、ガルガリンがオレンジ色の閃光を散らし、文字通り火を噴いた。爆轟音と共に風が吹き荒れ、思わず腕で視界を覆った。

石畳の道に再び静寂が訪れる。後部から聞こえる、じやりつと砂を踏みしめる音。

「いつまで惚けてるつもりだ。さっさと運転しろ」

腕を下ろし顔を上げながら振り向くと、助手席のドアが音を立てて閉まる場所だった。

道の向こうには、頭部から胸部が綺麗に円形に消失し、膝をつい

て動きを止めているTETRAMの姿がある。うずくまるお宝に後ろ髪を引かれながらも、シャルの待つ軽トラックの運転席に戻った。

0104：無窮の始まり

寄りかかった柵の前を人や車が忙しく通り過ぎる。もうじき日付が変わるというのに、ここバダグートは光と騒音で溢れていた。地元や隣町のカルバフとは大違いだ。

私は今、興奮を収めようとホテルの外に出ている。シャルと同じサイボーグは現れるわ、銃を持った男共に追われるわ、T E R R A Mは壊されるわ、さすがに普段のんびりを通して私をも動揺せざるを得なかった。

結局デボン氏から話を聞くこともできず、収穫は何も無かった。しかしそれを残念と思うどころか、どこか安心したように感じているのは何故だろうか。

——体が冷えたようだ、シャワーを浴びなおすでしょう。

バスルームから出ると女性の優しい歌声が聞こえてきた。声の主はベッドの上にうつ伏せになり、気分良く足をバタバタしている。聴いたことのないメロディの曲だが、どうやら童謡のようでファントジックな単語が並んでいた。耳を澄ませ歌詞を聴き取ろうとする。

二つの頭を持った竜がいた

太陽に向く悲しげな顔

月に向く不機嫌な顔

ぎこちない様子で湿った道に行く

変な歌だと思いつつ聴いていたが、ふと歌声が止んだ。

「あたしのコンサート代は高いぞ」

シャルが足を下ろしこちらを振り返っている。

「その歌、自分で作曲したのか？」

「違う。友達が教えてくれた」

「……なんか、変な歌だな」

「あたしもそう思う」

てつきり怒るかと思っていたが、あっさり肯定された。

「——でも、好きだ」

一瞬見せた物憂げな色つばい顔にドキリとさせられる。シャルは
そう答えると、上体を戻して枕に顔を沈めた。

私達が出会い、このような奇妙な関係が始まったのは、ほんの3
ヶ月前のことである。

「お疲れ様です」

「ああ、よい週末を」

仕事のノルマを片付け工場を後にする。時刻は21時、既に工場長以外の姿は無い。足りない部品を外に買いに行ったせいでだいぶ遅くなってしまった。

乗り換えの終電は救いようが無く早い。息を切らせたみつともない全力疾走をして、車両に乗り込んだ。塾帰りの子供達が後ろ指を指しているが、こちらは野宿の瀬戸際なのだ、構ってはいられない。

エリート街道まっしぐらで、有名企業の研究に携わったのは3年前。しかし機械弄りがしたくて工学部に進んだのにも関わらず、工具に触らずパソコンと睨めっこをしている自分に疑問を抱き、たった半年で退社した。そして今働いているのが、家電から自動車、あげくは軍用機やTETRAMのモジュールまで受け持つこの修理工場である。給料は安いし体は油まみれになるが、とても充実した生活を送らせてもらっている。

駅で降りたのは私一人だけ。既に23時を回り、田舎町は静寂に包まれていた。初春ではあるがまだまだ夜は寒い。身を縮めて家への帰路を急いだ。

闇に溶け込んでいる二階建ての建物、都心まで1時間半もかかるこの片田舎の一軒家が私の家である。一人で住むには大きく無機的

で、帰宅するたびに寂しさを覚えていた。

玄関の照明が切れているようで電気がつかない。仕方なく鍵の先端を擦らせて鍵穴を探すが、どうもドアの様子がおかしいことに気がついた。携帯電話を取り出しライトで辺りを照らす。

「おいおい、なんだこりゃ……」

見えたのは、我が家のドアの無残な姿だった。引き剥がされ、ひしゃげ、変わり果てたドアノブが地面に転がっている。

新手のピッキングだろうか。いや、どちらかといえばブレイキングだろう。まだ家の中に泥棒がいるかもしれないと思うと背筋が凍った。

鞆からハンドガンの形をしているテザー銃を取り出した。テザー銃とは、撃つと先端から二本の電極が発射され、導線を通して対象に高電流を流すことができるスタンガンの一種である。これは私が手を加えた特別製で、服の上からでも呼吸を停止させるだけの威力を持つ——と思う。

ノブのあった穴に指を入れて引っ張ったところ、ドアは簡単に開いた。室内に電気は付いておらず、廊下も真っ暗である。

部屋の数はそのなりにあるが、普段使っているのはリビングと寝室とバスルームくらいだったりする。二階に至っては大掃除のときくらいしか足を踏み入れない、開かずの間（開けずの間）となっている。泥棒がいるとすれば金庫のあるリビングだろう。

リビングの前までそつと歩いていき、片手にテザー銃を構えたまま開いている手で電灯のスイッチを押した。天井中央に取り付けられた蛍光灯が、何度か点滅してから部屋の中を照らす。

銃口とともに顔を回して見渡す。自慢の大型有機ELテレビ、小さな机を囲むソファ、デスクトップパソコン、ダイニングキッチン

ン。荒らされた様子はない。金庫も蓋が閉じている。不思議に思いながら部屋の中に足を踏み入れた。

「ん？」

見慣れた空間に何か違和感を感じる。長期休み明け、不自然に仲良くなっていた同級生の男女みたいな、波乱を予感させる違和感。そう、部屋を突っ切るようにして、少なくとも朝見たときは無かった黒いコードがフローリングの上を這っているのだ。電源プラグはテレビ脇のコンセントに刺さっている。コードまたいでその行き先を追っていった。

コードの辿り着いた先、ソファーに横になって目を閉じている少女を見て私は息を呑んだ。艶やかな金色の長い髪、赤みがかった柔らかなそうな頬、華奢であろう小柄な体、何故かフランス人形——人の形をした繊細な無機物の印象を受けた。コードは彼女の背中に続いており、付け根は灰色の作業服の中に隠れている。家電でも背負っているのかと苦笑いしながら視線を再び顔に向けると、いつの間にか彼女の目が開いていた。

予感していた通りの青い瞳が、無垢にこちらを見ている。何かを考えることも叶わず沈黙する。先に口を開いたのは女だった。

「どこかで会ったことがないか？」

「え——」

がばつと目一杯に開かれた手が視界に映ったと思った次の瞬間、私は床の上に仰向けにねじ伏せられていた。

「気のせいかな。お前、運が悪いな——」

顔に被せられた手の向こうに、私にまたがった女の醜惡な顔が映っている。初めて発せられた女の言葉は、フランス人形などという可愛らしいものとは程遠い殺氣のこもったものだった。同様に姿に似合わない、とんでもない握力で指がみちみちと嫌な音を立てて私の頭蓋に食い込んでいく。

薄れていく意識と共に、確実に花畑は近づいている。悪あがきに手足を動かしたところ、左手の先に冷たい感触があった。

「それはお互い様だ！」

必死でテザー銃の引き金を引いた。転んだ際に偶然手元に落ちたその銃口は、女の腹部に当てられている。

「——ア?!」

私の上で、痙攣し体を仰け反らせる女。その隙に押しのけ逆にマウントをとった。

確かに電極はゼロ距離から発射されて突き刺さり、高電流を流した。泥棒は呼吸困難で意識を失い、警察を呼んで一件落着すると思っ

た。

「……こつのスカタン、死んでくたばれ!!」

が、女は鬼のような形相をして再び私の顔に手を伸ばしてきた。必死の抵抗も虚しく、容易にひっくり返され、容易に再び地面に叩きつけられる。少女にマウントを返されるとは我ながら情けないが、人間のものとは思えない異常な力だったのだ。

花畑がすぐ目と鼻の先にある状況で、何故か焦げ臭さが鼻についた。

「ああーっ?!」

女の叫び声と共に、突然圧迫から開放された。もう厄介事は勘弁して欲しい。殺すなら殺すで、一思いにやってくれ。

彼女は首を回して自分の背中を見ながら跳び回っている。よくよく見ると服が捲し上げられて、はだけた肌から先程のコードが垂れ下がっており、接点から黒い煙が出ていた。

どうやらコンセントで何かを使っているところにテザー銃で電流を流してしまった為、コードと機械の接点が過電流により損傷してしまっただけ。しかしそもそもなぜ人間にコードがつけられているのか。電源プラグを抜こうとしている彼女の姿を眺めながら首を傾げた。

「どうしてくれる?! 壊れちゃっただろ!」

コードを抱えて振り返った女は、わなわなと肩を震わし今すぐにも泣きそうな顔をしていた。相手が泥棒だというのにも関わらず、とても悪いことをした気分にはさせられる。

転がっていた仕事用の工具鞆を手元に引き寄せた。

「見せてみる、これでも一応技師やってんだ」

修理は壊れていた整流ダイオードを交換してすぐに終わった。原因は彼女の背中に埋め込まれている整流回路のショートだったが、体内に直流電流を引き込む仕組みを目の当たりにして私は余計に混乱させられた。

「それで、どういふことなのか説明してくれるんだよね？」

「――仕方ないな」

女は不機嫌面で膝を抱えてソファーに腰掛けていたが、しぶしぶ自分のことを話し始めた。

「あたしの名前はシャルロット。仲間からはシャルとかダアトとか呼ばれてた」

シャルという呼び方はともかく、ダアトとはファミリーネームだろうか。

「そうか、俺はアルバスだ。シャル、なんで背中にコードが繋がってる？ 何でお前は俺の家に入った？」

「扉を壊したのは悪かった、ごめん。襲ったのは――、正当防衛だ」

どう考えても過剰防衛である。高電流を流した自分が言える立場ではないが。

「ここに入ったのは、電気を充電する必要があったからだ」

「充電？ 何の？」

「お腹の中の充電電池だ。ああ、あたしはサイボーグだからな」

シャルはさらりと、とんでもないことを口にした。思考が停止する。彼女は行動だけでなく、発言も人類の斜め上を行っている。

「その顔、疑ってるな？」

「疑っているというか……。苦労したんだな、いい病院を紹介してやる」

幸い家の近辺に鉄格子のついたお洒落な病院がある。電話帳を仕舞った場所を思い出していると、不意に女がこちらに背を向け上着を捲し上げ始めた。みずみずしい白い肌が露になるにつれて、私の顔が紅潮していく。コノオンナハ、イカレテイル！

「馬鹿！ 早まるな！ 落ち着け！」

動物をなだめるように両手をかざしながら説得を試みる。しかし彼女は鬱陶しそうにこちらを振り向いた。

「馬鹿はお前だ。技師なら分かるだろ」

顔を逸らしながらも、ちらちらと様子を伺う。背骨のラインを囲うように描かれた妖艶なカーブ。微かに脇に浮き出しているあばら骨。とても女性的な体であるが、所々に銀色の物体が映える。それは彼女の体に埋め込まれている端子や拡張スロットだった。

「これは――」

「これは栄養タンクの挿入口。これがさっきの入出力ポート。これはメンテナンス用の穴だったかな」

彼女が窮屈そうに自分の背中を指差す。テザー銃がきかなかつたことや、人体への充電に数々のポート、これはさすがに信じざるを得ない。

「分かった。お前がその、サ……、サイボーグだというのを信じよう」

エンジニアである私が、大真面目にSFみたいなことを言わなければならぬのが気恥ずかしい。彼女は頷き、服を戻してこちらを向いた。

シャルの顔をまじまじと観察する。整った顔、長いまつげと小刻みに動く目、ふつくらとした唇、外見からは普通の少女にしか見えない。

「じろじろ見るな、こっ恥ずかしい」

「あ、いや、すまん……」

サイボーグといえば、あくまで改造人間であり機械ではない。いつもの家電の調子でしげしげと眺めてしまい、失礼なことをしてしまった。

「それで、そのサイボーグがどうして人様の家に充電しに来たんだ？」

「一から話すのは面倒だな」

壊れたドアノブや死にかけたことを『面倒』で片付けられてしまった。

「そつだな、あえて言うなら迷子になった感じだ」

「自分ん家がどこか分からないのか？」

「家というより、職場だな」

「自営業か。ネットで調べてやるつか？」

「無理だ、あそこは動くから。……じゃあな、世話になった」

動くとはどういうことかと悩んでいる側で、シャルがソファーから立ち上がり、リビングを出て行くとしている。

「行くあてはあるのか？ 泊まる場所は？ 金は？」

彼女の体に、一企業ではとても到達できない高度な技術が注ぎ込まれているのは一目瞭然だ。もう彼女に関わるべきではない、と警告している自分がいた。

「無い。——でも、どうしてもあの場所に帰りたいんだ」

けれど彼女を助けてあげたい、と望む自分もいた。

「なら、ここにいないか？ 充電もさせてやれるし、修理もしてやれる」

「え……、でも、金なんて無いぞ——」

「いらん。職場に帰れた後で、気が向いたら払ったらいい」

「それだとあたしの気分が悪い！ 目的は何だ？」

目的。私は何故彼女を助けたいと思ったのだろうか。——彼女の体に使われている技術に触れる為か、この家で感じていた寂しさを紛らわせる為か。明確にはできないが、それ以外にも何かが背中を押していた。

「それならこうしよう。——俺はお前の体を弄る。いつも修理して
るような家電とは桁違いのハイテクだ、金を貰うだけの価値がある。
——お前は俺を利用して帰る手がかりを見つける。どうだ？」

言い方を変えたただだが、彼女はその条件に満足したようだった。
先程座っていた場所に戻り、ソファーに腰を下ろす。

「相利共生だな。……分かった、それならここにいてやる」

「よし、それじゃあ契約の握手だ」

机をはさんで座っている彼女に手を差し出す。シャルは口をへの
字にしてこちらを眺めていたが、しぶしぶひんやりした指先で握っ
てきた。その後手を潰され悲鳴を上げるといふ、お約束なことにな
ったのは言つまでもない。

0104：無窮の始まり（後書き）

導入部分であるイフク編終了です。

次話予告としてはフロストランド編、脳味噌の話入ります。

0201：世界一平和な国

腕を高く上げ、背筋を伸ばして生暖かい空気を肺一杯に吸い込んだ。視界一杯に広がる青白く濁った湯、壮観だ。以前日本の温泉に行ったことがあるが、熱いわ狭いわでげんなりさせられた。それに引き換えこの世界最大の露天風呂は開放的な気分させてくれる。

「おい、恍惚な顔を見せるな。あたし達は観光に来たんじゃないんだから」

「そう言わずに楽しんどけ、折角フロストランドくんだりまで来たんだから」

シャルは溶岩の縁に寄りかかり、不機嫌そうに水面から頭だけを覗かしている。サイボーグの彼女が風呂にでもプールにでも入ることができるのは、進んだ防水設計のお陰である。しっかり洗浄すれば温泉の成分による腐食の心配もないはずだ。

イフクでの一件の後、私達は家でのんびりした時間を過ごしていたが、それも一時のことだった。シリアルを頬張り朝のニュースを見ていると、再びシャルが大きな声を出したのだ。

今回番組で取り上げられていたのは、科学者の名前ではなく世界平和ランキングというものだった。何を基準にしたか分からないが、世界三十八カ国の平和さを評価したものらしい。彼女はその一位に位置している国を指差し、そこに連れて行けと騒いだのだった。

「それで、今回は豚肉屋ケロッグさんか？ 鳥撃ち（ファウラー）さんか？」

「ん、ううん……」

曖昧な返事をして、視線を合わせようとしないうる。とても嫌な予感がする。

「まさか、名前も分からないと言わないよな？」

「……」

どうやら凶星らしく、びくびくしながらするような眼差しで顔色を伺ってくる。ここは怒りたいところだが、彼女としてもあれだけ期待していたイフクで何も得られなかったのだから、気持ちを汲んでやるうと思った。

「——怒らないのか？」

「……3日だ。3日かかって何も手がかりがなかったら帰る」

シャルの表情が少し明るくなった気がした。

「ここに来たのは、一応理由があつたからなんだろう？」

「うん、顔を合わせる度にお国自慢をしてくる科学者がいた」

有名な科学者であれば、どこかに写真が出ているかもしれない。急にシャルが立ち上がり、ワンピース型の白い水着がお目見えした。透き通った髪に白い肌の彼女は余計に眩しく見える。消極的な彼女に代わって選んだのは私だが、親切心からビキニはやめておいた。——親切心から。

「先が上がってる。——この国は、何かいけ好かない感じがする」

「いけ好かない感じ?」

「よく分からないけど、活気が無いというか、人間らしくない」

彼女の視線を追って辺りを見渡す。入浴者はほとんどが若者である。楽しげにお喋りをしていたり顔に泥を塗りたくったりして、とても活気が無いようには見えない。

「そうか?」

「とにかく先に上がってるからな」

彼女はお湯から上がり、バスタオルを巻いて更衣室へと行ってしまった。その途中、首元に古傷のような跡があるのを何気なく見つけてしまった。あの小さな円いミミズ腫れは、銃創ではないだろうか。戦闘用のサイボーグなのだから古傷があっても不思議ではない。しかしそれとはどこか違う気がした。

あまり彼女を待たせるわけにもいかない。最後に首までお湯に浸かった。

「人間らしくないって、……シニールだな」

温泉でリフレッシュした後、ここにいる間の拠点となるホテルを探す為、首都であるキャビークレイに来た。なんでも、この都市圏に国民の半分以上が集まっているらしい。目的の科学者は案外簡単

に見つかりそうな気がしてきた。

またここは世界経済の崩壊以前から、地熱のみでエネルギーを生み出している珍しい場所でもある。時間があればエンジニアとして地熱発電所の見学もしておきたい。

隣で不吉なことを呟いているのはシャルである。

「この町は、特に嫌な感じがする」

「何だ、まだそのネタ引きずっていたのか……」

白い壁に赤と青の屋根という可愛らしい家の多い町並みを歩く二人。町行く人を眺めては顔をしかめるシャル。そんな彼女を見て、田舎者と思われないかとそわそわする私。

ふと街灯についている黒い円柱形の物体が気になった。よくよく見てみるとそれは監視カメラで、街灯どころかそこら中の構造物に目立たないようにして取り付けられている。民家の塀、道路標識の鉄柱、あげくに公衆便所の入り口まで。世界一平和な国とは、監視の行き届いた国ということなのだろうか。シャルではないが、いけ好かない感じがした。

「地図によると、あそこに図書館があるらしいぞ。行ってみるか？」

「——うん」

頷いた彼女を引き連れ、大通りから逸れて白いレンガ造りの綺麗な建物に足を踏み入れた。

図書館の中は外見と同様に清潔感のある、一階と二階が吹き抜ける開放的な空間だった。利用者は物音一つ立てずに机に向かって本を読んでいる。案内板の前で足を止め、科学者の写真が載っている本のコーナーを探す。科学雑誌、専門書、写真集——には無いが。

「雑誌や専門書は二階みたいだな」

周りに合わせて小声で話すが、あまりに静かな環境にそれすら気後れした。頷くシャルと共に、いかにも高級そうな絨毯の敷かれた階段を上る。

科学雑誌に目的の人物は見当たらず、7列分もの本棚に詰められた専門書をあさるはめになった。分野が分かればもっと楽な作業になるのだろうが、あいにく情報は顔だけである。T E T R A M制御論の本を見つけ有頂天で振り向いたが、真剣に探しているシャルの姿を見て棚に戻した。

ふと背より高い場所にある本を取ろうとして、各本棚に備え付けられた監視カメラに気がついた。本を盗まれるのを防止する意味で仕方がない気もするが、それなら防犯ゲートを設置すれば済むはずである。首を傾げていると袖を引っ張られた。

「見つけた、こいつだ」

シャルの指差す写真を見る。七三分けで緑の太い眼鏡をかけた、いかにも学者風な人物。名前にはブラギとあり、キャビークレイ郊外で脳工学の研究をしているらしい。研究所の電話番号と住所も載

っていたので手帳にメモした。

「あなた方が指差されていたの、ブラギ氏ですよね？」

二人が声のした方を振り返る。そこにはラフな格好をした現地人らしき男がニコニコして立っていた。落ち着いた容姿、年齢は40前後だろうか。

やぶから棒にしゃしゃり出てくるので、ため息をつくように生返事をした。

「これは失礼、私は彼の知り合いでクリスと言います。彼に用事があるのだしたら、私が御案内しましょう」

クリスと名乗った男は、ポケットから車の鍵を取り出しウィンクした。啞然としている私を他所に、シャルが顔を明るくして彼に近寄る。

「本当か？」

「ええ、ここで会ったのも何かの縁ですから」

本気で送ってもらうつもりでいる彼女から連想されるのは、飴を貰ってついて行ってしまふ小学生。彼女の肩を引き、前に立った。

「……いや、違います。私達はただ、この中で誰が一番イケメンかチェックしていただけなんですよ」

男にそう言って微笑みかけると、何か言いたそうな顔をしたが、すぐに踵を返して私達の前から姿を消した。

後ろから不穏な空気と殺気が漂ってくる。

「馬鹿か、お前は。折角連れていってもらえるチャンスだったのに」
彼女はまた不機嫌に戻っていた。その態度の違いはどうか知らないものか。

「馬鹿はお前だ、よく考えてみる。どこの世界に、知り合いの写真を指差している外国人を案内したがる奴がいる？ だいたい、なんで俺達がそいつに会おうとしているのを知ってるんだ？」

「それは……」

口ごもっているシャルの背中を押す。研究所の場所は分かった。もう図書館に用は無い。

「とにかく、お前の言ってた通りこの国はどこかおかしい。さっさと用件を済ませて帰るぞ」

キャビークレイから南東に位置する山の中に、隠れるようにして研究所はあった。コンクリートでできた平べったい屋根の建物には窓が無く、研究施設にしてはどれも胡散臭い。どちらかというと収容所といった感じだ。

建物に近づけないように『立入禁止』と書かれた金網が張られている。周りをウロウロしていたが、どうもチャイムやインターホンという類のものが見当たらなかった。来客を歓迎するつもりはないという心の現われだろう、私は助走をつけて柵を跳び越えた。

「待ってくれ、今登るから！」

後ろからアルバスがついて来ている。今まで目的地に入る時は絶対になかったくせに、どういう心境の変化があったのか。柵の上部に巻かれた有刺鉄線を跨ぎながら、醜い声で小さく悲鳴を上げていた。

肩に背負っていた長方形のケースを地面に下ろした。この辺り一帯には綺麗に正方形のタイルが敷き詰められており、周囲を囲む雑多な木々とミスマッチを生み出している。

「すまん、待たせたな」

「たくさん待った。……なんでついて来たんだ？」

フェンスから飛び下りた彼は、リュックサックを背負い汚い軍手をはめ、まるで山登りにでも行くかのような格好をしている。

「イフクに行った後いろいろ考えたんだけど、待ってるより一緒に行った方が気楽だと思うんだ。いざとなったら置いていっても構わない、それならいいだろ？」

「——ふん、勝手にしろ」

ガルガリンを再び背負い、建物の入り口に向かう。研究所にしては小さい一階建ての建物だが、このタイルの下に広がっているのだろうか。分厚い金属の板で固く閉ざされた入り口は、カードキーが必要のようで脇にリーダーが備え付けられていた。

「アルバス、何とかならないのか？ 映画でよくあるだろ。パソコンを繋げて——」

「俺は技師で、泥棒じゃない」

彼はやれやれと首を横に振っている。肝心なときに役に立たないなど、大きなため息をついた。

「ガルガリンで突き破る。どいてろ」

扉に手を触れ、素材を確かめようとした瞬間だった。

「——ッ?!」

何がどうなったのか分からない。光が見えたかと思うと視界が暗転し、気がつけば私は町の中にいた。扉に触ろうとして手を伸ばしたままの姿勢のまま。

「おい、アルバス——?!」

返事は無い。辺りからは彼も、研究所も、つい先程まで抱えていたガルガリンまでもがすっかり無くなっていた。私の声に反応して振り向いていた幾人かが、顔を戻し何事も無かったかのように通り過ぎていく。

片側二車線の道路で飛ばしている車を横目に、レンガの敷き詰められた歩道を歩く。どこだかの国旗が美容院の看板のようなコントラストの建物が立ち並ぶここは、どうやらキャビークレイの街中らしい。何故私がここにいいのか。あの研究所の扉には畏が仕掛けられていて、触った者が街に飛ばされる仕組みにでもなっていたのだろうか。なんせサイボーグが作られるご時世だ、そんな仕組みがあってもおかしくはない。

ここに来てから度々人とすれ違っているが、不思議と以前感じていた『人間らしくない』という感じがまったくしなかった。

同じような町並みが続くせいで、同じ道を歩いているように感じる。交番の前で突っ立っている警官にここがどこか尋ねることにした。

「すみません、道に迷っただけです……」

警官は偉そうに後ろで腕を組んだ、40歳代くらいの白人男性だった。彼はこちらを振り向くと、苦笑いしながら馴れ馴れしく私の頭に手をのせてきた。

「お嬢ちゃん、ここは迷うような場所じゃないだろう?」

現地人にとっては迷わない道なのかもしれないが、私には全部同じ道に見えるのだ。馬鹿にされたように感じたので、手を振り払って散策に戻った。さらに言えば毎度のことだが、この身長と顔のせいで子供だと思われるのも気に食わない。

嫌な気分で歩き続けていたが、ふと顔を上げるとどこかで見た交番が目に入った。奇妙なことに、その前には先程と同じ警官が立っている。真っ直ぐ歩いてきたつもりだったが、何故奴の顔を再び見るはめになっているのか。

「お嬢ちゃん、本当に道に迷っているのかい?!」

「そう言ってるだろ」

こちらに気がついた彼にひどく驚いた表情をされ、少し心が傷ついた。

「イドウンさんと呼べ。ひよっとすると昨日の彼女と同じ訪問者かもしれない!」

警官が周りにいた一般人に叫びかけると、彼らは頷いて散り散り

になっていった。

「イドウン？ 訪問者って何だ？」

「それは僕からは話せないな。ただ言えることは、君はイドウンさんに会わなければならない。君の為にも、僕達の為にもね」

いつの間にか辺りが静かになっている。原因はすぐに分かった、先程まで車道で絶えず風を切っていた車が一台も走っていないのだ。

「こんにちは。初めまして、シャルロット」

背後から声がかかった。

「何であたしの名前を――？」

見返ってその女と対面する。ぞんざいに黒い髪を後ろで縛っているが、清楚で綺麗な人だった。カジュアルな私服の上に白衣を羽織った奇妙な格好をしており、ポケットに両手を入れている。

「ごめんね、ちょっとだけ記憶を拝借したの」

記憶を借りたとはどういうことだろうか。とりあえず普通の人間ではないようだ。足を開き拳を握って構える。

「安心して、危害を加えるつもりはないから。……ええと、自己紹介がまだだったよね、私はイドウン」

女がポケットから出した手を自分の胸の上に置いて名乗った。言葉の通り攻撃する素振りを見せないの、しぶしぶ拳を下ろす。な

なんとなく彼女なら私がここに来てしまった理由を知っている気がした。

「記憶ってどういうことだ？　ここは本当にキャビークレイなのか？」

「それは追々話したいと思うけれど、その説明の前にこの国で行われている、ある恐ろしい実験のことを知って欲しいの」

「ガルガリンで突き破る。どいてろ」

ガルガリンのケースを担いでいるシャルが、開いている方の手で扉に触れた。

「——ッ?!」

壊れた人形のように、急に彼女の全身が弛緩する。前屈みに崩れ落ちていく彼女の肩を引き、共に倒れるケースの下から引っ張り出した。

「おい、シャル?!」

ゆっくり地面に下ろしたが、目を閉じてまるで死んでいるように見える。扉に何か恐ろしい仕掛けが施されていたのだろうか。

故障や電池切れが起きていたら彼女の生命にかかわる。恐る恐る

口元に耳を寄せると排気音が聞こえてきた。どうやら生命維持に問題は無いようだが、だとすると彼女の身に一体何があったのだろうか。

「——セフィ……は心……よね……」

ふと扉の向こう側から男の声が聞こえてきた。どうやら複数の研究員がだんだんとこちらに近づいてくるようだ。

「やばいな……」

このやたらと横に広い建物に隠れるような場所はない。ましてやここには動かなくなったシャルがいるのだ。

この際ガルガリンは諦めざるを得ない。シャルの体を起こし、滑らせるように背中に乗せた。体の割りに重いなどと、口が裂けても言えない。

彼女を背負ったまま辺りを見渡す。タイルの敷かれた地面のだいぶ向こうに、苦勞して登った柵がある。走って逃げるのも絶望的だ。リュックサックの中には例のテザー銃が入っているが、一人と戦うことを想定したもので、戦闘も無理だろう。

「くそっ、また疫病神か——」

足音が止まり、扉が開いていく。広がっていく隙間を凝視しながら、覚悟を決めて息を呑んだ。

白衣の男二人が見え———と思った瞬間、私はシャルとガルガリン共々コンクリートの上に横になっていた。

「……え？」

「静かにして下さい」

人差し指が向けられている先に、横に開いた柵から出て行く先程の研究者達がいた。見下ろすような視点のここは、先程の建物の屋根の上だと気づく。どうやら片膝を立てて座っているこの人物が、私達を助けてくれたらしい。

「すまん、助かった。それより、あんたは——」

指を指していたのは以前イフクで見た、白い髪を後ろで纏めた背の高い女だった。彼女の背中には身長より長い大剣が背負われている。

「私はケセトです。あなたがダアトの面倒を見ているという技師ですね？」

確かシャルが以前、ダアトと呼ばれていたと言っていたと思う。

「あ、ああ。アルバスだ」

「——まったく、あなた方は私達の気も知らないで、のこのこと……」

ケセトがシャルの顔を覗き込み、深々とため息をついた。不出来な妹を心配する、しっかり者の姉のような表情をしている。どうやら戦うつもりではないようだ。

「なあ、シャルが意識を失っちまったんだ。何か知らないか？」

「それはおそらく、ギルグルとこの施設に関係があるのでしょうか」

「ギルグル……？」

「ダウトから何も聞いていないのですか？ ……まあ、いいでしょう。M P C I『ギルグル』、汎用改造歩兵、つまり私達サイボーグのことです」

ギルグルとは、ガルガリンやケテブ・メレリと同様にサイボーグの機構自体につけられた名称らしい。

「なんでサイボーグと建物が関係あるんだ？ あんたは無事みたいだが」

「私も先日あちらの世界を訪問しましたから。——この研究所で行われている研究の内容をご存知ですか？」

「脳工学だろ。確かバイオコンピュータとか……」

「はい。正確にはバイオコンピュータの中でも異質な存在、『生体コンピュータ』です」

「生体コンピュータ？」

コンピュータは目的に応じて原理の異なるものが使用される。一般家庭にも普及した汎用機のノイマン型や、暗号解読やNP問題に特化した量子型。そしてニューロンの挙動を真似た回路を用い、人エニューラルネットワークを構築することで人間の脳のように融通を利かせることのできるバイオコンピュータである。だとすれば生体コンピュータとは生物の脳そのものではないか。

彼女は私の心を読んだように相槌を打って話を続けた。

「確かにここ数十年の科学技術の発展は目を見張るものがあり、バ
イオコンピュータに関しても人間の脳と同等かそれ以上という、す
ばらしい性能を持ったものが作られています。しかしあくまでそれ
は性能上の指標で、交叉や突然変異を遺伝的アルゴリズムというプ
ログラムにより起こしているそれらは人間の脳とはまた異なったも
のなのです」

「ちょっと待て。コンピュータなんて人間の脳と違おうが、性能が
高い方が良くないか？」

パソコンのCPUの性能競争などはその最たるものだ。

「多くの場合はその方が効果的でしょうね。しかしこの研究所で行
われている実験では、人間の脳に近い……、いえ、人間の脳と同じ
性能を持っている必要があるのです」

ケセトが言葉を切る。私は息を吞んで続きを待った。

「生体コンピュータ、『デウス・エクス・マキナ』。ヒトを傀儡の
ごとく思い通りに動かそうという、神の所業を彷彿させる計画の要
です」

「ヒトを動かすだって——?!」

大笑いしようと口元を吊り上げたが、引きつった笑いになってい
た。『人間らしくない』、シャルの言葉が蘇る。

「ヒトは自身が自分の意思だけで行動していると思っっていますが、
それは案外当てにならないものです。有名どころで言えば、接客業

は話す相手との立ち位置を上手く利用していますし、飲食店は壁の色で人の流れを変えている。私達は知らないうちに外からの情報の影響を受けているものなのです」

「そうだな……」

「生体コンピュータでシミュレーションすることでその人間の行動を予測し、人工的に与えられた入力により最適な挙動を行わせる、そうして制御されているのがこの町です。犯罪は心理的段階で未然に防止され、計算された道を走る車は事故を起こさない。周囲の都市も自ずと意識し、結果生まれたのが世界一平和な国」

町中に仕掛けられていた監視カメラを思い出す。あれは町の住民全ての状態を監視していたとでもいうのだろうか。しかしそうなる大きな疑問が生まれる。

「そんな馬鹿な！！　いくら小国の都市とはいえ、20万近くの間があるんだぞ。脳の構造なんてシミュレーションしていたら、アホみたいにとでかいコンピュータが必要だろ！」

「ええ、ですからここにそれがあるんです」

ケセトはしれっと下の建物を指差した。

町の人間の行動は監視カメラによって撮影され、地下に張り巡ら

されたケーブルから研究所の地下にあるデウス・エクス・マキナという生体コンピュータに送られる。そこで住民達のシミュレーションが行われ、最適な結果をもたらす入力が再びケーブルを通して町中の電子機器や仕掛け人に送信される。

フロストランドに来てから感じていたいけ好かない感じ、その意味がようやく分かった。

「それにしても、お前詳しいな」

「ああ、私はここの研究員だったからね」

白衣の件も納得した。

「だったって、今は違うのか？」

「研究の半ばでこの国が狂気へと向かっていることに気がついて、所長に研究の停止と廃棄を提案したの。だけど時既に遅くてね、政治や世界の機関を巻き込んだ研究は一個人の意見で止まるものではなくなつてた。私と賛同してくれた数人の研究員達は皆クビになっちゃったってわけ」

「狂気、か。一部の人間に知らないうちに操られているなんて、確かに狂ってるな」

「シャルロット、こうして顔を合わせることのできたあなたにお願いがあります」

イドウンが姿勢を正して改まる。思わずこちらも背筋を伸ばした。

「あたしに？」

「――生体コンピュータを、キャビークレイを縛るプログラムを壊してください。私達は訳あって間接的に手伝うことしかできないけれど、出来る限りのことはさせてもらうつもりです」

キャビークレイにはゾハルの場所を聞き出すために来ただけで、別に世界平和の為に各国を訪れている訳ではない。しかしそのような悪趣味な実験が行われているのを聞いて、知らん振りする気にもなれなかった。

「そうだな、ブラギに会うついでになら壊してやってもいいぞ」

「ありがとう、あなたならきっとそう言ってくれると思ってたわ」

警官や周りにいた人間達が、ガッツポーズをしたり歓声を上げたりしながら近づいてくる。正直、少し鬱陶しい。

「早速で悪いんだけど、研究所まで送ってくれるか？」

「それは大丈夫。目を閉じて自分がいた場所をイメージすれば戻るはずよ」

頭の上にハテナマークを浮かべる。どういう理屈かは知らないが、目を閉じて研究所の扉の前をイメージしようとした。

「あなたが来る前に、もう一人ここに来た人がいたの」

イメージを止めてイドウンの顔を見る。

「ライラという名前の女性だったけど、知り合いなんでしょう？」

ライラ。セフィロト部隊の元同僚、ケテブ・メレリの使い手、ケセトの本当の名前である。どうもイフクの一件といい、私は彼女と縁があるらしい。

「あいつもここに……」

「彼女にも頼んだんだけどね。気持ちはよく分かるけど、研究所を守るために来たのであってそれはできないって、ここから去っていったわ。彼女の言葉が本当ならあなたの邪魔をしてくるはずよ。気をつけて……」

どうやらあの研究所はゾハルの管轄地らしい。それにしてもセフィロト部隊を警備に使うとは、よっぽど重要な拠点なのだろうか。

「分かった。あいつには借りがあるからな、今度こそ泣かす」

再び目を閉じてイメージを始める。有刺鉄線の巻かれた金網、窓の無いコンクリートの建物、鋼鉄の扉。

ゆっくり目を開ける。視界の横からアルバスが心配そうな表情をした顔をよきつと出していた。

0203：深淵

「気がついたか！」

そう言うところアルバスは雲の無い空をバックにして、情けない顔に微笑を浮かべた。

「気がついた？　ここは……？」

上体を起こし地面にコンクリートの張られている一帯を眺める。
どうやらキャビークレイの街中ではないようだ。

「ここは研究所の屋根の上で、お前は10分ほど意識を失ってたんだ。大丈夫か？」

意識を失っていたとはどういうことだろうか。私はつい先程までキャビークレイでイドウンと名乗った女と話しており、生体コンピュータを破壊してくれと頼まれた。まさかそれら全てが夢だったとでもいうのだろうか。

脇にガルガリンのケースが横たわっているのが見えた。

「屋根の上まで、よくガルガリンを引き上げられたな」

普段私が担いでこそいるが、1トン以上の重量があり、普通の人間には持ち上げることすら困難なはずだ。

「それなんだけどな、ケセトさんに助けてもらったんだ」

「ケセト——?!」

アルバスが言うには、私が入り口の前で突然意識を失い、研究員に見つかりそうになったところをケセトにガルガリン共々屋根の上に運ばれ、危機を脱したらしい。その後彼女は私が意識を失った理由を話して姿を消したということだ。

「それで、あたしが倒れた理由は何て言ってた？」

「生体コンピュータと脳の信号が、まるで共鳴をするように干渉し合ったんだと思うってさ」

「……どういう意味か説明しろ」

「悪いな、俺にもさっぱり分らない」

ともかく、そう何度も気を失ってもいられない。プラグを探して早々にここを去った方が良さそうだ。ガルガリンを担いで立ち上がった。

「迷惑をかけたな」

「いや、俺は何もできなかった。お前の言う通り足手まといだよ」

俯く彼の肩を軽く叩いてから下に飛び降りた。このタイルの下にキャビークレイへと繋がるケーブルが、電線の地中化みたいにして縦横無尽に張り巡らされているのだろっ。入り口は依然厚い金属の扉で遮られている。

（シャルロット、聞こえる？）

ガルガリンのケースを開けていると、どこかで聞いたことのある女の声が聞こえてきた。

「どこだ?!」

声の出所を突き止めようと辺りを見渡しながら叫んだが、私達以外の人影は無い。アルバスが人差し指を口に当てて、必死に静かにするようにジェスチャーを送ってきた。どうやら彼にはこの声が聞こえていないらしい。

（私、イドウンよ）

「イドウン？　じゃああの夢は本当に――」

（ええ、あの時は五感を含めた意識がリンクしていたけれど、今は会話に関する領域だけを干渉させているの。だから口に出さなくても頭の中に思い描けば会話ができるわ）

状況が理解できず口を半開きになっている前で、カードリーダーのランプが緑色になり扉が勝手に開いた。

（建物の中は私が案内するわ。デウス・エクス・マキナの破壊は頼んだわよ）

私達は建物内に備え付けられた非常階段を下っている。既に10分近く歩いているのだが、踊り場の柱に書かれた白い数字はひたすら増え続けていた。

「良かったな、関係者が手伝ってくれるなら生体コンピュータもブラギ氏もすぐ見つかるだろ」

「……うん」

階段を下りる途中でアルバスにも私が聞いた話のことを話した。彼は奇妙な支援のことを喜んでいるようだが、私はどうも胸騒ぎがしている。イドウンは本当にただのクビになった研究者なのだろうか。あのキャビークレイによく似た場所はどこだったのだろうか。

（その階にある搬入室の奥にデウス・エクス・マキナがあるわ）

B26と書かれた最下層のドアが、独りでにガチャリと音を立てた。息を呑みドアノブを回しながら引く。

搬入室と呼ばれた部屋は、鈍い光沢の金属板で六面を覆われた薄暗く広い空間だった。壁際にはダンボールが乱雑に積み重ねられている。私達が体を向けている正面の壁には、天井まで届く高さを持った巨大な扉が重々しい存在感でそびえ立っている。

そして、部屋の真ん中に立つ長身の女。

「ケセト——」

彼女は無言のまま上体を屈め、背中から大剣を抜き取った。

ここがゾハルの研究施設なのだとすれば、彼女がここにいる理由も説明がつく。私達は施設に害をなす外敵で、彼女はそれらを蹴散らす番犬なのだ。

「ダアト、やはりあなたはイドウンと手を組みましたか」

「だったらどうした。その後ろにある生体コンピュータ、ぶっ壊して破壊してやる」

「どうしてそんなことを……。あれを壊せばイドウンも、他の取り込まれた人達も死ぬことになるのですよ？」

「ん？ 人間を傀儡にするなんて馬鹿なこと、すぐに止めさせるに決まってるだろ！ お前は何も思わないのか、ケセト！」

「私はここを守る為に派遣された一兵士に過ぎません。思うも何も、私はここを死守するだけです」

ケテブ・メレリの刀身が白い光を放っている。イフクでの殺されかけた記憶がよぎるが、今回は頼もしい相棒もちろんアルバスのことではないがいるのだ、負ける気はしない。黒いケースの金具を外し、後部グリップを掴んでガルガリンを引きずり出した。キャパシタは六個全てが水平に突き出しており、フルチャージになっていることが分かる。

「先に言っておきます。——今回はゾハルからあなたを殺す許可を受けています。手加減するつもりはありませんので悪しからず」

「……アルバス、先行って運動後のお茶でも汲んどけ」

背中に同軸ケーブルを繋ぐ。手が増えたような不思議な感覚、それももう慣れた。前部ブリップを左手で握り、機関部を腹の前に固定して銃口をケセトに向けた。剣を彼に向けるだけの余裕を与えるつもりは無いが、煽りを食うことは十分に考えられる。

「そうさせてもらうぞ。無茶するなよ?」

大剣を構えたケセトと対峙している横をアルバスが駆け抜けていく。余所見をしたら横面に砲弾をかましてやるうと思っていたが、彼女は視線を向けることすらせずこちらを冷やかに睨んでいる。やがて扉の開閉する音を立てて彼は姿を消した。

前部グリップを握りなおす。先日 of T E T R A M と違い的小さい分、発射するタイミングを取るのが難しい。

「ガルガリンのことはよく知っています。確かに破壊力は11の武器の中でも1、2位を争うものですが、次弾の充電に10分もかかるのが近接戦での大きすぎる弱点です。——よく狙ってくださいねそれを外した時、あなたの死が決まるのですから」

「外す? 誰に言ってるんだ。あたしはリンゴを頭にのせた子供の眉間を撃ち抜く、ウィリアム・テルも真つ青なダアト様だぞ」

こちらから地面を蹴って距離を詰める。彼女は射線を外すため弧を描いて体を捌き、その際引いた大剣を縦に振り下ろしてきた。そのリカッソを、ガルガリンを振り回して砲身で薙ぐ。光の刃が剣筋をずらされ、床に剣先を食い込ませた。

「——ッ! 銃で殴るなんて下品な……」

大剣が戻される前に銃口を彼女の胸に向ける。しかしガルガリンの引き金となるギャップに電圧をかける前に、砲身が勢いよく上に弾かれた。ケセトの黒いミリタリーブーツが眼前で静止している。

「足を使う剣士に言われたくないな」

私が喋ったのと同時に、大剣が袈裟に切り上げられた。上体を捻りながら屈め、大気を伝わる熱を感じながらも避ける。一度は虚をついたが、このまま彼女の攻撃圏内に残っていても危険にさらされるだけだろう。飛び退いて再び距離をあげようとする。

急速に前に流れていく周囲の風景の中央で固定されているケセトの姿、その手の中にあるケテブ・メレリの刀身が二つに裂けているのが見え、目を疑った。刃が垂直に可動したことで柄の延長線に小さな銃口が覗く。

「くっ?!」

ガルガリンを振り、その反動を利用して上体を反らす。大剣から発射された5・56mm弾がジャケットのファスナーを弾き、脇腹部分をかすって飛び去って行った。短い銃身のお陰で少し射線が逸れており、奇跡的に怪我はなかった。

「なんだそれは? 見たことないぞ」

上体を起こしてケセトに尋ねた。あれは銃として使うには役不足な小口径と短銃身ではあるが、追撃に使われると厄介だろう。

「当然です、あなたに見せたのは初めてですから」

再び刃の根元が回転して噛み合い、刀身が白く光を放つ。

今度はケセトから剣を突き出しつつ踏み込んできた。銃口を下に向けたまま横に跳んで避ける。

「どうしますか? 退けば今度こそ風穴があきますよ」

続いて薙がれた大剣を屈んで避けた。この体勢で刃が切り返され振り下ろされたら、もう避けることはできない。砲身を起こし銃口を天井に向けた。彼女が戸惑った一瞬の間にトリガーとなるギャップに電圧をかける。ガルガリンが上に向かって火を噴き、天井に砲弾が食い込んでケセトの頭上に瓦礫が崩れ落ちてきた。

「こんな小細工——！」

彼女が頭上で大剣を回し、落ちてきた金属片を片っ端から融解させて吹き飛ばしていく。最後の欠片を華麗な上段蹴りで壁に叩きつけ、涼しい顔でこちらを振り向いた。

「私の勝ちです、ダアト！」

勝利を確信して張り上げられたケセトの声。

ケテブ・メレリが白い軌跡を描きながら振られる。私は冷静にガルガリンの銃口を前に向けた。キャパシタは前方の2つが斜め上を向いており、残りの4つは未だに水平に立っている。

二発目の咆哮。白く光を放つ刃が回転しながら壁に突き刺さった。煙を上げて急速に灰色に変わっていく。

「え……？！」

ケセトは柄とリカッソだけになった大剣を呆然として眺めている。

「何故……、連続で撃てたのですか？」

「お前と一緒にだ、初めて見せたんだからな。こいつの正式名称はE M R G - 11A1、出力を三段階に調整できるよう改造された、い

わばマイナーチェンジ版ガルガリンだ」

確かに当初のガルガリンは初速 2 km/s の一発ごとに10分の充電を必要としていた。そのままだったら先程のケセトの攻撃を防ぐ手段も無く、この身長をさらに半分にされていただろう。考えただけでもぞつとする。しかし契約に従ってアルバスに改造されたそれは、電力量を分割することで初速 215 m/s の砲弾を三発連続発射できるようになっていたのだ。

「来い、武器が壊れたくらいで気抜けするなよ」

沈黙している彼女に戦いの続きを促した。

0204：機械仕掛けの神

三階分ほど吹き抜けになっている広く高い部屋の中央に、デウス・エクス・マキナはあった。見上げるほど巨大な、白濁した液体で満たされている円柱形の水槽に、樹根のように黒いチューブが張り巡らされている。薄暗く照らされたそれは、意思を持っているかのようになんとも不気味だった。

「やあ、アルバス君」

声のした上階に、手すりに寄りかかりこちらを見下ろしている男を見つけた。オールバックの髪を後ろで縛っており、覗く白い歯から爽やかそうな印象を受ける。

「ブラギ——じゃないよな？」

「俺はレウム。セフィロト部隊の指揮と技術副部長を兼任してる」

レウムといえば、イフクでケセトと共に行動していた軍人と聞いている。軍人と技術者の掛け持ちとは珍しい。セフィロト部隊というのはよほど特殊な集団なのだろう。

「あんたもサイボーグなのか？」

「いいや、俺は口を出したりメンテナンスするのが専門でね。――」

ブラギは上の管理室にいるはずだが、何しにここに来た？ 見学じゃないんだろ」

「お前らのところから預かってるうちのお嬢さんが、この気色悪いもんを壊したいって言うからな」

「ダアトが？ そうか、あいつはこいつのことを知らないから……」

男が言葉を切ってデウス・エクス・マキナを眺める。戦いに意気込む訳でも、怒っている訳でもなく、どこか物憂げな表情。

「気色の悪い、ね。今のお前にはそう見えても仕方ないか。——いいだろう、その生体コンピュータがどうやって作られているのか話してやる」

ケセトが背中から同軸ケーブルを切り離し、無力化されたケテブ・メレリを床に転がした。柄のちんけな銃では戦いにならない、それが最善だろう。

先程の2発でガルガリンの電力量は残り3分の1になった。あとはデウス・エクス・マキナの破壊に残しておきたい。私も同様にこっぴどい相棒を足元に置く。

「そこまでして生体コンピュータを……、取り込まれた人々を殺したいのですか？」

彼女との噛み合わない会話が、戦い始めてからずっと引つかかっていた。

「取り込まれた人々？ 何の話だ？」

「それを知らないで——、知らないであれを壊そうと——?!」

ケセトが大振りなストレートを放ちながら跳び込んで来る。歯を噛み締め、眼をギラギラと光らせた、以前対峙したときとは打って変わって感情的な顔。

「それを説明しろって——」

彼女らしくない荒い一撃を顔の前で構えた腕の外側で反らし、右の拳で横面を殴りつけた。

「——言ってるんだろぅが!!」

倒れこんだケセトの前に立ち、襟を巻き込むように掴んで顔をこちらに向けさせる。口の中を切ったようで、唇の端から血を垂らしていた。

「デウス・エクス・マキナ……、生体コンピュータは人間の脳と同じ挙動を示すことが絶対条件です。しかしいくら科学技術が発達したとはいえ、完全にそれと同じものを創り出すことは不可能でした」

彼女が話をしながら私の手に自分の手を被せ、手首を捻って引き剥がしてきた。

「でも、実際キャビークレイの連中は操られている。この壁の向こ

うに完成品があるんだろ？」

「創り出す事は不可能ですが、現存のものを利用することは可能です。あれは正真の脳の集合体、つまり人間の脳を連結させて作り出されているのです」

「なっ?!」

「具体的には取り出された脳の形状を液体状に崩して、他の脳と二ユーロンを結合させることで大規模なニューラルネットワークを構築しています。生理食塩水中に浮かぶ脳の集合体には生命維持の役割を果たす肉体が無いので、顆粒細胞に直接栄養を送ることで機能し続けさせているのです」

『生体コンピュータと脳の信号が、まるで共鳴をするように干渉し合った』、アルバスの言葉が蘇る。生体コンピュータが人間の脳で出来ているとすれば、私が干渉し合ったのが誰なのか説明がつく。

「まさか、イドウンやあの町の連中は……」

（察しの通り、デウス・エクス・マキナに組み込まれた人間よ）

頭の中からイドウンの声が響いてきた。

（消えてしまはずだった自我はどういう訳かネットワークの一部に孤立して残り、キャビークレイによく似た世界を作ることができた。もつともあなた達は、脳周囲の特殊な構造がデウス・エクス・マキナと干渉を引き起こすようで、生きながらこちらの世界に来ることが出来るみたいだね）

「なんてことを……」

レウムの話、それはデウス・エクス・マキナが人間の脳から出来ているという、突拍子も無いものだった。しかしそうだとすればシヤルの言っていたことと辻褃が合う。

「分かっただろう？ お前達がデウス・エクス・マキナを壊すことは結果的に、組み込まれた人間達——ニューラルネットワークの世界で暮らしている連中を殺すことに繋がるんだ」

「ちょっと待て、イドウンとやらは元研究員なんだろう？ なんで生体コンピュータに組み込まれているんだ？」

「それは私がお答えしよう」

誰かが革靴の底でカツンカツンと音を立てて螺旋階段を下りてくる。レウムの横に姿を現した男は、図書館でシヤルに見せられた写真と同じ顔だった。もつとも、今はしらじらしい作り笑顔を浮かべてはいないが。

「生体コンピュータに組み込まれる脳はどこから来ているか分かるか？ 多くはシミュレーションから外れた行動を繰り返した人間達だが、戸籍や遺体までも抹消できるこの施設は、関係者にとって都合の悪い人間を消すためにも使われている。計画に反対したあいつを始めとする研究者達を組み込んだように……」

「あんたがブラギか……」

「そうだ。——君達が私を探していたのは知っている。なぜならこの町に入った余所者は常にチェックされているのだから」

脂ぎった額を覆う、7対3に分けられた前髪を整えて彼が答える。図書館で話しかけてきた奇妙な男もその一環だったようだ。あのままついて行っていたらどうなっていたのだろうかと背筋がぞくつとした。

「あちらも終わったようだな」

背後から扉が開く音が聞こえる。そこに立っているのはシャルだと信じ振り返った。

人一人通れるだけ開いた巨大な扉。その中を歩いてくる人影。徐々に、後ろで髪をまとめた長身の女が姿を現す。部屋に足を踏み入れたのはケセトだった。

「そんな……、シャルが負けた……？」

口の中が急速に乾く。胸の中がどす黒いもので埋まっていく。

喚き散らして彼女の元に向かいたい衝動を抑え、拳を強く握った。扉の前に立っているのはサイボーグ、下手な行動をすれば部屋を出る前に捕まってしまう。そう、彼女はまだ死んだと決まった訳ではなく、むしろ今までのケセトの振る舞いを考えれば、生きている可能性の方が高いのだ。

私の呟いた声を聞き、ブラギが口を大きく歪ませてとても愉快そうに笑っていた。

「——さて、お前達は観光客にしておくにはあまりに多くを知りすぎた。デウス・エクス・マキナの中で彼らと仲良く暮らさせてやる。やれ、ゾハルの改造歩兵」

ケセトに動き出す様子はなく、沈黙が続く。

「……申し訳ありません、中佐、所長」

彼女は数歩進んで搾り出すように言葉を漏らし、前のめりに倒れこんだ。

「何——?!」

ブラギの声と同時にレウムが手すりを跳び越え、二階から飛び降りた。そのまま脇目も振らずに彼女の元へ駆け寄っていく。すれ違い様、真剣な顔をしているのが見えた。

「どうした、ケセト？ 何があつた？」

「ダアトに後れを取りました。彼女は既に吸気口から中に——」

ケセトが彼に半身を起こしてもらってなんとか口を開く。

カノジョハスデニナカニ——。フレーズが耳から耳へと抜けていった。

「くそっ、これだから口先だけの三文機関は信用できん！ SPをよこせ——」

ブラギが胸についている無線に向かってしゃべりたてている。レ

ウムもノートパソコンを取り出してケセトの機能チェックを始め、私は一人取り残されてしまった。

デウス・エクス・マキナの白濁した水槽の向こうに人影が浮かぶ。回り込んでこちらに歩いてきたのは、背が低く、華奢そうな体躯の少女だった。鬱陶しそうに首を振って金の長髪を流しながら口を開く。

「よう、——頼んでおいたお茶はどうした？」

見間違えようもない、シャルだ。どっと肩の力が抜ける。安心したのも束の間、顔に殴られたような紫色の跡があるのに気づいた。

「お前、怪我してるじゃないか……」

「軽い内出血だ、止血剤は必要ない。それよりデウス・エクス・マキナについてだけど——」

「人間の脳から出来ているんだってな、俺も聞いた」

二人で水槽を見上げる。不思議なもので、あの話を聞いてからはこの円柱に神秘性を感じていた。

「そうか。……これはあたし達に似すぎている。あたしには壊せない」

シャルが申し訳なさそうに俯く。イドウンと交わした約束を守れないことを悔やんでいるのだろう。

「俺はお前について来たただだ、それは任せる。でもな、この町の

連中がよいように操られているのを放っておくのは勘弁だ」

世界一平和な国、それは私服を肥やした連中が汚い手で弄る箱庭中を一望できるその場所は、さぞ安泰で居心地のいいものだろう。

——彼らを引き摺り下ろす。一時でもいい、自分達が見下ろされていることに気づく人々がいればこの国は変わる。

「あたしだってそう思ってる！ でも、これを壊したら組み込まれている人達の意識も消えるんだろ？！」

「それならデウス・エクス・マキナを破壊せずに計画を止めさせればいい」

シャルが反論しようとして開いていた口をパクパクさせる。

「……そ、そんなことが可能なのか？！」

「ああ、町まで情報を送るには生体電流を増幅する必要がある。その出力端子が一箇所に集まっている場所を壊せば、生体コンピュータへの送受信を止めることができるはずだ。……ただし管理装置や制御装置を傷つけると栄養補給や浄化のシステムを停止しかねないからな、位置を知るのにもロックの掛かった扉を通るのにもイドウンの協力が絶対必要になるが」

シャルは苦戦しつつも宣言どおりケセトを倒した。今度は私の番だ。目にも光を取り戻した彼女を見て、力を尽くす決心をさせられたのだった。

0205：導火

「舌嚙まないように黙ってる」

トラウマを想起させるお一言。

シャルが肩に私を背負い、吹き抜けている二つ上の階へ向かって跳躍する。私は緊張した面持ちで、無い腹筋に力を入れていたが、以前のようにみぞおちに衝撃を受けることもなく手すりの向こう側へ降ろされた。

「ぐずぐずするな！ 奴らだ、さっさとっ捕まえる！」

下の階にいるプラグがこちらを指差し、彼の後ろのドアから次々に出てくる、がたいのいい男達に向かって怒鳴っている。

「SPまで出てきたぞ、どうする？」

一様に黒いスーツを着てハンドガンを構えたSPが、一列に並んで螺旋階段を上がってくる。私という足手まといがいる以上、いくらシャルでも銃を持った相手から逃げ切るのは難しいのではないだろうか。しかし心配をよそに彼女は不適に笑い、人差し指と親指を合わせて何かを回すような動作をしている。

「問題ない。あたしが何のために隠れていたと思ってるんだ」

「うおおお?!」

直後、悲鳴と金属同士が当たる音が混ざって遠ざかっていった。そろそろと階下を覗く。階段のステップが数箇所抜けており、共

に落ちた数人のSPが上体を痙攣させていた。

「ボルトを緩めていたのか……」

「こう見えても、昔はイタズラ坊主だったからな」

「見たまんまだな」

シャルに小突かれている横で、イドウンがデウス・エクス・マキナの中からこの建物の制御に関する箇所アクセスしたのだろう、ドアが独りでに開いた。ガルガリンを担いだ彼女と共に廊下を走り抜ける。

「地下5階の保守点検用穴でコードが一纏めに束ねられてる。イドウンがそこまで最短ルートで案内してくれるって言ってるぞ」

デウス・エクス・マキナがあつたのは地下26階、シャルが2階分跳び越えたからここは24階のはずである。フル稼働する私の生体コンピュータ。

「19階も上がるのか?!」

「土下座すれば引きずってやる」

鼻を鳴らされてしまった。階段のステップに頭をぶつけながら引きずり上げられていく自分の姿が浮かぶ。

「ついて行くと行ったのは俺だ、心配無用。その電力をガルガリンの充電に回しとけ」

シャルの背中を追いかけて階段を駆け上がる。息が上がり、会話を余裕はとづくに無い。先頭に行く彼女とてガルガリンを担いでいるのだ、体に鞭打っている——と思う。

そんなことを朦朧とする頭で考えていたが、ふと彼女が言いにくそうに口を開いた。

「……ありがとう」

何か感謝されることをしただろうか。無駄な電力を使うな、と言ったことか。

「ん、電池の残量少ないのか？」

「違う。——あたし一人だったらどうしたらいいか分からなくなっていたと思う。今日はお前がいてくれて助かった」

彼女の背中を見つめながら、気づかれないように声無く笑った。疲れが少し吹き飛んだ気がする。私も彼女と会った日からずっと助けられていると言おうかと思ったが、気恥ずかしいので止めておいた。

ようやくB5と書かれた柱が見えた。シャルと共に開かれた扉を勢いよくくぐったが、そこで足を止めざるを得なかった。

「遅かったな、侵入者共」

私達それぞれの頭にサブマシンガンの銃口が向けられている。扉から3mほど離れた場所に、円柱形の構造物を背にしてブラギと二人のSPが立って構えていた。

「エレベータか……」

「そういうことだ。改造歩兵よりよっぽど役に立ったな」

三人が下品に笑う。

もし私達がエレベータを使っていたとしても、電気の供給を止められ窮地に陥っていただろう。どちらにせよ一筋縄ではいかないということか。

「どうしてこの階に来ることが分かった？」

「貴様らのような輩が考え付きそうなことくらい容易に想像できる。デウス・エクス・マキナを直接壊していれば済んでいただろうに、愚かだな。——そのごっつい銃を置いて、両手を頭の後ろで組め」

隣でシャルが苦々しい顔をしている。ガルガリンは発射の準備に時間がかかり、殴りかかるにも距離が幾分遠い。私が言われた通りに手を組むと、彼女もガルガリンを置いてそれに従った。

「よし、そのままこっちに来い」

SPが前後に分かれて立ち、ブラギが先導する。ギルグル対策の訓練をしているのか、彼らは常にシャルの間合いの外からサブマシンガンを構えていた。

「おい改造歩兵、貴様デウス・エクス・マキナの中の連中と会話ができるらしいな？」

プラグが七三分けを整えながらこちらを振り向き、シャルに話しかける。

「だったらどうした」

「知っているかもしれないが、イドゥンはここの副所長だった。何を血迷ったか、急に計画を止めるように言い出してな」

懐かしむように天井を見上げ息を継いでいる。仕事仲間に害を加えることなど私には考えられない。ひよっとすると彼も上層部に脅されていたのかもしれないと思った。が、次の瞬間プラグは口の端を歪ませて醜悪な顔を見せた。

「——非常に目障りな奴だった。話し合いに応じると嘘をついて、研究の停止を主張していた奴らを一網打尽にしてやった時は爽快だったな」

「お前が彼女達を生体コンピュータに組み込ませたのか?!」

「そうだが、何か問題でも？　ただ殺すだけでなく、デウス・エクス・マキナに組み込んでやったのは俺なりの温情だったが、意識が残っているなら良かったじゃないか。ハハッ！」

自分の非道な行いを称え、大層愉快そうに笑っているこの男に、吐き気がするほど嫌悪を抱いた。

「……おい、お前にイドウンから伝言があるそつだ」

シャルが彼の笑いを妨げるように大きな声を出した。

「何だ？ 感謝の言葉なら不要だと伝えておけ」

「騙された当時はお前のことを恨んだけど、今は気にしていないつて」

「ふん、恨まれたからといってどうこうなる訳でも無いだろうに」

シャルはイドウンと会話をしているようでしばらく口を閉じていたが、何か面白いことを聞いたのか口元を緩めた。

「——ああ、それから、『ようこそデウス・エクス・マキナへ』だつてさ」

次の瞬間、こちらを向いていたブラギの顔が強張り固定された。左右から飛び出してきた扉に頭を挟まれ、身動きが出来なくなっている。

突然のことに驚いていた後ろのSPがシャルにアッパーカットをされ、銃の引き金を引く間もなく天井近くまで吹き飛んだ。

私が状況を理解したのは、SPが床に背中を打ちつけ、ブラギが醜い声を上げてからだった。

「ぐぎぎぎっ?!」

ブラギが自分の頭を潰す二枚の防火扉を懸命に両手で開こうとしている。壁の向こうのSPも手伝っているようだが、むしろ徐々に

閉じていく。

「計画を止める、そうすれば引っ張り出してやる」

シャルが彼の前で仁王立ちになり手を差し出す。

「——ふん、都会にそびえる高層ビルを見る。つく、金を持った奴らは競うようにして天を目指す。道徳や云々綺麗ごとを語ったところで、所詮人間は高いところから見下ろしているのが好きなんだ。そこから下りて奴らと同じ地面に立つくらいなら、俺は死ぬ方を選ぶ！」

彼が扉から手を離し、懐のハンドガンを取り出してこちらに向けようとする。しかしそのことにより急激に隙間が狭まった。

「ぐああああ?!」

血が巡らなくなったブラギの顔に血管が浮き出している。既に手遅れだろう、シャルも出していた手を引っ込めた。

メキメキと木が割れるような嫌な音を立てて、頬骨が不自然に浮き上がる。突き出した眼球の視線に耐え切れず背中を向けた。

防火扉が合わさる音が響いた。足元のタイルの溝を赤い線が伸びていく。振り向こうと視線を回したが、首を振っているシャルを見て止めた。

ネジを外し鉄板を取り外すと、壁の向こうに黒い極太のコードの束が見えた。シャルがそれに銃口を当ててこちらを振り向く。ガルガリンは階段を上がってくる間にフルチャージされており、いつでも発射することができる。

「アルバス」

「一丁かましてやれ、シャル！」

狭い通路に鼓膜が裂けんばかりの咆哮が轟き、黒い砲身に入った割れ目から火花が飛び散った。

階下から吹き上がる風によつて急速に煙がひいていく。反対側の壁に開いた正円の穴から差し込む光が、全て引きちぎられたコードの束を照らした。

ガルガリンを下ろしたシャルとハイタッチをする。爪先立ちになつて手を叩きに来る動作が可愛らしかった。

この程度の損害を与えたところで、デウス・エクス・マキナが切り離されるのは修理が終わるまでのほんのしばらくの間だけだろう。しかしこれが研究所に、町に、この国に与える影響はとてつもなく大きいはず。あとはブラギの消えたここの研究者達が、どう感じどう行動に移してくれるかを信じるだけだ。

「——そいつは無理だ、こいつはあたしの相棒だからな」

シャルがぼそりと漏らした言葉が耳に入った。

「ん、何か言ったか？」

「いや、こつちの話だ」

シャルがキャパシタの全て斜めを向いたガルガリンを担ぎ、階段へと足を進める。その背中では心なしか上機嫌に見えた。

「アルバス」

「一丁かましてやれ、シャル！」

（断ち切って、シャルロット！）

背中に繋がれた同軸ケーブルを通して、ガルガリンのトリガーとなるギャップに電圧をかける。レールへの入力電力量は当然キャパシタ6個分、0.6MJの最大出力である。

火花を散らして銃口から超音速の弾丸が射出される。空気を破る発射音。聴覚野に到達する前にフィルタリングされているとはいえ耐え難い。激しい反動により、頑強に設計されているはずの腕の人工関節が軋んで悲鳴を上げた。

目標を確認する。束なっていたケーブルはいずれも切断されている。声に出さずにイドウンにデウス・エクス・マキナの様子を尋ねた。

（待つて、今接続を試してみるところ。……外部との接続レッドランプ、生体コンピュータの生命維持機構オールグリーン、成功よ！！）

溢れ出てきた爽快感をどうしようかと振り向いたところ、おあ

つらえ向きにもアルバスが片手を高く上げていた。出来るだけ背伸びして手のひらを叩きつける。ゴールを決めた後、気が狂ったようにパフォーマンスをしているサッカー選手の気持ちが分かったような気がした。

（ありがとうシャル、それに隣の彼も。最高のきっかけは与えられた、あとは私達がなんとかしなくちゃね）

（ブラギを生体コンピュータに組み込むのは無理そうだ。折角再会の挨拶をしたのに残念だったな）

ブラギは脳味噌共々壁に押し潰されて死んだ。イドウンが彼と会うことを楽しみにしていたようだったので、残念な気持ちになる。

（そうね……。シャルロットが代わりに来ない？ みんな歓迎するわよ）

（あんな平和で穏やかな世界なんて、あたしには似合わないな）

所詮兵器の居場所は戦場のみ、私の居場所はゾハルにしかない。

（そっかあ、じゃあその彼を誘っておいてよ）

イエスと答えるとも思えないが、取り次ぐ気もさらさらしない。なんだかねで、この男にいなくなれたら困るのだ。

「——そいつは無理だ、こいつはあたしの相棒だからな」

（そう、それは残念——）

頭に響いた台詞は、言葉とは裏腹に優しそうな声をしていた。

「ん、何か言ったか？」

アルバスが眉をひそめている。あの様子では聞き取られてはいなさそうだが、無意識に声に出してしまっていたようだ。

「いや、こっちの話だ」

背を向け階段に向かう。ふと、ここに来た本来の目的をようやく思い出した。

「あ、ブラギから話を聞くの忘れた」

イドウンに入り口を開けてもらい、研究所の外に出る。その2、3歩でデウス・エクス・マキナとの繋がりが指数的に細くなっているのを感じた。建物を囲んでいるあの柵を越えれば、もう互いに会話することもできなくなるだろう。

「じゃあな、イドウン」

研究所を振り向き最後の挨拶をする。

「ありがとうって伝えてくれるか？」

ついでにアルバスが便乗してきた。仕方ないので取り次いでやる。

（こちらこそありがとう、二人とも。最後に、お礼になるかは分か

らないけれど、あなたの記憶に埋まっていた唄を送るわね)

何のことか分からずにぼかんとしていると、彼女が聴き覚えのあるメロディで唄を紡ぎ出した。

(二つの頭を持った竜がいた――)

私の親友が教えてくれた、あの変な唄だ。驚くことに、続けられたのはずっと思い出すことが出来ずに歯がゆい思いをしてきた二番だった。

二つの頭を持った竜がいた

互いが持つ譲れないこと

頭同士でケンカした

喉を噛み合い黒い血を垂らした

ああ、それだ。痒いところに手が届いたような感覚。

(最高の報酬だ、ありがとう――)

踵を返して研究所を去る。脳裏にイドウンの笑顔が見えた気がした。

日が暮れ薄暗くなってきた街中を一人で歩いている。シャルは町行く人々が『人間らしくなった』と嬉しそうに話していたが、私に

はちつとも変わったようには見えない。今日あったことですら、夢の中の出来事なのではないかと疑ってしまうくらいである。

「あ痛たたた……」

パンパンになった脚を軽く叩く。階段を上り下りしたせいになったこの筋肉痛が、あれは夢ではないと自己主張しているようだ。

明日は早い、散歩はこれくらいにしてホテルに帰ろう。

私達はキャビークレイのホテルに宿泊している。ベッドにうつ伏せになりテレビを眺めているシャルの後ろを通り、旅行カバンに入っている工具箱を取り出しに向かった。今日はガルガリンが大活躍をしてくれたが、おかげでレールがガタガタになり大掛かりな修理が必要そうだ。

「ねえ」

シャルがテレビの方を向いたまま声をかけてきた。画面では高級そうな魚料理が紹介されている。見なかったふり。

「なんだ？」

さすがに聞かなかつたふりをする訳にもいかず、財布の中身を思い出しながら答えた。

「脳味噌だけになって仮想の世界で自由に過ごすのと、脳味噌だけになって現実の世界で戦うことを強制されて過ごすのってどっちが幸せなんだろうな？」

彼女の後ろ頭を見つめる。前者はデウス・エクス・マキナに組み込まれ、その一角の世界で暮らしているイドウン達のこと、後者はほぼ脳味噌以外の生体部品を換装され、改造歩兵として扱われているシャルやケセトのことだろう。ひょっとしたら人助けが似合わない彼女がイドウンに手を貸したのも、そのことが関わっていたのかもしれない。

「いや、お前に聞いても仕方ないか。忘れてくれ」

「……シャルならさ、現実の世界で自由に過ごすっていう選択肢もあるんじゃないか？」

私はこのまま彼女の面倒を見て過ごすのもありかと思っている。もつとも彼女の方はゾハルに未練があり、それは選択肢にも入っていないようだ。

返事は返ってこなかったが、工具箱を彼女の隣に置いた。

「ガルガリンの前にお前のメンテナンスをしてやる。最近してなかったよな」

シャルがテレビを見たまま無言で腕を差し出してくる。白い肌は擦り傷だらけで血が滲んでおり、関節は詳細にチェックするまでもなく緩くなっていた。まるで今日の激戦を物語っているかのような。

「これはひどいな。今は応急処置しかできないけど、家帰ったらガルガリンと一緒に修理するぞ」

金色の頭がこくりと頷く。

工具箱を開きながらケセトとの会話のことを思い出していた。彼

女は、シャルから何も聞いていないのか、といぶかしげに私に尋ねてきた。確かに私は彼女のことを何も知らない。別に気をつかっていた訳ではなく、ただ聞こうと思ったことが無かったただけなのだ。しかし今は不思議と彼女のことを知りたいと思っている。

「……直してる間耳寂しいからさ、シャルのことを聞かせてくれな
いか？」

「あたしのこと？」

「サイボーグになった経緯とか、ゾハルやセフィロト部隊っていうのは何なのかとかさ」

テレビが消える。シャルが上体を起こし、あぐらをかいてこちらを向いた。

「……気は進まないけど、直されている間暇だからな、話してやる
嫌そうな顔はしていたものの、話を始めてからは人が変わったように饒舌だった。

— 2 years ago —

口の中に吐き気を催すドロドロした液体が込み上げ、力が入らずだらしなく開いている唇の端から垂れた。誰かが大きく口を開閉して私を揺すっている。

——何故私は倒れているのだろう。

服が濡れてぐしゃぐしゃだ、気持ちが悪い。鼓動を打つたびに、空気が抜けた風船みたいに力が抜けていく。この心臓を止めれば不快感も止まるだろうか。

——ああそうか、確か首元に銃弾を受けたのだ。医者的心得なんて無いが、直感的に分かる。私は死ぬ。

苦痛はとつくに消え失せている。手足の感覚が、耳が、鼻が、五感が追従して次々に消えていく。まるで世界から切り離されていくようにして。

——急速に機能を失っていくこの体は、走馬灯を見せるつもりはないようだ。それでいい、悲愴も後悔も私には似合わない。

勝手に閉じていく瞼に幕を下ろされるようにして、私の存在が消えた。

開くはずのない幕が再び開かれた。いつも寝泊りしていた小屋の汚い天井とは違う、艶々した空色の綺麗な天井。漂う鼻につんとくるアルコール臭。指先が滑らかな綿の布をなぞる。——体表から集めた情報が再び私の意識を形作っていく。

どうやら私はどこか見知らぬ場所のベッドで仰向けに寝転がっているらしい。起き上がろうと首を起こしたが、両手足と胴体がベッ

ドに固定されており体が動かなかった。

私は突入作戦中に犯人と対峙し、首元に銃弾を受けた。多量の出血によりその後すぐにショック死したはずである。この綺麗な場所が地獄なのだろうか。

「気がついたみたいね」

声のした方から、灰色の作業服を着た女が歩いてきた。等身のバランスがよくすらつとした容姿の彼女は、腰ほどまで伸びた金色の長い髪を軽くツイストさせており、大人びた印象を受ける。軍人のように胸に少尉の階級章が付けられていた。

「誰もいないから先に謝らせて。ごめんなさい——」

女が悲しげな顔で深く頭を下げる。訳が分からなかった。

「私の名前はマリア、ここではティファレットと呼ばれることが多いかな」

「あたしは——」

「シャルロット——シャルちゃんね、身分証明書を見せてもらってたわ」

全身に倦怠感が残りあまり喋る気分ではなかったので、正直助かった。

「窮屈でしょう？ 今、ベルト取るわね」

彼女がつやつやした綺麗な手で、私が縛り付けられていたベルト

を手際よく外していく。

「最初はあまり動かない方がいいわ。空気圧の制御が上手くできないと思うから――」

空気圧、ティファレトは何のことを言っているのだろうか。首元の銃創を確かめようと右手を動かした。

「あぐつ?!」

顎に衝撃を受け、脳が揺れ、舌を噛みそうになる。病院のような部屋の中に光が散っている。殺意を持って睨んだ先には自分の手のひら。

冷静に状況分析しようとする。いや、分析しなくても、鋭角に曲がった私の右腕を見れば一目瞭然だ。どうやら、意思に反して勢いよく曲がった腕が自らの顎に掌底を決めたらしい。

「あらあら、だから言ったのに……」

私の右腕はどうかしてしまったのだろうか。ひりひりしている顎を摩ろうと左手を伸ばす。

「べっ?!」

今度は弧を描いて迫る左手により平手打ちを受けた。訳が分からない。とりあえず体を動かさないようにして、側で声を出さないように笑っている女に尋ねることにした。

「あたしの体、どうなってるんだ?」

「あなたは一度死んだの。それは覚えてる？」

「うん。やっぱり死んだのか……」

私は確かに死んだらしい。しかし一度とはどういうことか。

「けれどここに運び込まれた時、あなたの脳はまだ生きていた。あなたは部分的に体を機械化することで生き返ったの。——つまり強化人間、サイボーグとしてね」

機械化、生き返った、サイボーグ。——地獄のドッキリ番組だろうか。ウェルギリウスが『一切の希望を捨てよ』、とかプラカードを持ってきたりして。

「信じられないという気持ちもよく分かるわ。それでもまずは体を慣らしましょう、ゆっくり体を起こしてくれる？」

彼女の言うことはもつともである。このままでは小指で鼻をお掃除することすら、死と隣り合わせになりかねない。慎重に腹筋に力を込めて起き上がる。なんとか膝に頭を打ち付けずにすんだ。

「そう、とても上手よ！」

脇ではティファレットが老人ホームのお遊戯みたいに手を叩いて喜んでおり、こつ恥ずかしい気持ちにさせられる。

「次は何をすればいい？」

彼女は顎を撫でて考えていたが、手をこちらに差し出してきた。

「握手をお願いできるかしら」

とんでもないことを言い出したと思った。先程の焼き直しになれば、この手を潰してしまうかもしれない。躊躇していると彼女の口が開いた。

「大丈夫、私は頑丈だから。私はあなたを信じる、だからあなたも私を信じて」

ティファレトが真剣な目でこちらを見つめる。とても不思議な人だ、腹をくくらされた。

慎重に右手を前に出し、ゆっくりと指を閉じると、彼女が私の手を握り返してきた。柔らかな感触が伝わってくる。

「よろしく。それからセフィロト部隊にようこそ、シャルロットちゃん」

地球に埋蔵されている化石燃料は有限である。そんなことは利用を始めた当初から言われていたが、それでも一度使い始めたものを手放すことはできなかった。中東諸国の石油の枯渇がきっかけとなり、スタグフレーションとなって世界が大打撃を受けたのは、まるで地球からしっぺ返しを受けたかのようにだった。

契機となったのは夢の半永久機関、核融合炉の完成である。太陽が核融合により何十億年もエネルギーを放ち続けていられるのは、半径70万キロメートルというその大きさ故の神秘だ。しかしこの

核融合炉は数十メートルのコイルの内部で核融合を起こし、海水からエネルギーを得るという驚くべきものである。

そしてここゾハルの本部は世界最大のトカマク型核融合炉として、ドーナツのような環状の本体を太平洋の上空に浮かべている。

廊下を早足で歩いていく長身の女。ただでさえも大人びた顔立ちをしているのに、秘書みたいな口調と髪型が相まってげふんげふん体のあちこちに絆創膏を貼り付けている。

「ケセトちゃん、大丈夫？」

作戦中とは打って変わってだらしない顔をしているレウムが話しかける。

「中佐、あなたの性格は把握しているつもりですが、それでも軍人らしい態度で行動して頂かないと困ります」

「いいのいいの。今は任務中じゃないんだから。——それより聞いてくれよ。俺、脳工学の研究所行って思ったことがあるんだ」

「……何でしょうか？」

どうせいつものしょうもない話だろうと、ケセトが嫌そうな顔をしながらも一応尋ねる。

「性的快感ってドーパミンっていう快感物質が脳の新皮質で受容されるから起きるんだけど、要するに脳内麻薬でハッスルしてるだ

けだろ。自分で自分に踊らされているみたいで、虚しくならないか？」

「セクハラは止めてください。夜な夜な右手の運動に勤しむあなた方が一番虚しいです。——中佐も作戦室に呼ばれたのですか？」

さすがに3年間も共に行動しているだけあり、彼女は往なし方を心得ている。

「まあね。大切な研究施設の 하나가壊れちゃって、上は真っ赤っ赤だよ」

「申し訳ありません、私がダアトに後れを取ったせいで……」

「まさかあのダアトがケセトちゃんに勝つなんてなあ。だいぶ性格も丸くなってみたいだし」

「お言葉ですが、性格は変わっていないかと。依然子供のままです」
「きびしいね」

苦笑いしたレウムが作戦室の扉を開く。中央に大きな机が配置されている部屋の中には、既に二人の男がいた。

「なに、ガンくれてやがんだよ？」

片方の男が二人を見比べて目に角を立てた。金の短髪を立てている彼は、猫背のせいかやけに背が低く見える。

「口を慎め、マルクト。お前の上官だぞ」

もう一方の立派なヒゲをたくわえた中年男性が彼を嗜めた。

「惨めに負けた奴に低くする腰なんてないね」

「——いつも背中を曲げているので、てっきり万年へりくだっているものだと思っていました」

毒を飛ばしたケセトにマルクトと呼ばれた男が近寄り、横目で鋭く睨む。

「てめえ、あのセフィロト被れにやられたらしいな。いっそ、もういっぺん死んで席を譲った方が良かったんじゃないか？」

「……」

目を合わせようとしない彼女に舌打ちをし、男はそのまま作戦室を去っていった。

「なぜマルクトを呼び寄せたのですか？　彼はセフィロト部隊の中でも問題児中の問題児です」

レウムが先程とは一転した真面目な顔で、難しい顔をしているヒゲの男に話しかける。

「彼にダアトの処分を命令した」

「へ——?!」

「異端だろうが問題児だろうが実力者だ。彼女の存在を各国に気取

られる前に片付ける」

上官と思しき男は啞然としている二人をそのままに、マルクトに続いて部屋を後にしたのだった。

0206：萌芽（後書き）

もっと踏み込んで書けたらうと、自分の未熟さを痛感しながらフロストランド編終了です。

次は目本編、TETRAMの話にぐだぐだと突入します。

0301：競技会

轟く地響き、響き渡る金属音、沸きあがる歓声、会場は異様な熱気に包まれていた。かくいう私も、子供の頃に戻ったようにはしゃぎながら闘士達の激戦を応援している。

体重をかけた重々しい鉄の拳が繰り出される。拳頭が相手の頭部を掠め取り、火花と共に装甲を撒き散らす。あちこちから上がる驚きの声の中、センサカメラを無くした巨体が力が抜けたように膝をついた。試合終了のコールがかかり、続いて観客席から惜しみない拍手が両選手に送られた。

「どつちも良かったぞー！！」

席から立ち上がり、退場していく機体に向かって枯れた声で叫ぶ。隣ではシャルがいぶかしげに会場と私を見比べていた。

ここ、日本州の東富士にある演習場で行われているのは、世界的にも有名なTETRAMの全州競技会である。日本各地の企業や工場が優秀なパイロットを雇い、こぞって自慢のTETRAMの性能を競う。上位に入れば軍や各界に販売できるチャンスが生まれることから、参加者は皆真剣である。もちろん観客も、ギャンブラーやオタクなどが目的はどうであれ、入り乱れて熱狂的に応援する。

私は言うまでも無くTETRAMオタクの中の一人であり、毎年この観戦に訪れている。今年の競技会が近づき、シャルに日本に行く旨を話したところ、一人で行けとへそを曲げられた。——シャルの留守番。脳裏に浮かぶのは、ひしゃげて壊れるドアノブ、背中

から煙、彼女と出会ったときのトラウマ達。帰ったら家が無いなんてことも十分あり得る、結局無理やりつれ出すことになった。

「どうだシャル、来て良かっただろ？」

「とてもキモイな……」

シャルがため息をつきながら声を漏らす。日本に来てからずっとこんな調子である。

ふと私達の間に、後ろの観客席からぬつと親父顔が突き出してきた。

「そんなこと言ってやるもんじゃないぞ、お嬢ちゃん。人間誰しも理解されない趣味を一つや二つ持っているもんだ」

男が口を開くのと同時に酒の臭いが漂う。昼間から酒を飲んで競技会の観戦とはうらやましい——、ではなく駄目人間め。頭にねじりハチマキ、首にタオルを巻いており、いかにも地元工場の従業員な雰囲気醸し出している。彼は言いたいことだけ言って後ろの席に引っ込んだ。

二人で顔を見合わせる。あの酔っ払いは何がしたかったのだろうか。かろつじて私の擁護をしてくれていたような気がする。

「いや、こいつは存在自体がキモイんだ」

男に言い返すように、けれど聞こえない声で呟かれたのを聞いた。かなり不機嫌に見える彼女だが、試合の際は固唾を呑んで機体を目で追っていたのを目撃している。

「ところでTETRAMってあの機械のことだよな？ あたしに分

かるように説明しろ」

唇を舐めて喋る準備をする。偏屈なマシンガンの引き金は引かれた。

「Multi-purpose BCI-assisted-Manipulation Manlike-figure Machine（BCIによる補助操作の多目的人型機械）、4つのMだからTETRA-Mだ。BCIっていうのは脳味噌と機械を繋ぐっていう意味で、要するに操縦桿の操作の他にも脳波から読み取った補助操縦を行うことで正確性を高めたロボットってことだな」

「ふーん。イフクで見たあれも？」

「あれはドイツ製の『エールクラッセ』。他の国のTETRAMに比べて馬力が大きいのが特徴だ。あとは全体的に高い性能を持ったアメリカの『ラスター』なんかが有名かな。この州のTETRAMは繊細なマニピュレータと質の良さが売りなんだが、一個人で買えないくらいに値段が高い」

「どうでもいいけど、鼻息が荒いぞ」

普段一言二言で会話の終わる私だが、TETRAMのことになれば三日は喋り続けられる。いや、まったく自慢にならないが。

話をしている間に次の試合、予選最終組の二体が、コンクリートで固められたフィールドに姿を現した。会場は正方形のスタンドが安全の為に50mほどの間を空けてフィールドを囲んでおり、私達はスタンド中段程の席にいる。

「ルールはパイロットを狙わないことと、武器を使わないことから

いだな。試合の続行が不可能になるか、ギブアップをすれば相手の勝ちが決まる。あれが予選最後の組だから、勝った方が決勝リーグに進むぞ」

バックスクリーンに表示されているトーナメントを指差しながら説明する。

「決勝は総当たり戦なのか。人数は？」

「四体だ。既に優勝候補の『東風』がリーグ入りしてるから、あれとちつとは張り合える奴に進んで欲しいところだな」

カードは機体名『天曇』と『桜花』。厚い灰色の装甲に包まれた他より一回り大きな機体と、紅の装甲がお洒落だが所々回路部分が覗いているボロそうな機体だ。

「左のデカイ奴が勝つだろ、どう考えても」

シャルが二体を見比べてから天曇を指差して言った。いかにも攻撃と防御を追求したような要塞を連想させる灰色の機体は、ロケットランチャーをまともに受けても倒れそうにない。確かに、紅い古汚い機体との性能差は明らかである。

「分からないぞ。TETRAMの強さは、大きさやパワーだけで決まらないからな」

桜花を擁護するようなことを口にしたが、私も心の中では天曇の勝利を確信していた。

ゴングの音と共に天曇が長く太い腕を薙ぎ、バックナックルを浴びせようとする。拳の甲がか細い胸部に触れようをした瞬間、桜花

は重力を感じさせない軽い跳躍で腕の上を舞った。

観客が言葉を失い口を半開きにしている。あの装甲の薄さはボロいからではなく、機動を重視していたからだっただ。

桜花が沈むように腰を落として相手の肩を踏み、再び軽やかに跳び出した。背を向け硬直している天曇との距離を空け、膝の屈伸で上手くショックを拡散しながら静かに着地する。会場から歓声と拍手が起きた。

「ロボットにあんな動きが出来るのか？」

「あれはパイロットの腕だな。ただ、機体は丁寧には作られているみたいけど、性能不足で彼の足を引っ張っている感じがする……」

まったくノーマークのパイロットだったが、明らかにトップクラスの腕を持っている。製作元が無名な製作所なのを見て惜しいと思った。

目を離れた隙に距離を詰めている二体。桜花が殴打しようと振り被ったのを見て、天曇が片腕で頭部を覆う。しかし桜花は紅の拳を途中で止め、太い腕の上に飛び乗った。着地様、肩関節に強烈な踵落としを打ち込む。

再び沸き上がる会場で、シャルも思わず席から身を乗り出していた。

「アルバス、今のは?! 説明しろ!」

「フェイント。パンチをイメージしてBCI操縦で腕を動かしておいて、優先度の高い操縦桿で違う動作を上書きする高等技術だ」

少なくとも私の見てきた範囲で、競技会にてそれを得意技として

いたのは東風のパイロットだけである。既に決勝リーグに進んでいる三チームも、この光景を見て啞然としてのことだろう。

土煙を上げて倒れる灰色の巨体の前で、紅の機体が構えを解く。桜花の決勝リーグ進出が決まった。

「凄いな！ あいつ優勝するんじゃないのか？！」

「うーん、今のままだと難しいだろうな。せめてあのパイロットの特性を活かせるように、即応性のフィードバックをしないと……」

決勝リーグは予選の4日後から始まり、一日につき一試合、合計6試合が行われる。その前に自分達でその短所に気づき、変えてくることが願うしかない。

「兄ちゃん詳しいね、どこかの企業の人？」

先程のねじりハチマキのおじさんが再び顔を出してきた。何か嬉しいことがあったのか、頬を緩めきっている。

「いえ、しがない家電の修理工で、ここではただの観光客です。ちよつとTETRAMに関してはうるさいですけどね」

「みたいだな。……辛口だが、確かに的確だ」

「おじさんもTETRAMオタクなんですか？」

認めてもらったことに少し嬉しくなり、分かりきったことを尋ねる。

「ああ、こんなこと30年も続けられたっていうのは、オタクか仙人だったからかもしれないな」

「30年も?!」

TETRAMが市場に出てきたのは20と数年前だから、この酔っ払いはこう見えて、研究開発の段階から関わっていたということになる。

「——ところで、大会中の宿泊場所は取れたかい？」

「いえ、この時期どこも満員で……。仕方ないんで公園にでも泊まろうかと思ってます」

世界的な行事だけあって期間中は周辺の都市も賑わう。非日常的な旅行ですっかり失念しており、一ヶ月前に予約したのだが既にこの宿も一杯だった。

「ハア?! それは初耳だぞ!」

怖い顔をして詰め寄ってくるシャルに苦笑いを返す。現地に着けばなんとかなると思っていたが、そう世の中甘くはなかったのだ。

「それだったらうちのベースに来ればいい、歓迎するよ」

「え?」

二人が同時に、胸を張って親指で自分を指差している男の方を振り返った。

「こう見えてもうちの製作所は決勝に進んでね、ちょうど人手が足りなかったところなんだ。兄ちゃんTETRAMに触ったことはあるかい？」

「無いですが是非行かせてください！ 頑張ります！！」

本物のTETRAMに対面し、ましてや触れるなどと夢のような話である。ついでに泊めてくれるとくれば行くしかない。おじさんが白い歯を見せて笑った。

0302：吉野製作所

「おう、帰ったぞー！」

ねじりハチマキのおじさんがドアを勢いよく開け、靴を脱ぎ散らかせて家の中に入っていた。彼の名前は吉野神代、自称吉野製作所の大黒柱。なんと予選最終組で華麗な試合を見せてくれたTETRAM、桜花の製作者らしい。

大会のある一週間ちよつとの間、私達はこちら吉野製作所のベースでお世話になることになった。ベースとは大会中の宿泊と機体の修理を兼ねた場所で、決勝に進んだ四組にそれぞれ貸し出される。ただし会場近くにあるので、人里から離れており不便そうではあるが。

「——あたしは相当プツンしてるぞ」

隣からとても物騒な声が聞こえてきた。それは電子回路的な意味でもまずい。TETRAMに夢中になり、彼女のことをなおざりにしてしまっていたのだから怒られて当然だ。

「あんまり人と関わりたくなかったのに、お前のせいで他人と寝食を共にしなければならなくなった」

「ゴメンナサイ」

例によって例のごとくのアイアンクローを覚悟して両手を合わせて謝る。

「——だけど、ここしばらく迷惑をかけていたからな。今回くらい

は我慢してやる」

しかし彼女は予想外にも目線を逸らしてつつましく呟いたのだった。

「シャル……」

「おう、痴話喧嘩は終わったかい？」

いつの間にか玄関に戻ってきていた神代に、二人が首を激しく振って対応する。

「この兄ちゃんがアルバス君、嬢ちゃんがシャルちゃんだ」

彼はお構いなしに、廊下を歩いてきた四人に向かって私達の紹介を始めた。

「兄ちゃんの方はTETRAMに詳しいし機械の修理もできるからな、がんがん使ってくれ。姉ちゃんの方は母ちゃんに任せるわ」

「ちょっと、そのガイジン達会場から拾ってきたんでしょ。本当に信用できるんでしょうね？」

私と同年くらいだと思われる女が嫌そうな顔をこちらに向けてくる。作業着に身を包んだ彼女は赤みがかった明るい茶髪を肩ほどまで伸ばし、頬に無造作に絆創膏が貼り付けていて、活発そうな印象を受けた。

「もちろんだ。ロボット好きに悪い奴はいねえ」

神代は自論をやけに自信満々に言い放った。彼女がため息をついて首を振る。

「こいつが俺の娘で、桜花だ」

そう言われると、ああと頷けるくらいに、どことなく雰囲気が父親に似ている。桜花と聞いて思い出すのは、あの紅のTETRAM。

「え？ 桜花って機体の名前じゃ……」

「この馬鹿親父、機体に自分の娘の名前つけてんの。ホント勘弁して欲しいわ」

「この親不孝者は親子愛の表れだっていうのに気付かないのかねえ。そうそう、幻滅しないで欲しいが、兄ちゃんの褒めてたパイロットはこいつだよ」

口が自然と開く。あの機体が放ったあでやかなフェイントは、今でも強く脳裏に焼き付いている。てつきりパイロットは歴戦のニヒルな男だと決め込んでいた。

「あとは連れの咲耶と、うちで働いてる翔と俊男だ」

夫と不釣り合で上品そうな女性と、いかにも今時な格好をした若者の男、背の高い中年男性が頭を下げ、こちらも返した。

「母ちゃん、夕飯は？」

「ちゃんと7人前作っておきましたよ。皆さんの口に合えばいいんですが」

「謙遜謙遜。咲耶さんの飯をまずいなんて言ったら、俺が追い出してやりますよ」

「そうだな……」

翔と俊男がこちらを横目で流し見て、威圧するようにそう言った。今更ながら私達はあまり歓迎されていないようである。

家の中でビールを出すように大声で要求している父親に代わり、娘が入るように促した。

「ようこそ、吉野製作所へ。短い間だけど宜しくね」

夕食は焼き魚や味噌汁といった典型的な日本食で、翔や俊男の言っていたとおりとても美味しかった。それだけにシャルの機構のことを考えると申し訳ない気持ちになる。

彼女の消化器官は丸ごと二次電池に置き換えられていて食べ物を消化できないので、腹部の中心静脈栄養装置から直接摂取している。その為食べたものはダミーでつけられている胃に溜まるようになっており、取り出して洗浄する必要があるのだ。

私達は真っ暗な軒下の通路を歩き、翔に部屋まで案内してもらっていた。通り抜ける涼しい風と木の匂いがかしまった気持ちにさせてくれる。

「お前はこっち、シャルちゃんはあっちの部屋だ」

女部屋を指差している彼は爽やかに茶色の前髪を流した美男子で、技師よりもホストの方が似合いそうだ。

「ん？ あたしはアルバスと同じ部屋で構わないぞ」

「そ、そうか、ガイジンは進んでるんだな……。でも風紀上問題があるから桜花達の部屋に行けよ」

何か勘違いをしているようで、彼が顔を赤くしている。

今までは彼女の言葉に甘えてきたが、確かにサイボーグとはいえ男女が同じ部屋で寝泊りするのはいまずい気がする。その手の経験が乏しいもので、まったく意識していなかった。こちらを見ているシヤルに、彼に従うように促す。

「案内してくれてありがとう、翔」

「……」

お礼の言葉を述べると、彼が私だけに聞こえるように顔を近づけてきた。

「——親父の紹介だから大人しくしてやっているがな、桜花に手を出しやがったら容赦しねえ、覚えとけよ」

手を出すつもりは無いが、脅されるのは苦手だ。情けなく黙って頷いた。

明日から一苦勞しそうである。居間に戻っていく後姿を見ながら、『桜花』は機体の方か人の方かと悩んでいた。

翌日の朝は頭を蹴られて目を覚ました。足を私の枕にのせて大きいびきをかいていたのは、やはりと言うべきか父親である。お陰で寝なおす気もせず、てきばきと身支度を整えた。

翔と俊男は横を向いて静かに寝息を立てている。どうやって寝ていたのか知らないが、部屋の端まで飛ばされていた毛布を神代に掛けなおしてやり、男部屋を後にした。布団というのは他人との障壁がなくあまり好きになれない。

食事の準備を手伝おうかと思い台所に向かうと、既に女性陣があくせくと動いていた。意外なことにシャルまで調理に加わっている。

「おはようございます」

挨拶をして台所に足を踏み入れた。味噌やら油の、空腹感を加速する匂いが漂っている。所々錆びついているコンロといい、正円の断面をした銀色の蛇口といい、なかなか年季のあるキッチンだ。

「あらアルバスさん、おはようございます」

「おはよ。早いだね」

母娘がすがすがしい挨拶を返してくれる。対してシャルにはいつも通り鼻を鳴らされた。

料理はほとんど完成しており、三人が器に盛り付けをしていた。朝食にも関わらず味噌汁に目玉焼きに海草サラダと豊富なメニューで、とても日本人らしい。

「何か手伝えることありますか？」

「それじゃあ、男衆を起こしてきてもらってもいいですか？ 布団を引き剥がせば起きると思うので」

味噌汁をよそいながら咲耶が答える。

「分かりました」

意気揚々と男部屋に戻っていったが、子供みたいに布団から布団に転がり回る父親に気骨が折れた。

TETRAMのドックはプレハブ住宅から3分ほど歩いた場所があり、機体の搬出入の為か山道がアスファルトで固められて整備されていた。ちなみに決勝リーグ進出者の4つのベースは会場を囲うように東西南北に配置されており、残念ながら他の機体を見ることはできない。

製作所の人間に続いてドックに足を踏み入れる。鉄骨が剥き出しでありトタン屋根が張られている粗末な建物の中は、職場と同じ油の臭いがした。

桜花は盤木に拘束されるようにして直立していた。目本製TETRAMの特徴ともいえる、顔部に並んで設置されたセンサー——二つの目が私を見下ろす。少し前屈みになったスマートな人型のフォル

ム。紅い装甲は関節周りを思い切って削られており、フレームやコ
ードが覗いている。特に脚部に力を入れているようで、軽量化され
た骨組みの中にもシヨックアブソーバが複雑に埋め込まれていた。

「どうだい兄ちゃん、桜花を近くで見てみた感想は？」

「凄い綺麗です。感動して言葉が出てこないです……」

試合中は映えない古い機体に見えたが、こうしてまじまじと見て
みると、この巨大で複雑なシンメトリの構造体は背筋を震わすほど
私を引き付ける。

「馬鹿親父！ 紛らわしいからここではTETRAMって呼べって
言ってるよね？！」

何故か顔を赤くした桜花が神代に詰め寄っていくのを尻目に見な
がら、早速作業を始めている翔と俊男に近づく。彼らは先日の試合
で巻き込んだ砂を取り除いているようだ。私も、まだ済んでいない
左足の前に工具箱を下ろした。

「おい、お前何やろうとしてんだよ？」

翔が作業を止めこちらを睨んでくる。

「砂を取る手伝いをしようと思って……」

洗浄といっても、ただ刷毛を振るだけの作業。それくらいなら私
でも出来ると思われた。しかし彼は喧嘩腰ですぐ近くまで寄って
くると、親指で出口を指差したのだった。

「素人が触るんじゃないねえ、お前はホウキで床でも掃いてろ」

「ごめん……」

大人しく工具箱を持って離れる。TETRAMへの思いが先走っていたらしい、でしゃばり過ぎに気をつけるとしよう。

私のような新人がいるせいもあるだろうが、それ以前に吉野製作所の面々はどこかピリピリしているような気がした。

「お疲れさん！」

することも無くなり建物の鉄骨の錆落としをしていたところ、後ろから声をかけられた。桜花が缶ジュースを器用に二つ持った手を上げ下げしている。

「どうも……」

彼女が錆を落とした箇所には腰掛けて、隣を指差す。それに従い腰を下ろし缶を受け取った。

「悪いわね、うちの男二人が強く当たってるみたいで」

「いや、こっちこそ調子に乗ってた」

返事を聞いていないようで、彼女は黙って体を揺らしている。その横顔を横目で見ながら、話が再開されるのを待つことにした。母親似で、高い鼻にすっきりした顔立ち。薄化粧だが、それさえ不要に思える柔らかさそうで綺麗な肌をしている。魅力的な大きい目

は今こそ半分閉じられているが、伏せられた長いまつ毛も男には致命的だ。

「——去年の大会ね、予選直前に機体を壊されたの」

桜花が決心したように口を開いた。

——壊された。聞き間違いかと思い、つい先刻の記憶をほじくり返す。確かに彼女は、機体が壊された、と言った。

「え……」

「結局一試合もできないで大会が終わっちゃってね、あの時はだいぶへこんだなあ……。犯人は分からずじまいだったけど、あれからみんな神経質になってるんだ。まあその状況で部外者を連れてきた馬鹿親父にも、空気読めって言いたいんだけど」

桜花が反動をつけて勢いよく立ち上がり、こちらに背を向けたまま両手で尻をはらった。

「そういう訳で、あんまり彼らに刺激を与えないようにしてもらえると助かるわ」

「分かった。教えてくれてありがとう」

大会で上位になれば市場が大きく広がる。その為大会中は罪を犯してまで勝とうとする会社があると聞いていたが、ここが被害を受けていたとは驚きだ。

彼らの力になれると思って楽しみにしていたTETRAMとの対面も、現実との激しいギャップに肩を落とすこととなったのだった。

「決勝はいつ始まるんだ？」

私達は夕食の後家を抜け出し、バーベキューの給水施設で水道を
囲んで胃袋を洗っていた。ネクロフィリアか黒魔術的な意味合いに
聞こえなくも無いが、洗っていた。

「明々後日だ。初戦は八木製鋼所の八木ソーバ、桜花なら余裕で倒
せるだろ」

シャルが嬉しそうに頷いて聞いている。

「ただ、一つ気になることがあるんだよね……」

「なんだ？」

「あの八木ソーバって機体は、予選で格下としか戦っていないんだ。
それ以外は試合の前に相手にアクシデントがあって不戦勝になっ
てる」

八木製鋼所といえばヤクザの資金源の温床と言われており、関わ
っている連中も柄の悪い人間ばかりである。それだけに不自然な不
戦勝に対して嫌な予感がしていた。

その時、静かだった給水施設に一つの大きい爆発音が届いた。

「なんだ?!」

「あつちから聞こえた」

シャルが指差しているのは、桜花の格納されているドックの方向である。嫌な予感がじわじわと形になっていくのが分かった。

無我夢中でドックに向かつて走り出す。桜花は昨年機体を壊されたと言っていた。彼らは尋常でなく悔しい思いをしたはずで、今年はその無念を胸に必死で頑張ってきたに違いない。彼らの努力が無駄になることなど、決してあってはならない。

大きな南京錠の鍵は開いていた。震える手でドックの扉を開ける。

「そんな……」

腰が抜けて尻餅をついた。桜花は朝見たそのままの荘厳な姿でいると信じていた。

膝関節がバラバラに砕け、自重を支えきれずに盤木を巻き込んで前のめりに地面に伏した無残な物体。信じたくはない、しかし紅い装甲と手の込んだ脚部は紛れもなく桜花である。二人は魂が抜けたようにその光景を呆然と眺めていた。

「やっぱりてめえかア!!」

頬に激痛が走り正気に戻った。視界が白くフェードアウトして回る。

「アルバス?!」

「やめなさい、翔!」

もう何も分からない。叫び合っている声も薄れていき、私は意識を失った。

0303：暗雲

顔にじんじんと刺さるような痛みを感じ目を覚ます。木の組みまれた天井を背景に、左右から私を見守るシャルと桜花の顔が見えた。

「つつ……」

頬を触ったところ、顔中が侵食されたみたいに激痛が走り、思わず顔をしかめた。口の中には血の味が残っている。

「——ごめんなさい！」

突然桜花が泣きそうな顔で、頭を下げて謝りだした。私の頭にビツクリマークが2つ点灯する。なんだかよく分からないが、こういう時男はダンディに慰めた方がいいのだろうか。隣で口をへの字にしているシャルに視線を送り、状況の説明を求める。

「TETRAMが壊されていた現場を見たのは覚えてるか？」

「あ、ああ……」

膝が折れ地面に伏していた機体の光景が蘇る。あれは夢ではなかったのか、再び胸にどんよりしたものが漂う。

「その後、あなたは翔に犯人だと思われて顔を殴られたの」

「そのまま意識を失うもんだからびっくりしたぞ」

あの時はショックで既に意識が朦朧としていたが、言われてみる

と断片的に翔の叫び声を聞いた気がする。

辺りを見渡すが、他の面々の姿は無い。男部屋より少し狭く、布団が綺麗に畳まれているここは女部屋のようだ。

「安心して、あいつは男部屋で伸びてるわ」

「翔が？ 何でまた」

「すまん。つい、かっとなって殴った」

シャルがぶすつとして答える。どうやらとてもややこしいことになっているようだ。それにしてもサイボーグのパンチを受けた翔は大丈夫なのだろうか。

「ああ見えても、あいつ昔ボクシングやってたのよ。それを一発KOなんて、シャルって何者？」

桜花に尋ねられ、今度はシャルが困った顔を向けてくる。返答に困り視線を彷徨わせっていると、部屋の柱時計が見えた。既に時刻は9時を回ろうとしている。慌てて振り向き、窓の外を見た。木々の向こうに青空が見える。ということは、あれから日付変わって朝の9時！

「桜花はどうなったんだ？！ 決勝は？！」

二人の暗い顔が返事だった。桜花が苦々しく説明を始める。

「今は親父が機体を見に行ってる。昨日見ただけでも損傷は甚大だったから、明後日の試合は当然無理として、他の決勝も危ないかもね……」

唇を噛み締める。そんな状況で看病してもらっていた自分が情けない。

ふらつく足を気合でカバーして布団の上に立ち上がる。二人が口を半分開けてこちらを見ている。

「ねえちよっと！ 頭やられたんだから、まだ安静にしていた方がいいよ？」

「もう大丈夫だ、ありがとう」

地面に伏すあの桜花の姿が、脳裏に焼き付いていて離れない。私が今すべきこと、したいことは安穩とここで寝ていることではない。

「あたしは止めてやらないぞ」

「シャルもありがとうな」

シャルの差し出した工具箱を受け取り、部屋を飛び出した。

初戦まで残り二日、意地でも桜花を競技場に立たせてあげたい。

ここに来てからずっと燻っていたものが、ようやく自分の中で炎を成した。

ドックに足を踏み入れる。地面に顔をうずめた機体の前で、神代が盤木に腰掛け肩を落としてタバコをふかしていた。

私の姿を確認して、疲れた顔が上がる。

「兄ちゃん、怪我の方は大丈夫なのかい？」

「はい、ご迷惑をおかけしました」

彼が私の持っている工具箱を不思議そうな顔で見た。

「愚問かもしれないが、なんでここに来た？」

「桜花を直す為です」

「気持ちはありがたいが、そいつぁ無理だ。膝のモーターが完璧にいかれてやがるからな。入れ替えてプログラムを組みなおせば1週間はかかる。まあなんとかリーグに1回出してやるのが精一杯だな」

「それじゃあ駄目なんです。吉野製作所なら十分優勝を狙っている、だから初戦までに修理しましょう」

「2日ですか？ そりゃあ絶対に無理だ」

苛立たしげに首を振る神代。

「こいつは自社製うちの特殊なサーボモータを積んでる。最初から造るにしても、成型から組み立てまでに最低4日はかかる」

「予備は無いんですか？」

「3個用意して裏の倉庫に置いたが、全部壊されてやがった」

どう転んでも決勝に出させないという思惑の伝わる、かなり悪質

な手口だ。

「見本や実験に使った物は？」

「……実験機があることにはあるが、特性が実機とだいぶ違うぞ」

同じ材料と鋳型を使おうが、造られた物は何でもどれでも微妙に異なる性質を持つ。当然コントローラはそういった誤差を抑えるように組まれているが、あまりに挙動が違うようならプログラム自体を書き換える必要が出てくるだろう。

「構いません、フィードバックでカバーしてみせます」

神代は黙って俯いていたが、何かを決心したようにタバコを落として靴でにじり潰した。

「——本気、なんだな。俺だって出来ることならあいつを戦わせてやりたい」

「それは僕も同じ気持ちです」

「信じてもいいのか、兄ちゃん……？」

肩と声を震わせている彼に向かって、大きく頷いた。

まずは伏せった桜花を何とかしなければならぬ。クレーンを動かし、盤木を立てなおして機体を起き上がらせた。

左脚が膝下から断裂しているが、外から見ると分には他に大きな損

傷は無いようだ。

「おやつさん、実験機持って来ました！」

「おう、ご苦労」

俊男の運転する軽トラックがドックに乗り入れられた。荷台には青いビニールシートに包まれた、円柱形の大きなサーボモータが積まれている。

彼は車を降りる際何か言いたそうにこちらを睨んできたが、結局舌打ちだけして荷物を降ろす作業に移った。

「左膝関節周辺の装甲を剥がす、手伝ってくれ」

「はい！」

神代の指示に従いナットを外していく。幸いにもフレームは焼けただけで外形を保っており、簡単に装甲を取り外すことが出来た。

三人がかりで壊れたモータを切断していると、戸口に翔が現れた。私の姿を見た瞬間に、目を見開き恐ろしい形相を見せる。

「てめえ！」

ドック中に声を響かせ、背中から火を立ち上らせそうな勢いで走り寄ってくる。一旦工具を置き、彼と向き合った。

「それだけ壊してまだ飽き足りねえのか？！」

殴るようにして襟をつかまれる。ボクシングをやっていたという

だけあって、物凄い腕力だ。

「桜花から離れる、今すぐにだ!!」

「やめろ、翔!」

泣きそうな声で喚き散らしている翔を、神代と俊男が引き剥がそうとする。大の男が密度濃く集まり、揉みくちやにされる。

昨日はTETRAMの先輩である彼の話を聞き大人しく退いたが、今日は状況が違う。なんとか腕を伸ばし、私も彼の襟をつかんだ。

「俺を犯人だと思おうが、スパイだと思おうが構わない。でも今はそんなことにこだわって、怒鳴りあってる場合じゃないだろ! 俺は桜花をリーグに出してやりたい、翔は違うのか?!」

「くっ、俺だって出してやりてえよ! でも——」

翔は悔しそうに歯を噛み締め、手を下ろした。

「翔、俺達は今出来る限りのことをやるしかないんだ。手伝ってくれ」

俊男が彼の肩にそつと手を置いて話しかける。神代は何を思っているのか、ただ一歩下がって私達を見守っていた。

作業が再開する。4人の間に修理の指示以外の会話は無かった。休憩が入ることもなく黙々と組み立てが進んでいく。

実験機の組み込みが終わり、予備の装甲をナットで取り付ける。なんとか第1段階は1日中に終わらせることが出来た。

崩れるように椅子に座る4人。皆一様に油で顔を黒くしており、首に巻いたタオルはびちょびちょだ。

「今日はここまでだな」

真っ暗になった外を見て神代が言った。組みあがりこそしたが、まだこのままでは脚を曲げることすらままならない。明日もまだ、データの測定とモデルの推定、プログラムの書き換えと目白押しで、決勝前に終わるかと聞かれれば、かなり際どいと答えざるを得ないだろう。

引き上げていく翔と俊男の後を追わずにノートパソコンを開いた。

「兄ちゃん、朝から動きっぱなしなんだから無理しちゃいけないよ。今日はもう帰って寝るぞ」

「先に行ってて下さい。もう少しだけやっておきます」

神代もドックを出て行った。パイプ椅子に腰掛け膝の上にノートパソコンを置き、一人で作業を続ける。

夢にまで見たTEAMをいじっているというのに、何も感じなかった。意地で重い体に鞭打ち、膝関節制御のプログラムを眺める。見やすく丁寧に組まれたこの英数字の羅列は誰が書いたものなのだろうか。少し汚れてしまった桜花の顔を見上げる。よく手の行き届いたあの機体といい、チームの繋がりが表れているように感じた。

「お疲れ」

脇に置かれた盆の音で、いつの間にか近寄っていた桜花に気がついた。わざわざ夕飯を持ってきてくれたらしい。パソコンを置いて箸を取る。

「これ食べたら家に帰ろ？ 寝ないと体持たないよ」

「もう少しだけ残るよ。プログラム見ておかないと明日仕事できないしさ」

腕時計は2時を指していた。全部目を通す頃には太陽が昇っているかもしれない。

桜花が近くの鉄骨に腰を下ろした。私が食べているのを無言で眺めている。箸が器に当たる音だけが、静かになった建物に響く。

「ねえ、桜花を壊したのって、あなた達じゃないのよね……？」

家を抜け出していた私達が疑われるのは無理もない。普通に接してくれていたように見えた彼女も、そんな複雑な気持ちの中で揺れ動いていたのだろう。無実を証明する術が無いのが煩わしい。

「ああ」

パソコンから目を上げ頷く。こんな一言で信用してもらえとは思っていないが、彼女は表情を和らげた。

「そっか……、良かった。ごめんね、変なこと聞いて」

盆を持って立ち上がり、ドックから出て行こうと踵を返す。

「――絶対に何とかする。だから何も心配しないで試合の準備をしててくれよ」

自分に言い聞かせるように発したその呟きが聞こえていたか聞こえていなかったか、背中振り向かずに小さくなっていった。

0304：結束

ノートパソコンを閉じ、座ったまま背筋を伸ばして深呼吸をした。立て付けの悪い天井の隙間から光が差し込んでいる。英数字と睨めっこをしている内に、いつの間にか朝になっただけらしい。

プログラムは読みやすく書かれていてだいぶ助かったが、それでも目が疲れて頭の芯が痛い。しかしこれくらいしなれば、今日中に桜花を修理できる見込みはない。

鉄の扉が開けられ、神代に翔に俊男、そして桜花がドックに入ってきた。

「兄ちゃん、まさか一晩中やってたんじゃないだろうな?!」

計測準備を進めている私の姿を見て、神代が怖い顔をしてやって来る。

「まさか。戻るのが億劫で、ここで仮眠とってたんです」

「そうか、それならいいが……。布団で寝ないと疲れは取れないだろ、今日は戻るようにな」

頷いて作業に戻る。今日の流れは実験機の実験値を計測し、プログラムに反映させること。変数を変えるだけで済めば助かるが、おそらくコントローラを再調整しないと右脚との挙動と合わせることができない。

延長コードはどこにあったらうか。きろろきろろして辺りを見

回していたところ、倉庫に続いているドアの前で手招きしている桜花の姿が見えた。

「それで、私のプログラムを見た感想は？」

近寄るなり、とびきりの笑顔で問いかけてくる。

「桜花が書いたのか、アレ。……いや、とても丁寧で見やすかったけど」

大雑把な性格に見えて、繊細で気の利く娘なのかもしれない。思っても口に出すわけにはいかないが。

返答した途端、桜花が眉間にしわを寄せる。

「やっぱり夜通しやってたんじゃない」

気まずい沈黙。鎌をかけられた。神代に告げ口されたら手伝えなくなるのではないかと焦る。

考えが顔に出ていたのか、私の様子を見ていた彼女が大きくため息をついた。

「親父には黙っておくけど、辛くなったら休んでね。もう無理する理由なんてないよ？ 頑張ってるあなたの姿を見て、翔達も犯人じゃないって気づいたと思うし」

「確かに潔白を証明できれば嬉しいけど、それが理由じゃないんだ。俺は桜花を試合に出してやりたい、今まで培ってきた全てを賭けて」

——クサイ。自分で言うておきながら、とてつもなく恥ずかしくてクサイ。

呆れたのか、力なく口を開いてぽけえ〜っとしている桜花。先程から面白いくらい表情が移ろい変わっていて見飽きない。

「……えっと、いや、すまん。作業に戻るよ」

場を寒くしたことを謝り、背中を向けた。

「技術者……、いや男っていうのは、ホントよく分かんない！」

言い捨て、後をついてくる。

五人がかりで計測を始める。昨日よりもスムーズに事が進み、あっという間に測定は終わった。

シャルと咲耶が大きな器におにぎりを載せて運んできた。もう半日終わってしまったというのに、プログラムの修正はあまり進んでいない。

焦ってパソコンと睨みあっていたが、横から差し出されたおにぎりを受け取った。

「間に合いそうか——って、その顔を見れば分かるな」

シャルが正面に置いてあった椅子に逆向きで腰掛ける。

「まあな」

海苔の巻かれた三角形のにぎりにかじり付いた。まともな食事は3食ぶりか。

「……なあ、あたしが試合に出るっていうのは駄目なのか？ 半分機械だろ」

「え」

TETRAMと肉弾戦をしているシャルの姿を想像する。まるで象と蟻が対峙したみたいな体格差。困惑しながら戦うパイロット。とうとう噴き出してしまった。それでも彼女なら勝てそうな気もしなくもない。

「む、あたしは本気だぞ」

「大きさとかアクチュエータの数とか、TETRAM自体に細かい規定があるから無理だな」

機体の構造は厳格に定められており、登録時と試合前の格納庫で確認される。シャルが行ったところで門前払いされるのがオチだろう。まあ、彼女がパイロットとして乗る分には一向に構わないのだが。

「そうか……」

「元気になった。ありがとう、シャル」

「励ましに来たわけじゃないのに、なんかむかつくな」

言葉とは裏腹に、彼女も安心した表情をしていた。

「あたしに何かできることはあるか？」

猫の手でも借りたい心境ではあるが、こればかりは制御工学とプログラミングのスキルが不可欠で力を借りられそうに無い。力仕事であれば馬力単位で活躍してもらえるのだが。

「今は大丈夫。この際だし、咲耶さんに料理教えてもらったらどうだ？」

「料理くらいできるぞ」

負い目無く即答したのは、この口か。

「——言っておくが、普通料理は小麦粉を粉塵爆発させたり、卵を炸裂させたりしない」

「む、アレは運が悪かったというか……」

「あれでドリンクが、ラムネ菓子を入れたコーラだったらとんでもないフルコースだったな」

返事をしないで皿を持ち帰っていくシャル。輝かせた目と足取りの軽い後姿を見ながら、ネタを与えてしまったことを後悔したのだった。

時計の短針が無常にも12時を指し、日付は決勝リーグの当日になってしまった。5人で分担してプログラムを修正しているが、予定よりも手こずっておりまだ半分程度しか済んでいない。

「くそっ……」

翔が机を叩く。間に合わないという気風が広がっているのだろう、皆がパソコンから手を離してうなだれている。

「もういいよ……、みんな頑張ったよ……。また来年頑張ればいいじゃない！」

桜花が立ち上がり、身振り手振りで訴える。昨年のことを思い出したのか、神代も俊男もひどく辛そうに奥歯を噛み締めていた。

「去年と一緒にだな。あの時は俺がアルバスの立場だった……」

翔が天井を向いて口を開く。

「必死で食わず寝ずで頑張ったのに、予選の朝までに間に合わなかった。なんだってんだよ、俺達は何をしたっていうんだよ……」

1人、2人、ノートパソコンを閉じて立ち上がる。機体に背を向け重い足取りでドックの出口に向かう彼らを見て、1人椅子に座ったままの私は悔しさで肩が震えていた。

「——なんでここまでやって諦めるんだよ」

静かなドックの中に私の呟き声が響く。

「桜花は負けてない。試合はまだ始まっていない。それなのにどうして諦めなくちゃいけないんだよ！俺は続ける、間に合わせてみせる——！」

再びパソコンに向き合い、キーボードを叩き始めた。昨日からの

過労のせいで腕は重いし、視界は霞んでいる。

「あなたは私達のこと、何も知らないじゃない……」

扉の前で振り返ったのは桜花。続けて泣きそうな顔で叫ぶ。

「私のもういいって、もういいって言うてるのに――。殴られたくせに。苦しいくせに。どうしてそれでも続けるの?!」

椅子から立ち上がる。

彼女は言っているのだ、お前は他人なんだから口を出すな、と。しかし他人だろうがガイジンだろうが、私は彼らのことを知ってしまった。彼らが何を思っているのかを知ってしまった。

「知らないことあるか! ――お前は明るくて、気が利いて、仲間思いの女の子。親父さんは酒飲みだしネジは緩んでるけど、みんなを1歩退いたところで見守って支えてくれる。翔は大切なものを守る勇気を持った漢。俊男は周りに流されやすいけど、工具を使わせたら1番だ」

早口でまくし立てる。

「――そして、みんな去年のことが悔しくて、今回の大会こそは活躍したいと願ってる」

4人は口を硬く閉じて、私の言葉を待っている。

「俺はそんな吉野製作所の皆が大好きだ。だから続ける。みんなの笑う顔が見たいから」

反応を待たずに腰掛けて作業に戻る。どうも今日はクサイ台詞に縁のある日らしい。しかしそれが本心なんだから、どうしようもない。

「ネジ緩んでる、はひどいじゃねえか」

向かいの椅子に、ねじりハチマキの男が腰掛けた。

「あんたを連れてきたのは俺の責任だ、最後まで付き合わせてもらうぞ。もつとも、こんなに熱血な兄ちゃんだったとはあの時は思いもしなかったがな」

翔がパソコンの前に戻る。

「まったく、とことん生理的にムカつく奴だ、てめえは。——そこま
で言い切ったんだ、血吐いてでも間に合わせる」

続いて俊男も彼の隣に座った。

「確かに俺達はまだ負けていない。情けないもんだ、いつの間にか諦め癖がついていたようだな」

光の灯るドックの中では4人が作業を再開し、キーボードを叩い

ている。1人暗い扉の前に残され、立ち尽くしているのは桜花。苦しみを拒絶したい気持ちと諦められない気持ちを交錯させて、彼らを呆然として眺めていた。

そんな一部始終を見ていたのは、外壁に寄りかかって座っている少女。

「試合の準備をしとけ。あいつはきっと間に合わせるぞ」

「——シャル？」

予想外の人間に声をかけられ桜花が驚いている。昼飯の後からずっと様子を伺っていたが、見るに見かねてとうとうお節介を出してしまった。

「信用してるんだね、あの人のこと」

彼女が無理して微笑みながら尋ねてきた。信用しているのかと聞かれると首を傾げなくなるが、頼りになる部分もあるのは確かだ。

「まあ、あたしの専属技師だからな」

互いに無言で視線を交わす。ティファレットに似た、輪郭の濃い意志の強そうな目だった。

とうとう桜花が諦めたように息を吐く。

「……分かった、私も信じてみる」

「うん」

家路についた彼女の後姿を見て思う。これだけ似合わない真似を

させたのだ、間に合わないなんてことがあればとことんシめてやる
う。

「シャルも一緒に帰らない？」

「あたしはまだ一仕事残ってるから、先に帰ってくれ」

振り向いた桜花の誘いを断り、地から腰を上げて家やドックと反対方向に歩き出す。

私では修理の手伝いをすることはできない。しかし私は私なりのやり方で彼らの手助けをするだけだ。

真っ暗なはずの森の中に、眩しい光線が何本も行き交っている。その正体は懐中電灯。大勢のがたいのいい男達が木々を掻き分け、吉野製作所のドックに向かっている。

「うちの試合までに修理が間に合うとは思えんが、念には念を、だ。気張れよ野郎共」

顔に大きな古傷をつけた男がドスの利いた声で戒めると、周りから同じく低い声が返ってきた。

「中島あ、おめえ本当に機体を壊したんだろうな？」

集団の内の1人が、少し遅れてついて来ている男に尋ねる。

「へえ、すっかり膝が爆発したところを確認しましたんで。ところで、なんであんな古汚い機体を避けてるんですかい？」

「馬鹿野郎、怖いのはパイロットの方だ。うちの健三郎さんどころか、あの東風と対等に戦える技量を持つているって話だからな」

「へえ、だからパイロットを痛みつけてやろうって訳ですね！」

「でけえ声出してんじゃねえよ！」

一足先に森を抜けた傷の男が、指先を上に向けている。男達が一斉に懐中電灯を消し息を潜めた。

彼らの睨む先には扉から光を漏らしているドックがあつた。男達は知らないが、その中では吉野製作所の4人が作業を続けている。

腐葉土の緩い斜面は、森から距離にして200m程度。間に隠れることのできる遮蔽物はない。

「おい、あそこに人がいるぞ……？」

男の1人がドックとの中間点を指差す。暗くてよく見えないが、他の面々の目にも確かに人影らしいものが1つ突っ立っているのが映った。

「まさか、かちこみのことがばれたのか？ どうします、兄貴」

それは周囲の自然と混じり合わない、一際浮いた存在感を放っている。動く素振りこそ見せていないが、自分達は威圧されているとその場の誰もが思った。

「うちの男衆が20人もおるんじゃ、構わずやれ」

傷の男の言葉を皮切りに、男達が武器を構えて波のように一斉に走り出した。あちらこちらで日本刀やナイフに光を反射させながら、弧を描いて人影に近づいていく。

三白眼で睨む、体格のいい男達が熱気と共に押し寄せる。普通の人間なら例えマシンガンを持っても逃げ出したくなる光景である。しかし影は逃げるどころか、彼らと真っ向から向き合った。

「——死んでくたばれ」

目に留まらぬ速さで拳を振り抜く様は、まるで小さな悪魔。

飛ぶ。転がる。まるでティッシュを撒き散らすように、屈強なはずの男達が夜空を舞う。

彼女の言葉は薙ぎ倒されていく男達の脳裏に、全身の苦痛と共に凄惨に刻まれたのだった。

決勝リーグ1日目。東富士の競技会会場は、激しい戦いを見ようと訪れた多数の人間で混みあっていた。それを横目に試合関係者に用意された席へと向かう3人。

「アルバス達はまだドックにいるのか？」

シャルが、前を歩いている桜花と咲耶に尋ねた。

「さっき朝飯持って寄ってきたけど、先に会場行っててくれてさ」

桜花はとてもパイロットスーツには見えない、黒いTシャツに作業ズボンという軽装をしており、脇にBCI接続の為のヘルメットを抱えている。

「昨日から休んでいないんでしょう？ お父さんはともかく、若い子達は大丈夫かしら……」

咲耶が心配そうにドックの方向を見上げる。

隣の関係者席には既に八木製鋼所のガラの悪い男達が足を投げ出して腰掛けていた。私達の姿を捉え、意外そうな顔を見せた後に嘲笑を浮かべる。

「これはこれは、吉野製作所のパイロットさん」

その中にいたスーツ姿の男が立ち上がり、太い猫なで声で桜花に話しかけた。互いにとびきりの商売笑顔で向き合う。

「健三郎さんですね、今日はよろしくお願いします」

「おや、覚えていただいているとは光栄です。しかしあなた方の機体はまだ来ていないようですが、今日は本当に試合ができるのですか？」

試合開始は今から30分後であり、それまでに格納庫にTETRAMが搬入されていなければ棄権負けになる。

「ええ、心配なさらないください。じきに搬入されるはずですから」

「アレを搬入してどうなるというのです？ 甘く見ないでいただきたい。いくらあなたでも壊れた機体では戦いになりませんよ」

健三郎の言葉を聞き、桜花の目が見開いた。桜花の膝のことはどこにも口外しておらず、マスコミも試合相手も知っているはずがない。

「なんで私達のTETRAMが壊れたことを知っているの……？」

「おっと口が滑ってしまったようだ、失礼」

鋭い目をさらに細くし、金の犬歯を見せて笑う。

「まさかあんだ達が——」

「棄権の為の書類を取ってきてあげよう、慣れているものでね」

イエスとは言わないが、その対応が答えということだろう。男が逃げるように関係者席を離れ、残された桜花が肩を震わせていた。挙動不審に視線を移していたシャルが、意を決してぎこちなく両肩に手を置く。

「桜花……、何て言ったらいいか分からないけど、きっと機体は間に合う。だから——」

「……大丈夫、今は目の前のことに集中するわ。ありがとうね、シャル」

手を重ねる桜花。機体は、まだ来ない。

パイロットの控え室にいるのは桜花と健三郎である。彼女はパイプ椅子に腰掛け、ここに来る途中で無理やり渡された棄権申請書を睨んでいた。窓の無いこの部屋からは外の様子を見ることができず、機体が到着したかどうか確認することができない。

「悪あがきは止めたらどうです？」

壁に寄りかかり、腕を組んでいる健三郎が話しかける。いつの間にかスーツから、動きやすそうな化繊の黒いユニフォームに着替え

ている。

「あれだけ壊れたんだ、修理なんて間に合うはずがないではないですか」

もはや壊したことを隠す素振りを微塵も見せない。よほど後処理に自信があるのだろう。

桜花は黙って、白紙の棄権申請書を彼に向けた。

「私はみんなのことを信じてる。あんた達みたいな卑怯者の言うことなんて、聞く耳持たないわ」

縦に、横に、4つに破り捨てられた紙。健三郎の額に汗が滲んだ。

秒針の音が、静かな部屋の中でやけに大きく響いている。カチツ……、カチツ……、一秒の間隔がこんなにも長かったとは知らなかった。

見せないように握り締めている拳が震えている。口の中が乾く。自分の体がワタシでない感覚。

——会場から大きな歓声が上がった気がした。

『パイロットは格納庫に移動し、準備を始めてください』

部屋の中に放送が流れ、時間が元通りに動き始める。機体が到着していなければこの時点で棄権になっているはず。なんとか間に合ったようだ。どっと肩の力が抜けた。

「なんだと……？」

健三郎の裏返った声を背に浴びながら、後ろ髪を纏めてゴムで縛る。来たときとは打って変わって軽い足取りで格納庫に向かった。

鉄の張られた小さな部屋に、紅の装甲を身に纏った鋼の巨人が盤木の助けを借りずに直立している。

諦めたはずの試合に出ることができる。嬉しさで頭の中が真っ白になった。

「みんな！」

機体の足元にいた3人の元に駆け寄った。

「よく棄権しないで、信じていてくれたな。さすが俺の愛娘だ」

「なにが『さすが』よ、馬鹿親父だったら昨日の晩に棄権してるわ」

歳に似合わない無理をしたのだろう、神代はとても疲れた顔をしていた。憎まれ口を叩かせる馬鹿なことばかりしているが、いざという時は頼りになる父親。いつも試合前にしているように、互いの拳をぶつける。

「桜花、去年の分まで暴れて来い」

「私これでも、おしとやか路線で売ってくつもりなんだけどなあ」

昨日まで鋭いナイフみたいにピリピリしていた翔が柔らかい表情をしている。ひよっとするとこの一年間、私よりも苦しんできた彼

だ、再びこういう顔を見ることができて嬉しい。同じように彼の鍛えられた拳と拳を合わせた。

「気張って相手の操縦席を潰さないようにな」

「だから、おしとやか路線だつてば！」

みぞおちに拳を撃ち込まれた俊男が、体をへの字に曲げて笑う。普段あまり喋らない彼だが、文句1つ無くここまでついて来てくれた。とても感謝している。

もう1人、私達が諦めかけた時でも励まし続けてくれた人間の姿が見えない。

「——アルバスは？」

3人が揃って口を閉じる。何か良くないことがあったのかと、背筋が冷えた。

「……修理が終わった途端に倒れてな、気持ち良さそうに寝息を立ててドックで寝てるぞ」

呆れたような、それでいて優しい表情で答えたのは神代。試合前にお礼を言いたかったが、それなら仕方がない、勝利を土産に持ち帰るとしよう。

『パイロットは機体に搭乗してください。まもなく決勝リーグ第1回戦を開始致します』

格納庫に放送が流れる。

「ちよつくら、行つて来る！」

誰も心配していない。3人は私が桜花に乗り込むのを黙って見守ってくれている。

半円のハッチが奥にスライドして開く。もう決勝中に座ることは無いと覚悟していた操縦席が私を迎え入れる。

「ただいま、桜花。見捨ててごめんね」

操縦桿の電源が入り、返事をするようにキーンと気持ちのいい起動音を立てて計器類が作動する。眼前のモニタには、足元に立つ3人の姿が映っている。ベルトを調整して体を固定し、ヘルメットのBCI端子を繋いだ。

「またしばらく無茶するけど、よろしく」

『これより決勝リーグ第1回戦を開始します』

待ちに待った試合開始を告げる放送に会場が沸く。予選のときよりも人が増え、熱気で暑苦しいことになっている。まあ、予選のときよりは彼らの気持ちも分かった気がする。

つい先程機体が格納庫に入っていたが、なんとか間に合ったようだ。咲耶とともに関係者席に大人しく座った。彼女もようやく安心した表情を見せている。

『西より入場したのは、八木製鋼所の八木ソーバ。不戦勝による戦闘回数の少なさが吉と出るか凶と出るか。パイロットは八木健三郎です』

大きな歓声を受けて黒い装甲のTETRAMが中央に歩みを進める。長い指と幅広い肩部というシルエットが、なんとなく悪魔を印象付ける。ペットは飼い主に似るというが、機械にも当てはまるのだろうか、隣の関係者席を眺めながら思った。

『続いて東より入場したのは、予選最終戦での活躍が記憶に新しい、吉野製作所の桜花。パイロットは吉野桜花です』

さらに大きな歓声と拍手に迎えられて桜花が姿を現した。心配な左膝のモーターも上手く動いており、壊れていた素振りも見せず中央まで歩いていく。スマートな紅い肢体は、先程の機体を悪とするなら、対照的に正義に見える。

「間に合ったみたいだな」

横から聞こえたのは神代の声。古い機械を担いでおり、後ろに翔と俊男が続いている。

「なんだそれは？」

「古い型だが、れっきとした無線だ。これで試合中の桜花とお喋りするんだい」

錆付いた金属の立方体に接続されているマイクを口に当ててみせた。

「お父さん、『お喋り』じゃなくて『支援』ですよ。桜花に迷惑をかけたら夕飯抜きますからね」

震えるふりをしている翔と俊男も、とても嬉しそうだ。椅子に載せた無線を囲んで5人が座る。

『構えて——』

八木ソーバが前傾になり、目一杯に開いた手を構える。対して桜花は脚を前後に開き、脇を締めて両拳を胸の前で握った。

試合開始のゴングと同時に、黒い機体が右腕を前に突き出す。手による攻撃が主体のようで、肘関節付近から圧縮空気を噴出し、腕の振りをさらに加速させた。桜花の頭部に迫るあの掌には、頭部を握り潰す為の機構が仕込まれているのだろう。

『遅いつ！！』

無線から音質の悪い桜花の声が流れる。次の瞬間紅い機体が前の足を軸に、背中を向けて回転しながら掌をかわした。振り向きざまに八木ソーバの後頭部に右足で上段後ろ回し蹴りを決める。

流れるような動作に観客が吞まれ、口を開けて啞然としている。

「いいぞぉー、桜花あー!!」

神代が立ち上がって叫ぶと、つられて会場からも大きな歓声が上がった。

八木ソーバがあくせくしながら振り向いて構える。予想以上の力

量差に焦っているのだろう。

落ち着いて——というより余裕を見せつけて、その様子を傍観する桜花。私の目から見ても、構えにも心にも全く隙が無い。

今度は先に動いたのは桜花だった。軽いステップで斜め前方に踏み込み、左右の拳打のコンビネーションを放つ。健三郎もさすがに決勝まで残ったパイロットだけあり、後退しながらも掌で弾き落としてチャンスを窺っている。

それにしても、桜花は機械とは思えない素早く正確で、柔軟な動きをする。アルバスに私が出る、と話したところ笑われたが、確かにいくらサイボーグといえどあれと正面から戦うのは無理そうだ。

——正面からでなければ、私が勝つが。

連打から回し蹴り、構え代わって上段、中段の突き。かろうじてといったところで、八木ソーバがやり過ぎす。

前蹴りで距離を詰めての逆突き。しかし拳打が動作の途中で止まる。黒の機体はそれにつられてガードしようと腕を下げており、空いていた頭部に正拳突きが撃ち込まれた。

「フエイントか！」

パンチをイメージしてBCI操縦で腕を動かしておいて、優先度の高い操縦桿で違う動作を上書きする高等技術——とか言っていたか。神代と共に柵から身を乗り出して2体を目で追う。

バランスを崩した八木ソーバの全身に、容赦なく拳打と蹴りが浴びせられる。動と静のリズムをキレイく刻む桜花の動きは旋風を思わせ、とても華麗だった。

「桜花のやつ、何か仕出かそうとしてるな……」

首を傾げて戦いを見守っていた翔が呟いた。

「どういこと?」

「普段のあいっなら、あの程度の機体は初撃で頭を潰して戦闘不能にしている」

『ちよつと、翔！ シャルに変なこと吹き込まないでよ!』

こちらの会話も桜花に届いているらしく、スピーカーから返事が流れてきた。神代が無線の前の椅子に戻る。

『——馬鹿親父、聞こえる?』

「ああ。あんまり対戦相手を虐めてやるなよ」

『……私達の機体を壊したのね、その対戦相手みたいなの』

「なにい?!」

桜花と健三郎の会話を聞いていなかった3人が、一斉に八木製鋼所の関係者席を睨んだ。

『彼らはその手の常習犯らしいわ。ひよつとすると去年の事故も、ね……。そんな奴らが平然と決勝リーグまで残っているのよ? 許せないでしょう』

冷やかな声がスピーカーから流れ、嫌な予感が駆け巡った。製作所の面々も同じらしく、青くなって無線を見つめている。

『——TETRAMは全て、腹部に操縦席があるのよね?』

「馬鹿野郎！ 変なことを考えるな、桜花！！」

神代がマイクを引き寄せ、必死になって叫んだ。会話の一端が聞こえてしまった八木製鋼所の男達も、引きつった顔でこちらを眺めている。

桜花が流れるような動きで八木ソーバの両腕を弾いてガードを外した。黒い胸部の下にある半円柱状の操縦席があらわになる。間髪入れずに追う紅い拳。

「桜花アア！！！！」

男三人が椅子を蹴飛ばしながら、物凄い勢いで柵に駆け寄って叫んだ。

『——な・ん・て・ね』

砕けた黒い装甲がフィールドに飛び散る。直立した黒い機体と前傾にしゃがんだ紅い機体が、互いに背中を向けて静止していた。

操縦席は——無傷。

八木ソーバが左足を巻き込むようにしてうつ伏せに倒れこんだ。そう、桜花が狙ったのは操縦席ではなく、壊されたのと同じ膝関節だったのだ。

歓声上がる会場の中で、私達と八木製鋼所の面々は仲間外れにされたように呆然としていた。

「桜花……さん？」

ふらふらした足取りで柵の前から戻ってきた神代が、マイクに話しかける。

『言っただでしょう、これからはおしとやか路線でやるって』

フィールドの中央では紅の機体と、操縦席から上半身を出した桜花が一緒になってVサインを見せていた。

寒い。腹が減った。このまま横になっていたら日本に骨を埋めることになる、体が警鐘を鳴らす。

古ぼけた赤茶色の格子が見える。あれは鉄骨の骨組み、ここはドックの天井か。私はぼんやりした頭で、冷たいコンクリートの床に仰向けになっている。

頬を拭った指に水滴がついていた。何か悲しい夢を見ていた気がする。

「ゆ——め——？」

ゆめ。睡眠中に感じる、まるで現実のような心象。つまり、私は寝ていたということ。

飛び起き——れずに、もそもそ体を起こす。頭が覚醒していくにつれて深刻な状況を理解していく。

恐る恐る盤木の組まれた壁に視線を移すが、案の定TETRAMの姿は無かった。……なんと桜花のリーグ初戦の前に、居眠りという愚行を犯してしまったらしい。

「終わった……」

両手両膝をついてため息を吐く。一年間楽しみにしてきたリーグの6戦のうちの一つを見逃しただけに飽き足らず、吉野製作所の面々からは冷ややかな目で見られるだろう。このまま穴を掘って引き

籠もっていたい気分である。

「うん、終わったわよ」

背後から聞こえた声。ドックの入り口に立っていたのは桜花だった。

「今起きたところ？ 折角寝顔を拝みに来たのに……」

皮肉を言われている気がする。にこやかな顔をしているが、やはり心中では怒っているのだろうか。

「桜花がここにいるってことは、試合はもう……」

「ばっちり勝ってきたよ」

彼女が誇らしげにVサインを見せる。

「それは、本当に良かった——」

桜花の腕前は文句なしにトップクラスである。その力を十分に発揮できたようで、技術者冥利に尽きる。

「ありがとーね、アルバス。あなたがいなければ、私達は去年と同じように諦めてた」

「どういたしまして。怒ってたんじゃないかったのか……」

「怒るって、試合を見に来てくれなかったこと？ 夜通し修理してくれてたことを知ってるからねえ」

彼女の苦々しい顔を見て、明後日の試合は眠りながらも気合いで見守ろうと思った。

「ともかく、TETRAM搬入したら飲み会やるみたいだから、二度寝はしないでよ！」

ドックの扉が最大まで開かれ、今度は機体の桜花がゆっくり歩いてきた。破損も傷も無く本当に試合があつたのか疑わしいくらいで、彼女の圧勝具合が目に見えかぶ。

「——ス、——るか？」

自分の世界に入り込んでしまっていたようだ。まだ寝ぼけているらしく、機体から声が聞こえた気がした。

「おい！ お前だ、寝坊助！」

きよろきよろして声の出所を探していると、TETRAMの腹部にあるハッチから翔が顔を出した。

「こいつを格納するのを手伝ってくれと助かるんだが」

頭を掻きながら親指で機体を指差している。

「いいのか、俺が触っても？」

「少々触っておいて、今更寝言言ってるんじゃないよ」

桜花と俊男に肩を押され、機体の足元に立った。昨日、一昨日と

無感情に作業していたが、こうして改めて向き合ってみると技術者の血がたぎる。

「ああ、任せろ！」

柄にもなく隠せない笑みが恥ずかしく、盤木に向かって走った。

「桜花の勝利を祝って、乾杯——ッ！」

神代の掛け声に続き、景気よくグラスの当たる音が響く。私達は盤木に機体を収めた後プレハブ住宅に戻り、こうしてちゃぶ台を囲んでビールをあおっている。

「まったく、まだ2戦あるっていうのに。——痛い、痛いってば馬鹿親父！」

ため息をつく桜花の肩を、父親が嬉しそうに叩く。フライングしたようで、神代の顔は既に火照っている。

ふと隣の席からビール瓶を傾けた合図をされ、グラスを差し出した。黄金色の液体に程よく泡が上る。

「どうも……」

「酔いが回らない内に言っておく。……ありがとう」

ビールを注いでくれたのは翔だった。外国では酒は自分で注ぐの

が常套だが、こういう人との繋がりを大事にする風習は悪い気がしない。真似をして注ぎ返す。

「もう聞いたかもしれないが、俺達は去年、予選前に機体を壊された」

一口泡をすすってから、グラスを置いて話の続きを待った。

「試合が近づくにつれてあの不安や悔しさを思い出して、お前にぶつけてしまっていたんだ。それなのに、お前は先導して桜花を修理しようと言ってくれた。……すまなかった。自分がちっぽけで弱いことがよく実感できたよ」

「そんなことはない。翔は機体が壊されてからの一年間、逃げずにめげずに桜花を支え続けてきたんだろ。それは弱い人間なんかでできることじゃない」

「アルバス……」

眉間のシワが消える。彼の笑う顔を、この製作所に来てから初めて見た。

「なに、この只ならぬ雰囲気は？」

一升瓶を大切そうに抱え込んだ桜花が、首を突っ込んでくる。鼻で笑って、翔は俊男の元へ向かっていった。

「只ならぬと言えば、アルバスとシャルってどーゆー間柄なの？」

「シャルと……」

桜花は興味津々といった様子で顔を覗き込んでくる。

私はシャルとどういう関係なのだろう。放っておけない居候。災厄の元凶。頼りになる相棒。きつと、それだけではない。ずつと一緒になりたいと望んでしまっているのだから――。

「おーい、俺の大事な大事な吟醸ちゃん知らないか――？」

神代が大きな声を出して、おろおろと台所から出てくる。

「ギンジョー？ 何それ？」

「米の美味しいところだけ使った贅沢な日本酒だ。茶色い一升瓶で――」

「こんな感じの？」

桜花が脇に抱えていた一升瓶を突き出す。

「そうそう、丁度そんな感じの……」

ラベルには『吟醸』の文字。

「うわーん、母ちゃーん！ 吟醸を、5000円を、生ビールと発泡酒の味の違いも分からない生娘に飲まれたー?!」

神代は泣きながら走り去り、桜花は新しい獲物を探しに行ってしまった。結局質問に答えることができずに。

夜の闇に映えている月に向かってえづいた。よろよると居間を抜け出した私は、軒下に腰を下ろして一人風に当たっている。

「あゝ、気持ち悪……」

もともと酒に強くないくせに、ついつい勧められた一杯を断れずに飲むからこういうことになる。頭が重くてだるくて動く気がしない。口から戻すわけでもなく、楽になるわけでもなく、再びえづいた。

ふと背後から足音が聞こえた。振り返り、無愛想な金髪の少女の姿を捉える。

「風情も情趣も、酔っ払いのせいでぶち壊しだな」

ほっとけ、と微妙にろれつが回っていない声でこぼす。

空けたスペースにシャルが腰掛けた。消化器官が無いためアルコールは直接吸収できないが、食道を通るときに粘膜から摂取してしまったようで、微かに赤い顔をしている。

「あたしの口臭くないか？」

「それ、酔っ払いに聞くか？ 飲み会終わったら洗いに行こう」

納得したようで、深く頷いている。

「——お前もお疲れさん。ちょっかい出しに来た奴らを追い払ってくれたんだろ？」

眉をぴくりと動かし反応した。

「——なんで知ってるんだ？」

ここしばらくドックに籠っていたので、当然シャルの行動は知らない。カマを掛けたのだが、彼女らしいというかなんというか、容易に引っ掛かった。怪訝そうな顔でこちらを睨んでくる。

「充電時間だ。普通に家事をしてたら、そこまで急激に減るわけがないからな」

「……ふん。お前がキモいくらい必死だったから、ちょっとだけ手を貸しただけだ」

ひねくれ者の横顔を眺めながら苦笑いする。再び現れた人影が視界に入った。

「ちょっと、主役がこんなところに逃げ込んで何のつもりかな？
まだまだ飲ませ足りないんだけど」

「今日の主役は桜花だろ——って、待ってくれ！ もう無理だって
！」

できあがっているのか知らないが、据わった目の桜花に引きずられていく。助けを求めようと手を伸ばす先で、我関せずシャルはそっぽを向いていた。

決勝リーグ2日目。カードは凍涼大学付属TETRAM研究センターの駆る『テンプラー』と、優勝候補であるトヨクTETRAM株式会社の駆る『東風』である。吉野製作所の面々も仕事を中断し、最大最強のライバルを見るため会場に訪れていた。

「いつも騒々しいけど、今日は一段と盛り上がってないか？」

シャルが周囲の観客を眺めながら、感心したような呆れたような声を出す。

「東風が出るからでしょ？ 私の試合の時の倍以上もマスコミが来てるわ。妬ましいわねえ……」

桜花が不適に笑い、相手パイロットのあずかり知らないところで敵対心を高めている。

「出てくるぞ。東口——、東風だ」

この機体の試合を生で見るのが、目本に來た本来の目的だったりする。思わず前屈みになって目を凝らす。

格納庫から曇りの無い光沢を放つ金色の機体が姿を現した。実力が伴わなければ悪趣味と罵られるのだろうが、あの英雄はむしろ威光を高めている。会場のボルテージも上がり、息の合った東風コールがかかった。

「強いのか？」

「過去の戦歴は全勝無敗。州でも最大規模の企業が手がけているだ

けあって、機体の性能は世界でもトップクラス。さらにパイロットも歴戦の勇士とくれば、まさに死角無しって感じだな」

続いて反対側の格納庫から青い装甲の機体が歩いてくる。スマートな骨格に西洋鎧みたいな曲率をもった装甲の纏い方をしており、桜花と同じ機動力重視の機体のようだ。明日の試合の立ち回りを考えるいい材料になるだろう。

5日目のテンプラー戦のことなど眼中に無いようで、桜花は口を閉じ、真剣な眼差しで金色の機体を眺めていた。

帰路につく吉野製作所の面々。皆一様に暗い顔をしている。

試合は、圧倒的だった。東風は、持ち前の足回りで翻弄しようとしたテンプラーの攻撃を冷静に捌き、強力なフェイントを頭部に決めて、たった一撃で沈めたのだ。

技術者視点で言っても、あの機体は飛び抜けていた。ラスターのようなオールラウンドタイプのフレームを持ちながら、テンプラーと同レベルかそれ以上の機動力と反応性を持つ。そのくせ日本製のマニピュレータの特性はそのまま、素早く静かに精密な動作をしてくる。

穴を探すつもりで試合を見学に来たのだが、むしろつるつるで、穴どころか凹みも無いことを実感させられたのだった。

「あれに勝てるのか？」

シャルが空気を読まない質問を浴びせる。桜花は苦笑いしながら足を止めた。

「こんなテンションで言っても信じてもらえないかもしれないけど、私はまだ勝てると思ってる」

皆も桜花の方を振り返って止まる。山道の木々が風にそよいでいる。

「T E T——桜花は、私達の3年分の思いがこもった最高の機体。ポテンシャルを引き出せば、東風にも劣らない機体になるって信じてる。あとは私があのパイロットより上手く立ち回れば勝機は見えてくると思うんだ」

桜花が頭を下げる。

「この頼りないパイロットに、みんなの力を貸して欲しい。一緒に優勝を目指そう！」

当たり前だ、と呟いた翔が拍手を送り、神代と咲耶も続く。俊男が桜花の頭をくしゃくしゃに撫でる。シャルも嬉しそうな顔をしていた。

つい先程まで絶望感に浸っていたのに、今や輝いた目を見せている面々。これが、絆。これこそが東風に勝つための秘密兵器ではないか。

「『みんな』の中には、もちろんあんたも含まれてるんだけどなあ」

いつの間にか正面に来ていた桜花が、手を差し出してくる。

「俺なんかの力でよければ、いくらでも」

彼女の手を取り、歩を進めた。

0306：酩酊（後書き）

ペースダウンしていて、読んで下さっている方々には申し訳ないです。トンデモ兵器全部出すまでは死んでも死にきれないので、地味に更新していくかとは思いますがよろしく願います。

0307：暗雲再び

一同はドックに戻り、明日の東風戦に向けて機体の調整を行っている。といつても分解している時間は無いので、痛んだ装甲の張り替えと洗浄くらいではあるが。

私はすっかり尻に馴染んできた例の鉄骨に座り、向かいの椅子に腰掛けている桜花と共にノートパソコンを開いてプログラムの確認をしていた。

「一晩中見てたんでしょう？ こうした方がいい、とか思ったところあった？」

桜花が自分のパソコンを睨みつけたまま話しかけてきた。

「いや、シンプルでいいプログラムだと思う」

「お世辞はいいの。どこを直せばいい？」

無難な返答は許されないようだ。昨日の酒の席あたりから、彼女の素顔が見え隠れしている気がする。——いい意味で。

胸を張って見せられるほどのものは無いが、少しでも期待に応えられるように私も我を出していくべきだと思った。

「今は機体の中だけでフィードバックを行っているけれど、操縦者の反射神経とかも考慮して制御系に含めればもっとスムーズな操作ができるんじゃないかな。それから——」

当社比1.5倍の速さでペラペラと言い連ねる。

ただのTETRAMマニアの浅はかな考察で、国の墓まで持ち帰

るつもりだっただけに、口から出してしまえてさっぱりした。

言い終えた私の顔を、桜花が黙って見つめている。促してもらったとはいえ、さすがに差し出がましかっただろうか。

ビツと親指が立てられる。中東では『お前のケツに突っ込むぞ』とかいう意味らしいが、この州ではどうだったか。

「やるじゃない。それ、採用」

「え？」

どちらにせよ、尻を窄めていた私はかけられた言葉に驚いた。

「何を気兼ねしてるのか知らないけどさ、アルバスはもう吉野製作所の一員で、酒を飲み交わした仲間なの。気になったこと、思ったこと、全部私達に聞かせてよ」

「桜花……」

「特にその切り札、必殺技みたいで気に入ったよ。技名は『おしとやかパンチ』でいいー」

「気に入ってもらえて何よりだ。思ったんだけど、なんでそんなに『おしとやか』に執着してるんだ？」

何気なくした質問だが、急に桜花は頬をほんのり紅くして、パソコンを乗せた膝をもじもじと動かし始めた。

「そ、それは、女の子らしい方が好きなのかな——って」

声のトーンが落ちる。今の姿こそ、よっぽど『おしとやか』ではないか。桜色のオーラが見えそうだ。

いつもと違う様相にドキドキさせられながら、伏せ目の先に誰を見ているんだろうなんてことを思っていた。

「そんな事はどうでもいいの！ こりゃ、いじる所が多くて、寝ている暇は無さそうだねえ」

ほんの数秒で、おしとやか崩壊。その後二人して黙々とプログラムを修正する作業に打ち込んだのだった。

作業はなんとか日付が変わる前に終了した。桜花が機体に入り込み、最終チェックを行っている。

ドックの中央に立つ紅の機体。水銀灯の浅い光の下、手足を滑らせ流れるように半身の構えをとって演舞を始める。

腕が伸びきると同時に綺麗に静止する拳。上体をぶらさずに華麗に薙がれる脚。とても機械とは思えない、体の隅々まで意識の通った動きを見せる。

吉野製作所の一同は素晴らしい仕上がり具合に満足気に頷いていた。私はというと、TEAMの調整に立ち会えたことに改めて感動し、興奮して鼻息を荒くしている。

操縦席から顔を出し、ぐっと親指を立てて成功の合図を見せる桜花。

「凄い、ほとんどラグ無しで私の動きに引っ付いてくる。いけるよ、これなら！」

機体の足元に駆け寄った男4人で腕を組み合わせる。

——東風に勝つ。そんな夢が現実味を帯びてきた。

いつの間にか席を外していたシャルと咲耶が夕食を持って来た。

両手に持った大きな給食バケツに誰もつつこまない辺り、シャルは馬鹿力なキャラで定着しているのかもしれない。

「ありがたい、もう腹ペコだったんだ！」

俊男の声を先駆けに皆が集まっていく。食欲旺盛な製作所の男連中が自分でご飯をよそっているのを一歩下がって眺めていたが、ふと背中をつつかれた。結構痛かった。

「お前のは、あっちに運んでおいた」

背後にいたのはシャルだった。てっきり暗殺者に点穴でも穿たれたのかと思った。

つついていた人差し指が例の鉄骨に向けられる。そこでは湯気を上げた茶碗が並んでいた。

「あ、ありがとう……」

礼を述べながら私は内心焦っていた。柄になく親切心を発揮しているシャル。彼女には悪いが、これは何か裏があると疑わざるを得ない。

隣に腰を下ろした彼女が、何を期待しているのか、ちらちらこち

らを覗いてくる。居心地の悪さを感じながら汁茶碗を手を取った。

「へえ、豚汁か」

味噌の対流するスープから、不恰好で不揃いなモノ——色彩から判断するに、おそらく人参やジャガイモが顔を覗かせている。どう見ても彼女の切ったものだと思うが、自分から言い出さないところを見ると、料理を教えてもらえと馬鹿にした私を驚かせるつもりらしい。小学生の家庭科実習かと苦笑しつつも、口をつけてすすんだ。

「美味しい。この大胆な具の切り方が、いい味を引き出しているよ
うな、いないような」

シャルの顔が分かりやすく、ぱーっと輝く。こんな表情をしているのを見るのは初めてかもしれない。

「コレ、あたしが切削したんだ」

「皮むき、な。凄いじゃないか」

さすがに、削った皮の方が中身より多かったんじゃないか、なんて図星になるであろうことは聞けない。黙って箸を進めた。

「……ここに来てからご飯を口にしてただろ？」

何が言いたいのかわからず、汁をすすりながら話の続きを待つ。

「自分の作った料理を食べてもらって、とっても嬉しいことだと思った。だけど、あたしは今まで咲耶の作ってくれたものを捨てて

いたんだ」

「消化できないんだから、仕方ないじゃないか——」

「うっん。しっかりそのことも伝えて、咲耶に謝りたい」

「そうか……」

エンジニアにサイボーグの話をするのは、大工にバベルの塔、医者に幽霊の話をするようなものだ。私がそうしたように、気の毒な目を向けられるに決まっている。

まあ、本人がやると言っているのだから、わざわざ止めようとは思わないが。なんて、赤の他人のつもりで考えていたところに不意打ちが放たれる。

「——だからお前が、打ち明けられる雰囲気を作れ」

「俺がか?!」

それは、また、責任重大だ。

「うん。豚汁は手付金だ」

「やっぱり裏があつたのかよ！ さっきの料理のくだりで感心していた俺が馬鹿みたいじゃないか」

「それは悪かったな。でも、嬉しかったっていうのは確かに本心だ。アメリカに帰ったら一人で料理を作ってみたい」

珍しいことに、シャルは料理を食べ始めてから終始顔をほころば

せている。今更どうしてこの笑顔を奪うことができようか。――女
というのは、女というのは本当に卑怯だと思う。

「――気が小さいんだから、急かすなよ？ 期待もするなよ？」

悪い気はしない。彼女の『帰る』という言葉が、妙に嬉しかった。

白飯をかき込みながら、賑やかなドックの一角を眺めている。

彼に出会ったのは、ほんの5日前のことだった。

酔っ払い親父に連れて来られたのは、ひよろりとした男と小さな
女の子。最初は、とうとう人攫いでもしでかしたのかと心配になっ
たものだが、話を聞けばどうやら彼らを雇うことにしたらしい。人
手が足りないとは話していたが、本当に猫の手を借りてこられると
は思わなかった。

私達には前の年に機体を壊されたという痛い思い出があり、最初
は疑心暗鬼になりながらぎこちなく接していた。しかしそんな思い
は、一途にTETRAMを直している彼の姿を見ていつの間にか消し飛んで
いたのだった。

アルバスとは仲良くなれそうな気がする。隣り合ってパソコンの
画面を覗きながら、二人で同じ世界を見ながら、そんなことを思っ
た。

昨日は酒の勢いに任せて、シャルとの関係のことを尋ねた。兄妹

にしては似ていない二人。恋人にしては離れている二人。——結局彼は答えてはくれなかった。

私の視線の先でしゃべくり合っている二人。シャルが噛み付きそうな顔で睨みつけ、アルバスが手の平を向けて落ち着かせようとしている。彼らが互いに向けている表情は、家族に対するものとは違う気がする。

胸が締め付けられる感じがする。息が苦しいのか、心が苦しいのか。

——クリアだった私の中に、歪が生まれる。

月が西に沈み太陽が東から昇り、いよいよ東風戦の朝。しかし吉野製作所のドックでは、ウォーミングアップで乗った桜花に異変が起きていた。

「なんで?! どうして?!」

「落ち着け、桜花!」

操縦席から顔を出し、取り乱して喚いている桜花に神代が駆け寄る。機体の足元で製作所の面々も心配そうに見上げていた。

「フェイントが使えない?」

椅子に腰掛けさせられた桜花が話したのは、昨日は正常だった機体の、突然の不調だった。

「BCIの調子がおかしいのよ！　今までは大して気を払わないでもガシガシ動いていたのに、今日は意識をクリーンにしないと反応してくれないの」

意識を集中させるまでのタイムロスが、フェイントの絶妙なタイミングを崩してしまっているのだろう。

焦っていても仕方が無い、考えを巡らせる。

昨日プログラムをいじったせいだろうか。いや、コントローラが変わっただけでBCIの感度に影響が出るとは考えにくい。それに夜の試運転では順調に動いていた。

他に考え得る原因は――。泣きそうな顔で神代と話し合っている桜花を見る。

「……桜花に限ってそれは無いか」

頭から追いやり、機体の搬出作業を手伝った。

決勝リーグ3日目。故障だろうが不調だろうが試合は滞りなく行われる。しかし問題は本日の対戦相手が、トヨクテトラム株式会社の東風だということである。最善の状態で勝機が見える、というぎりぎりの戦力差でそれは致命傷になる。

『西より入場したのは、トヨクTETRAM株式会社の東風。過去の戦歴は全戦全勝、文句なしの優勝候補！パイロットは山田太郎です』

金色の機体がフィールドに足を踏み入れる。汚れの無い装甲が全身に光を流す。歩行中でも一切上体のぶれない、抜群の安定感。威風堂々としたその姿はまさに王者。

沸いた観客によって空気が揺れた。見物人は昨日よりもさらに増え、通路もびつしりと埋まっている。

『続いて東より入場したのは、人気急上昇中の紅き闘将、吉野製作所の桜花。パイロットは吉野桜花です』

桜花がフィールドに入り、東風に負けない大きな歓声が浴びせられる。しかし先入観のせいか、紅の機体はどこか元気が無いように見えた。

『構えて——』

会場が静かになる。誰もが息を吞んで戦いの合図が告げられるのを待つ。止まった会場の中で、唯一両機体がモーター音を鳴らせ半身になって構えた。

ゴングの音が鳴り響く。

フライング気味で飛び出したのは同時だ。あっという間に間合いが詰められ、拳と拳で激しい応酬が交わされる。

呼吸も瞬きも忘れ、絶え間なく金属音を立てる両者を凝視する。
神代が無線に向かつて、落ち着くように必死で叫んでいる。翔も
俊男も唇を噛み締め、拳を強く握って見守っている。

ようやく、追うので必死だった拳に目が慣れてきた。繰り出す数
はほぼ互角。しかしどちらが有利かは一目瞭然だった。

桜花の右のストレートと同時に東風が左のストレートを放つ。し
かし腕と腕がねじれるようにしながら、内側の金色の拳だけが相手
の顔を打つ。次に放った桜花の中段突きが肘で落とされ、再び顔に
パンチがめり込む。片方のセンサカメラが潰され、紅の破片が撒き
散る。

神代が悔しそうに目を閉じ、首を振った。桜花は完全に頭に血が
上ってしまったている。機動重視の機体が殴り合いを挑んでしまった
時点で勝負は決まった。

東風が左のジャブを放つ。つられてガードを上げる、隻眼の桜花。
違う。気づいた時には時既に遅い。——それがフェイント。
体を沈めた金色の機体。

東風の華麗で強烈なアッパーカットが決まる。光沢ある機体が拳
をかち上げる様は、まるで雷が走っているようだった。紅色の頭部
がフィールドに転がる。両膝をついた桜花。

無敵の王者の勝利に、会場中の観客が立ち上がって沸く。しかし
呆然としている私の耳に、その声は入ってこなかった。

0308：求解

決勝4日目。会場では八木製鋼所と凍涼大学付属TETRAM研究センターの試合が行われているはずだが、私達はドックに残って桜花の修理をしていた。

アッパーをかまされ頭部を外され、徹夜で修理するのかと身構えていたが、神代が言うにはたいしたことは無いらしい。昨日は試合の後丸々半日を費やして飲み会をしていた。健闘を称えて、その名目だったが、桜花を励ます為に開いていたのだと思う。

桜花は試合の後、機体を降りるなり私達に頭を下げて謝った。皆は気にしないように話したのだが、彼女はそれからずっと暗い顔をしている。BCIの不調に焦っていたとはいえ、無線に耳を傾けずに近接戦をしてしまったことを悔やんでいるのだろう。今日も修理を手伝いにこそ来たが、ぼけーっとしていて危なっかしいので神代に見学するように指示されていた。

「オーライ、オーライ……」

神代の掛け声に合わせて、俊男の運転するクレーンが桜花の頭部を降ろしていく。首の断面から切れたケーブルが垂れ下がっているのを見ていると、私まで首の後ろがむず痒くなってくる。

桜花の顔はだいぶ痛み、砂で汚れていた。八木製鋼所の時といい、この機体は顔を地面に埋めることが多いのではないか。こちらの言葉で言えば、鬼門？ 暗剣殺？

クレーンが固定され、俊男と翔が桜花の肩の上で溶接を始めた。鼻の奥でつんとくるが癖になる臭いが漂い、青白い火花が降り注ぐ。本職の邪魔をする訳にもいかなないので、桜花の隣に腰掛けて一緒

に見学することにした。

「ごめんね、アルバスがあんなに頑張ってくれたのに……」

桜花が地面を見つめたまま口を開いた。血の気が引いた白い顔をしており、髪の色は失われ、背筋は曲がり、瞳は光を失っている。人間気持ち次第でここまで変わるのかと驚かされる。

「皆も言っただけ、気にするな。俺は桜花の落ち込み具合の方が心配だ」

「……もう、終わったんだよね」

言葉を失う。まだ桜花も東風も1試合残っている、なんて、そんな無責任なことは言えない。確かに東風が負けて、2勝1敗で並べばもう一度戦うチャンスはあるだろうが、彼の最終戦は八木ソーバである。八木製鋼所には悪いが、地球が逆回転したって東風が勝つだろう。つまりもはや私達がいくら頑張ったところで、あの機体が優勝するのを止めることは叶わないということ。

「優勝なんて、私には無理だったの。なんであんなに熱血してたんだろ——」

何か言わなければいけないのは分かっているのだが、かける言葉が見つからない。そんな自分が情けなく、彼女の横顔を見つめたまま拳を強く握り締める。

「おう、桜花——と兄ちゃん！ ちょっといいか？」

ふいに呼ばれ、あわてて顔を上げる。二人の視線の先、扉の前で

は神代が大きく手を振っていた。

山の斜面に沿って、木漏れ日の道を走る白い軽トラック。対向車は滅多になく、緩やかなカーブを悠々と回っていく。

半分開かれた窓から入ってくる風が気持ちいい。空気が美味しい、とはよく言ったものだ。

助手席に座る桜花も落ち着いたようで、窓枠に肘をつき流れていく景色を眺めていた。ここからでは顔を見ることはできない。赤茶色の毛先が無造作にうねっていた。

私の運転する軽トラックは、山道を下り麓の町を目指している。

というのも、手の開いていた私が彼女を脳神経外科に送り届けることになったからである。医者に行くと聞いて心配したが、その人は神代の古くからの友人で、TETRAMのBCIに関しても技術者より詳しいらしい。閾値が上がった原因を突き止め、彼女の調子を戻さなければ、明日に控えている凍涼大学戦に勝つことは難しいだろう。

桜花の案内で辿り着いたのは、何の変哲も無い小さな診療所だった。昼の休み時間だったらしいが、気前よく診てくれるという。早速頭にたくさんコードが伸びているヘルメットをかぶされた彼女が脳波の測定を始める。

「どうですか？」

正面に座っている医師に、心配そうな表情をした桜花が尋ねる。

「——いや、原因も何も、いたって正常ね」

答えたのは、濃い化粧をした40代くらいの女性。不自然な、まっ赤な唇が毒々しい。切り揃えられ、中央で分けられた前髪の下に赤い縁の眼鏡が掛けられている。

「へ？」

「BCI操縦に影響が出るほどの脳波の乱れは無いってこと」

モニタをくりりと回して桜花に向け、計測結果の説明を始める。

「そもそも、あの技術——、フェイントだったかしら？ あれには余計な箇所のニューロンを発火させないっていう、特殊な脳内環境が必要なのよ。だからやり方を覚えたところで誰でも使えるっていう訳じゃない。これを見た限り、あんたの脳はいつも通り深沈してるけど……」

「でも実際にフェイントが使えなくなってるんですよ？」

困った顔をしている彼女に代わって私が尋ねる。すると医者が椅子を回してこちらを振り向き、小さく笑みをこぼした。

「——失礼、自己紹介がまだだったわね。私は遠藤巴。あなたがアルバス君ね、飲んだくれに電話で聞かされたわ」

「はあ、どうも……」

まさか自分の名前を言われるとは思っていなかったのも、少し戸惑う。

「あいつ、吉野製作所の跡取りにするって、一人で意気込んでたわよ」

遠藤さんは私達を見比べて苦笑いしている。

「へ？」

「あの馬鹿親父……！」

桜花がモニタから顔を上げて口を曲げた。

「あら、乗り気じゃなかったの？ あんた昔っから鉄臭くて心配だったから、私は賛成してただけだねえ」

素知らぬふりで、にやけている遠藤さん。桜花が耳の先まで真っ赤になった顔で口をぱくぱくさせている。

「もしかして翔君と既に？」

「勝手なこと言わないでください！ それに、アルバスにはもう――」

「――ちょっと待って！」

大きな声を出した遠藤さんに手の平を向けられ、桜花の言葉が途切れた。モニタを凝視して、真剣な顔で考え事を始めている。

ところで桜花の台詞の続きが気になった。私にはもう――？ 何と言おうとしていたのだろうか。

「なるほど、ね……」

遠藤さんが満足そうに呟く。何を納得したのか分からないが、装置の電源が切られた。

脳波に深刻な問題が見つかったのかと思い、二人息を吞んで口が開かれるのを待つ。

10秒。20秒。気まずい空気のまま時間が過ぎる。

「先生、そろそろ午後の診療の時間になりますが、患者さんに少し待ってもらいますか？」

白いカーテンを寄せて看護師が診療室に顔を出し、沈黙を破った。

「——はい、コレ」

遠藤さんが長細い紙切れを私に差し出す。

「何ですか、これ？」

「いらないうって言うてるのに、患者さんが無理やり置いてったのよ。孫でもいればよかったんだろうけど、生憎こんな偏屈な女について来てくれる亭主はいなくてね——。さて、後はあんたに任せた」

「え？ 任せたって、そんな無責任な？」

数人の看護師が部屋に入り診療の準備を始め、これ以上話を聞く雰囲気ではなくなってしまった。そのまま入り口の前まで追い返される。

開いた口が塞がらない。とりあえず桜花と顔を見合わせる。与えられたヒントは、――紙切れ。

姦しい声を降り注ぎながら、うねるレールを猛スピードで駆け抜けていく乗り物。単調な動きで周回し続ける、ファンタジーな色調の馬。子供の笑顔がお父さんの力量にかかっている、回るコーヒークップ。

どういう訳か、私達は同市に在する遊園地に来ている。遠藤さんがくれた紙切れは、この一日フリーパスだったのだッ！

……もう、頭がイタイ。

「本当によかったのか？　まだ桜花の修理が……」

貰った以上、園内には入りはしたものの、心はドックに置いてきたままである。

「親父に電話したけど、3人いれば十分だし、折角だから楽しんで来いってさ」

「そうか……」

それ以上聞き返すこともできず口を閉じる。

あのお医者様は私に任せたと云っていたが、遊園地で何をしろと
いうのだろうか。――全く、BCIや脳波と繋がらない。

「こーゆー所に来るって分かっていたら、お洒落して来たんだけど
なあ……」

作業服の裾を引っ張っている桜花は満更でもない様子で、心なし
か調子を取り戻しているようにも見える。

いつまでも気を張っていても仕方がない。私ができるのは、せい
ぜい楽しむ手助けをしてあげることくらいだろう。気持ちを切り替
え、ふわふわ歩いていく彼女の後を追った。

平日ということもあり、特に並ぶこともなく乗り物に乗ることが
出来た。それを良かったと思ったのは序盤だけの話であって、底知
れない体力と抜群の平衡感覚を持った桜花には、ついていくだけで
精一杯だった。

それでも、両手を上げてジェットコースターに乗ったり、お化け
屋敷の中で挙動不審になったり、ソフトクリームを歩き食いたり、
急降下するアトラクションの柱の座屈荷重を計算したりと、世の力
ツプル達がしているようなことをして何だかんだで一緒に楽しんで
いたのだった。

日も傾き、最後のアトラクションとして乗っているのは観覧車だ
ある。先に桜花に座ってもらったが、公衆便所の小便器を選ぶくら
い迷った末、向かい側に腰掛けた。

周りの視線が届くこともない狭い密室に男女二人きり。慣れない状況のせいで、研磨にかけられているみたいに精神が削られていく。

「おおー、よく見えるー！」

窓に両手をはり付けて外を眺めている桜花が声を上げた。いつの間にかゴンドラは頂上付近に到達している。

「今日はありがとだね。とっても楽しかった」

桜花が姿勢を正し、こちらを向いて話しかけてきた。

「こちらこそ」

「引っ張りまわしちゃってごめんね、疲れたでしょ？」

「疲れたけど、充実した時間を過ごさせてもらったよ」

つれられて行かなければ、あんなに乗り物に乗ることも無かっただろう。満足感と疲労はメーターを振り切っている。

会話が途切れる。園内の喧騒が遠くに聞こえる。会話の糸口を探そうと彼女の顔を見るが、わざとらしく視線を逸らされた。先日のことと距離が縮まったと勝手に感じていたが、まだまだ嫌われているようだ。気まずい。

「あの――」

「あのさ――」

思いついたように同時に声を上げる両者。さらに気まずい。

「先どうぞ！」

桜花が手の平を上に向けてジェスチャーしている。ここはお言葉に甘えることにした。

「悪いな。……診療所で話そうとしてたことって何だったんだ？ アルバスはもう——、って」

「アルバスはもう、シャルちゃんと——」

台詞が再び途中で切られる。

「シャルと？」

「……アルバスって、シャルちゃんとどういう関係なの？」

返答はいつの間にか質問に変わっていた。いつぞや尋ねられたが答えられなかった問いである。

彼女との関係を語るには、サイボーグの件を外すわけにはいかない。これはいい機会ではないだろうか。

「丁度あいつにも頼まれていたし、話すよ。この場で信じてもらえるとは思ってないけど……」

ゴンドラがスタート地点まで戻り、扉が開いた。

ソフトドリンクを片手に園内のベンチに腰掛け、シャルのことを

話し始めた。彼女との出会いのこと、サイボーグであること、ゾハルの場所を探すためにイフクとフロストランドまで飛んだこと。危ない目にあっていたなんて、自分で話をしておきながら夢物語のようないきさつにする。行ったり来たりの下手糞な話だが、それでも桜花は嫌な顔をせず終始黙って聞いてくれていた。

話し終える頃には園内は暗くなってライトアップされていた。

「サイボーグ、か。空飛んだり、股間からレーザー放ったり、おっぱいミサイル出したりできるの？」

ずっと黙っていた桜花が口を開く。本気を出したらどうだかわからないが、とりあえずシャルがそれらを見たことはない。

「できないだろうな。まな板ミサイルは推薦しとく」

「それじゃあ、話しかけると反応したり、歌って踊ったり？」

おもちゃロボットの売り文句みたいになっている。たまには呼びかけに反応してくれたり、歌ってくれるかもしれない。

「それくらいはできるかな」

私の返答が参考になったのかどうかは知らないが、桜花は再び黙って考え込み始めてしまった。このままでは埒が明かないので立ち上がる。

「帰るぞー。その話はドックに戻りなごう」

「——私、信じるよ。シャルちゃんがサイボーグだって」

桜花の口から放たれた言葉に、思わず耳を疑った。

「え？ 改造人間だぞ！ SFだぞ！」

自分で信じてくれと言いながら、その言い草はどうかと思う。

「受け入れがたい面もあるけど、確かに思い当たる節はいくつかあるし。それに――」

桜花もベンチから立ち上がり、体を傾けて斜め下から顔を覗き込んできた。

「それに、技師がそーゆーところで、適当なこと言えないのは百も承知だから」

「違うない」

今までのぎこちなさが嘘のように、一緒に大声を出して笑う。家族連れが怪訝そうな顔でこちらを見て行った。

「それじゃあ、2人は別に男女の仲ってわけじゃないんだ？」

「あいつの前でそんなこと言ったらアイアンクローされるぞ」

ベンチから離れ、パレードの行われている園内を歩く。午前中は混む前に出ようと話をしていたが、結局こうして人ごみに巻き込まれてしまった。

「桜花は『もう終わった』って言ってたけどさ、もうちょっと頑張

つてみる気はないか？」

もう遅いかもしれないが、あの言葉に返事をしなければならぬ気がした。歩きながらステージを見ていた桜花が、こちらを振り向く。

「凍涼大学に勝てば準優勝だし、万が一にも、万が一にも八木製鋼所が勝つてことだってあるかもしれない。それに、……個人的な話で悪いけど、桜花の戦う姿カッコいいから、もっと見ていたいな」

照れ臭くなつて鼻を掻いた。

「じゃあ、じゃあさ……、その万が一にも優勝したら、何でも一つお願い事を聞いてくれる？」

桜花の顔は次々移り変わる七色の光に照らされ、どんな表情をしているのか分からない。

私が叶えられる願い事など限られているだろうが、もう一度桜花がやる気を取り戻してくれるのなら、何でもしてあげたいと思った。

「ああ、俺なんかが出来ることであれば、約束する」

小指を立てた腕を前に出す。桜花も同じように腕を曲げ、二人はぎこちなく指を絡めた。

目本から所変わって、マメリカのハイウェイを突き進む一台のワ
ンボックスカー。

レウムとケセトは任務の為、敵対組織の施設に向かっている。

「ダアトは今目本にいるらしいね」

レウムが片手にハンドルを握り、片手でラジオのチューニングを
しながら助手席のケセトに話しかける。スピーカーから、ジーとか
ザーとか耳障りな雑音が流れ続けている。

「は、目本ですか？　なんでまた――」

「相方の趣味に付き合ってるみたいだ。ほら、丁度今TETRAM
の競技会の真つ最中だから」

「中佐はよろしいのですか？」

レウムがTETRAM好きだというのは周知である。その言葉を
待っていましたとばかりにニヤリと笑った。

「――仕事放つぽりだして、行ってもいい？」

「……」

ケセトの顔から、お付き合い上、辛うじてしていた笑顔も消え、
殺気が流れ始める。

「冗談、冗談だって！　そんなに怖い顔しないでよ！」

「……今回の任務は偵察です。早々に終わらせて向かえばいいかと」

「ありや。ケセトちゃんにそういうこと言われると、拍子抜けするなあ」

「私が人の趣味まで奪うような悪鬼羅刹の類に見えるということでしょうか？」

車内の体感温度が一気に下がる。と、その時ラジオの雑音が止み、曲が流れ始めた。

「お、合った」

チツと大きな音で舌打ちするケセト。

「――聞いてくれよ。俺、目本って聞いて思い出したんだけどさ」

レウムが、気にせずめげずに話を切り返す。

「そこで返事の為の間を空けないでください。どうせNOと言っても続けるんでしょう？」

彼がこの前口上を述べるときは、決まってしまうもない話がなされる。ケセトはため息をついて続きを待った。

「目本っていえばエロゲ大国だね。風の噂では少子化に拍車をかけたとか、かけていないとか」

「彼らは未来に生きていますから」

「ケセトちゃんは純愛派？ 陵辱派？ あえて触手？」

「セクハラは止めてください。——あえて言うならSM派でしょうか。中佐の御尻にケテブ・メレリでも突っ込めば、少しは気分もマシになりそうです」

助手席の彼女は冗談を言っている顔ではない。レウムはがたがたと震えている。

「……真面目な話に戻しますが、マルクトはダアトを追って日本に向かったでしょうか？」

「俺達に情報が入るくらいだから、間違いなく行っただろうね。これで日本に11人のギルグルのうち3人も集まったことになるのか……」

「3体ですか？ ダアトとマルクトの他にも？」

「ビナーちゃんが武蔵の偵察に行ってる」

「ビナーですか……。面白いくらいに曲者が集合しましたね」

「そうだね。まあ、俺達もさっさと済ませて、日本に向かうとしようか」

アクセルを踏み込んだ車はスピードを上げて、広大な荒地に敷かれた道路を駆け抜けていく。道の続く先、山間の町では暗雲が立ち始め始めていた。

決勝5日目。先日は凍涼付属が八木製鋼所に勝ったため、東風と戦うチャンスを得るためにも、絶対にこの試合を落とすわけにはいかない。

昨日は桜花の調子を取り戻すどころか、遊園地で一日中遊び呆けてしまった。諦めないと約束してくれたものの、ぶっちゃけ根本的に何も解決していない。

ため息が止まらないのは、神代や翔達に任せてもらったのに何も出来なかった無力さを痛感しているからだ。

格納庫では着実に試合の準備が進んでいた。

「やあ！」

突然後ろから肩を叩かれてよろめいた。

「元気無いよー、大丈夫？」

斜め下から顔を覗き込んでいるのは桜花だ。いつにも増して清々しい笑顔を向けてくる。

「試合前なんだからさ、もっとテンション上げていこうってゆーか。昨日私の戦う姿がカッコいいって言うてくれて嬉しかったから、気持ちよく見て欲しいってゆーか——」

尻窄みになっていき、後半はよく聞き取れなかった。

いつもの格好でヘルメットを脇に抱えて戦闘準備完了。とても彼女らしい。

「……昨日はBCIのこと解決できなくて、ごめんな」

「へ？　それで元気が無かったの？」

意外そうな顔をされ、むしろこちらが戸惑わされる。彼女は全く気にしている様子が無い。

「そうだけど……」

「心配しなさんな——、もう私は大丈夫。そんな気がする」

試合前のコールがかかる中、桜花は紅の機体をバックに親指を立てた。

『これより決勝リーグ第5回戦を開始します』

盛り上がっていく会場の隅を通り、格納庫から関係者席へと向かう。既にシャルと咲耶が席についてフィールドを眺めていた。

昨日の夕食の席で、桜花の後押しを受けてシャルがサイボーグだという一件を切り出した。信じる信じまいはともかく、信じようとしてくれた皆の姿勢が嬉しかった。

当の本人は心ここにあらずで、昨晚から何やら考え事に徹している。そういえば桜花にTETRAMの操縦方法なんかを聞いていた。

『西より入場しましたのは、凍涼大学付属TETRAM研究センタ

ーのテンプラー。八木製鋼所を倒したことで波に乗れているか。パイロットは海老原レオです』

大きな歓声を受けて青いTETRAMが中央に歩みを進める。曲率をもった装甲は見た目でなく、防御的な意味でも優れている。均整がとれたプロポーションと落ち着いたデザインに神々しさを感じた。

隣の関係者席に座っているのは大半が学生だ。私も機械科でTETRAMの勉強ができればよかったかと、うらやましく思った。責任者らしきスーツ姿の大人が私達と同様に無線を持ち込んでいる。

『続いて東より入場したのは、吉野製作所の桜花。今試合も激しい戦いを期待できるのでしょうか。パイロットは吉野桜花です』

すっかり、おしとやか路線から外れてしまったようだ。俊男が腹を抱えて笑っている。

入場口から紅の機体が姿を現す。膝の動作も頭部も全く問題なさそうで、小柄な戦士は毅然としてテンプラーと向き合う。

「きちんとBCIが動いてくれればいいけど……」

誰にともなく自分の不安を呟いた。

「桜花はオツケエとは言ってたが、俺達にや試合が始まるまで分からないからな。いずれにせよ、ここまで来れば応援することしかできないだろ」

神代が答える。それに男3人が頷いた。

『構えて——』

右足を引いて入身になる両者。同じ構えに見えて、紅い機体は軽く膝を曲げただけ、青い機体は重心が低く前寄りである。

試合の前にテンプラーのことを少し調べたのだが、パイロットの海老原は同大学在籍の全州レベルの空手部員らしい。多くの選択肢のある大学ならではの人事。――だが、私から言わせて貰えば、B C Iがあるのだから生身で強い人間を使おうというのは考え方が甘い。

ゴングの音が鳴り響く。

しかし本当に試合が始まったのか疑わしく、どちらも攻撃を繰り出さない。どちらも摺り足を始め、有利な間合いを確保しようとする。

消極的な戦いに、会場からはちらほら戸惑いの声が上がっている。

「アルバス、解説しろ」

そんな中真っ先にイライラ度を最大にしたシャルが、横に立って話しかけてきた。

「桜花もテンプラーも機動重視の機体で、パイロットは共に日本の格闘技を使う。ついでに後が無いと来れば、かなり動きづらいんじゃないかな」

『そういうこと。奴さん格闘技に慣れてて、なかなか立ち入る隙を見せてくれないのよね』

無線から桜花の声が流れる。その言葉から、彼女は既に切り口に目をつけているようだ。

「そう、相手は生粋の格闘家でパイロットじゃない」

「どういうことだ？」

「TETRAMで戦うっていうのは、リーチも間合いも癖も疲れ方も、生身の時とは全然違ってくる。加えてそれが一番顕著に出てくるのは――」

『入力に対しての出力までの遅れ時間――、タイムラグよ』

桜花が地面を勢いよく蹴って、テンプラーの懷に跳び込む。一見すれば、無考えの愚かな行動に見える。

「あのスピードじゃあ、迎撃される――?!」

シャルが胸の前で強く手を握って叫んだ。

しかしテンプラーの拳は振られない。桜花の順突きが顔部に迫ったところでようやく反応して飛び退く。紅の拳が胸部の装甲をかすった。

怪訝な顔をしているシャルは納得できていないようだ。説明を続ける。

「TETRAM戦で大事なものは、機体の癖を読み取って攻撃を予測すること。たかだか数ヶ月乗っただけで、現役のパイロットとの差は埋められない」

そのタイムラグがあるからこそ、生身の戦いで基本となるようなフェイントが最強の攻撃となり得る。

焦ったテンプラーが、上段の連打から下段蹴りのコンビネーションを放った。桜花は落ち着いて拳を払い、蹴りを脛で受けて、的確に反撃を撃ち込む。

「BCIの調子も悪く無さそうだし、こりゃ勝ったな」

神代が無線のマイクを置いて、背もたれに寄りかかる。

隣の凍涼大学の関係者席は、無線に向かって檄が飛び殺伐としていた。

「どっちにしろ、これに勝てなければ機体は必要なくなるんだ！
レオ、分かってるな？」

叫んでいるのは、責任者らしきスーツの男。それにパイロットが応答する。

『分かりました。悪いな、テンプラー……！』

再び一気に距離を詰めて、上段の連打を放つ桜花。しかし左右の拳は顔前でテンプラーに掴まれた。

『っ……?!』

無線から桜花の焦った声が流れる。会場の空気が変わった。

振り払って飛び退いた桜花を、間髪いれずにテンプラーが追う。空手独特の、一本槍のような突撃。なんとか上体を反らした桜花の眼前で、青の拳が風を切る。

「おいおい、どんな手品だ！ 急にテンプラーの反応速度が上がっ

たじゃねえか?!」

神代が慌てて体を戻す。

「火事場の馬鹿力ってやつか……?」

翔も歯を噛み締めて見守っている。

「いや、いくら気持ちを高めたところで、人間の反応速度なんてそう簡単に変わるものじゃない」

ましてや機体がパイロットの思いに応えてくれることなど、更にあり得ない。

桜花は戸惑いながらも、なんとか猛攻に耐えている。関係者席に座る私達が応援以外に出来ることは、急に強くなったテンプラーのカラクリを暴いてやるくらいしかない。人が変わったように——いや、機体が変わったように手足を振る青の肢体を凝視する。

「TETRAMが苦しんでる……」

シャルがぼつりと呟いた。テンプラーの顔を見るが、当然無機質な表情は変わっていない。

「苦しむって、どういうことだ?」

「ん。テンプラーが動いたときに、ギシギシ痛そうな音が聞こえる」

シャルの耳は集音こそ通常の人間と同じなもの、聴覚野に送る前に雑音をフィルタリングしている。この大きな歓声をキャンセルして、機体から出る微かな音を聞き取ったのだらう。

ギシギシという音、恐らくは装甲の軋む音だろう。関節部が擦れたのか。自重で脚がひしゃげているのか。いや、関係者席での問答を考慮すれば――

「オーバーシユート……。コントローラを切り替えたのか！」

モータに電気を流せば軸が回転する。このままでは機械に使うことはできず、入力（電気）に対して目的の量だけ出力（回転）させるのが制御である。言うだけなら簡単だが、入力してから出力するまでに時間がかかったり、目的値を超えてしまったりと両者の調整がとても難しい。二次系、三次系と複雑な構造になればさらに難解だ。

特にこの目的値を超えするというのはオーバーシユートと呼ばれ、機構自体を破損させる恐れがあることから、一般的な設計では極力避けられる。

テンプラーの反応速度の上昇、それは短縮されたサーボモータの遅れ時間分に他ならない。タイムラグだけを短かく出来るのなら初めからやっている訳で、今はその短縮と引き換えにオーバーシユートが大きくなり、関節が壊れそうな勢いで逆向きに反っているのだろう。

『あいつら、自分達の機体になんてことしてるのよ……』

桜花が苛立たしげに呟いた。彼女には、吉野製作所の皆で造り上げた桜花をそんな目に合わせるなんて考えられないはず。

いつ壊れてもおかしくない綱渡りみたいな戦法ではあるが、強化は著しい。

これで機動力はテンプラーが少し上回った。装甲も、軽量化された桜花よりもテンプラーに分がある。正直かなり不利な状況だ。

テンプラーが唸りを上げて放った拳を、桜花が手の平で軌道を逸らして往なす。前蹴りを脛で横に流す。最小限の動きで防いでいるが、それでも高速で技を繰り出しているテンプラーに対して反撃のチャンスを得ることはできない。

「こちららも機体を壊すつもりでいかないと勝てないか……」

カラクリは分かったが、打つ手が無い。先方と同じことをすれば流れは取り戻せるのだろうか、桜花を犠牲にするだなんて、吉野製作所の誰も望んでいないことだろう。もちろん私だってそんなことはしたくない。

『言っただでしょう、私は生粋のパイロットだって——！』

ピンチだというのに、桜花の声はまだ自信に満ち溢れていた。再びテンプラーが上段に重い正拳を放つ。あの速さでは、T E T R A M 同士となれば予測して手を出すのがやっとだろう。

桜花も再び、それを往なそうとする。テンプラーの肘近くに触れる桜花の手の平。

ミシミシと音を立てて軋む。おかしい。どうしてこの音が私にまで聞こえてくるのか。

装甲に歪みが広がる。まだ軋む。とうとう許容応力を超えた。

バキッと軽快な音が響く。

「や——り……、やりやがった——！」

翔が叫ぶ。

フィールドに青い腕がドサリと落ちて転がった。

攻撃を受け流しながらの打撃に、敵自らのオーバーシユート時の腕関節が反ったモーメントを加えた破壊力抜群の一撃。あれなら攻撃に移るチャンスが得られなくても反撃できる。

なるほど、パイロットならではの機転の回し方だ。

隻腕のテンプラーが後ろに跳び、距離をとろうとした。

『逃がすかあ！！』

拳を振り抜きながら追いかける桜花。テンプラーが残った左腕を顔前に構え、なんとか防いだ。桜花は先程の報復とばかりに、絶え間なく突きと蹴りのコンビネーションを叩き込む。

左の上段順突き——。と、みせかけて、モーション途中でキャンセル。

「まさか——」

紅の脚が華麗に大きな弧を描く。足の甲が、がら空きだったテンプラーの側頭部を捉え、騎士兜をへし曲げた。

「心配させやがって……」

いつの間にか立ち上がっていた吉野製作所の面々が席に腰を下ろす。

フェイント。桜花は完全復活と共に、青の機体をフィールドに沈めたのだった。

トタン屋根に並んだ水銀灯の下、ドックの一角。緊張した面持ちのアルバスは唾を呑んだ。

興奮冷めやらぬまま、彼は桜花のそれに顔を近づける。先程まで動いていたせいか、湿ってほのかに白く光を放っている。

「へえ、ここってこんな風になっていたのか」

「臭くない？ 汚れやすいから、一応いつも洗ってるんだけど……」

恥ずかしそうに呟いた桜花の向かい側で、彼はそれにつつと指を這わせる。

「大丈夫。綺麗だし、俺はこの匂い好きだよ」

「良かった。——じゃあ、その太いのをそこに入れて」

「こうか？」

桜花に手を添えてもらいながら、慣れない手つきで挿入していく。二人の額には汗が浮かんでいた。

「オッケー。私はこっち押さえてるから、ピストンしてくれる？」

「分かった」

アルバスが全身を使って体重をかけながら、勢いよく動かし始めた。潤滑油のお陰で抵抗はほとんどない。ジャコン、ジャコンと爽快な音を立てる。

「待った！ もっと優しく動かしてくれないと、壊れちゃうよ……」

「ごめん——」

「……何やってんだ、お前ら？」

作業をしながらも一連の様子を聞いていた翔が、耐え切れずに声をかけた。二人はピストンを止め、息をそろえて返事をする。

「アブソーバのシリンダーのメンテ……！」

決勝6日目。昨日は不調だった桜花が復活を果たし、その後結局勝っても負けても行われる飲み会で一日が終わった。今は決勝最終戦が始まるまでの空いた時間で桜花のメンテナンスをしている。

「そろそろ時間ですよー」

ドックに咲耶が顔を出した。脇にお弁当らしき籠を持っている。彼女が来るときには、いつも隣にいたはずのシャルの姿が無い。荷物持ちの仕事を放って何をしているのかとため息をついたが、そういえば今日は朝から彼女を見ていない。

「咲耶さん、シャル知りませんか？」

さりげなく籠を引き受けながら話しかける。

「午後には帰るから、心配しないでくれとは言っていましたけど……。アルバスさんには何も話して行かなかったんですか？」

「愛想を尽かされたか？」

「初めから愛想を向けられたことなんてありませんよ」

神代がからかってくるのを苦笑いで返す。

何かあったのだろうか。シャルなら大丈夫だろうが、相談して貰えなかったことを寂しく思い、胸の内が苦しくなった。

『これより決勝リーグ第6回戦を開始します』

最終戦、桜花の再戦がかかった大切な試合のコールが始まる。

『東より入場したのは、トヨクTETRAM株式会社の東風。力でねじ伏せ、この試合で優勝を決めるのか。パイロットは山田太』

郎です』

大きな歓声と共にフィールドに姿を現す黄金の機体。危なさを微塵も見せない、堂々たる振る舞いで歩みを進める。先の桜花との試合で、さらに不動の王者といった印象を強めることになった。

『続いて西より入場しましたのは、八木製鋼所の八木ソーバ。リーグ表に白丸をつけられるかどうかの一戦。司会の私としては、ダークホースとなることを期待します。パイロットは——えっ？』

入場口から黒い機体が足を見せる。1日目は居眠りで見逃し、4日目は桜花に付き合っていた為、この目で八木ソーバを見るのは今日が初めてだ。規定ぎりぎりの大きな胴体を、エールクラッセのようなごつい油圧シリンダで支えた重量級。全てにおいて上の性能をもつ東風と戦うには、リーチの長い腕部を活かせるかが鍵になってくるだろう。

「違う……」

ふと隣で桜花が呟いた。

「どうした？」

「あれに乗ってるのは、健三郎じゃない——」

桜花と同じように、機体が中央に歩いていく様を見つめる。……よくよく考えてみれば、健三郎とやらの試合を見ていないのだから分かりようがない。

「そんなことが分かるのか？」

「一度手合わせすれば、それくらい分かる——なんて格好いいことを言いたいところだけど、あの動きを見ればパイロットなら誰でも分かるわ。あれに乗ってるのはパイロットじゃない」

「なんだって?!」

「素人でしょうね。歩くっていう一動作をとったって、いちいち動きに無駄が多いもの」

「八木製鋼所は試合を捨てたってことか。——桜花？」

桜花が背もたれに寄りかかって天を仰ぐ。

「悔しいよ。私はほんの一握りの希望を求めてやって来たのに、神様はそれすら消してしまおうとするんだ……」

こればかりは自分達の力でどうにもならないだけに、とてもやるせない。かける言葉が見つからずに俯いた。

『——失礼しました。八木ソーバのパイロットは、山田太郎です。たいへん珍しいことに、同姓同名のパイロット同士の試合となりました』

観客がどよめく。桜花の言ったとおり、パイロットが代わったらしい。

「本当に珍しいな。日本ではその名前が多いのか？」

前の席で苦笑いをしている俊男に話しかけた。

「ま、偽名としてメジャーな名前だが、多くはないわな」

「偽名……」

『構えて——』

ようやく静かになった会場の中央にて、両者が入身になって構える。私はどういう訳か、黒い機体の方に目を奪われていた。

あの両拳を少し高めにした構え方。イフクやフロストランドで見守ってきた小柄な背中、金髪の少女の姿が重なる。

「いや、そんなはずはないよな……」

いくらでたらめな彼女でも、他所のTETRAMに乗っていることなどあり得ない。頭を振って、浮かぶ影を追いやった。

ゴングが鳴る。

桜花と東風の戦いの再現のように、速攻で間合いをつめて正拳を繰り出す両者。拳と拳が激しく鋼を打ち鳴らす。

「へえ。八木の奴、ウチの桜花ほどじゃねえが、結構やるじゃねえか」

交戦中の2体を見て、神代が口を開いた。他所を褒める時でも親馬鹿っぷりを忘れない。桜花はというと、驚いた顔で両者を眺めていた。

「どっちのパイロットもどうかしてる。あんな動き出来るはずがない……」

「どういうことだ？」

「操縦にどうしてもタイムラグがでる分、相手の攻撃を受ける時のTEAMの動きはワントン遅れるの。けど、あの2体はまるで人間同士の試合みたいに戦っていて、それが感じられない——」

続いて出された言葉で、私は再び不安にさせられた。

「あんなこと、パイロットの反応時間が人間離れして速くでもない限り不可能よ」

黄金の機体、東風のパイロットは戦いの最中、口元を歪めて笑っていた。

「そうか。あの名前、この構え、この動き、合点がいったぜ。人間にしちゃあ出来すぎると思っていただけ、あんたが乗っているんなら当然だよな！」

モニタに映った漆黒の機体が、上段へ突きを放ってくる。圧縮空気を肘から撃ち出した、弾丸の如き一撃。

——桜花の戸惑いの答えは簡単である。それは、彼女の言ったと

おり『パイロットの反応時間が人間離れして速い』から。

モニタの映像を眼部の高速度カメラで知覚するまで0.06秒。瞬時に行動をBCI入力し、TETRAMのモータの駆動を開始。0.2秒以内で腕部のラバーアクチュエータに加圧し操縦桿から正確な入力を行う。

掌で拳を受け流して、相手の上体をぶれさせた。

間髪いれずに追撃。通常のパイロットなら避けられないタイミングにおいて、大きく上体をねじりアッパーを繰り出す。

「そつだろ、ダアト——ッ!」

装甲の向こうのかつての仲間に、狂気じみた笑みを浮かべて叫びかけた。

再び会えたことが嬉しい。再び目の前にいることがしゃくにさわる。

ゾハルのことなど今はどうでもいい。己の欲望のままに、アドレナリンを撒き散らす。

金色の機体の放ったアッパーカットを、上体を反らして避けた。胸の装甲の塗装が車で擦ったみたいに剥げる。かなり際どかった。ぎりつと奥歯を噛み締めたシャルが座っているのは、八木ソーバの操縦席。

「この、変態色悪趣味機体——！」

間合いを詰めながらジャブ、ワンツーと繋ぎ、ミドルの回し蹴り。スイッチしてからストリートを放つ。BCIは至って順調、生身の時のようにスムーズにコンビネーションを繋ぐ。

しかし東風は冷静に捌きながら後退し、まったく隙を見せない。

桜花の試合を見ている時は全く気がつかなかったが、こうして拳を交えてみて初めて分かった。あれに乗っているのは人間ではない。

「まさか、セフィロト部隊……？」

ゾハルはデウス・エクス・マキナの一件のように、様々なところと裏で繋がっている。優秀な身体能力を持ったパイロットとしてトヨクに派遣されていてもおかしくはない。

それに今更ながら気になったのは、あの名前だ。あれはティファレトが、名前を偽るときに使えと教えてくれたもの。

肯定とでも言わんばかりに、東風が手の平を上に向けて来いというジェスチャーをしている。それで情け容赦する気も失せた。

圧縮空気で加速させたパンチのコンビネーションを次々放っている。

昨日は日越しの飲み会が終わって早々に、八木製鋼所に押し入りに行った。先日のごとで懲りていたようで、スムーズに私がTETRAMに乗ることを約束させることに成功。一晚中訓練を受けて、なんとかBCIで戦えるくらいにはなった。

アルバスは私がこんなことをしていると知ったら怒るだろうか。しかし私だって私なりのやり方で吉野製作所の皆の役に立ちたい。

「む——！」

東風が私の拳が引かれるタイミングに合わせて、次々に軸足を回して代えていくトリッキーな動きで踏み込んでくる。死角から俊敏に放たれた後ろ回し蹴りをわき腹にくらい、よろめいて2、3歩下がった。

さすがにインスタントラーメンみたいなパイロットとは違い、ETRAMのクセも、それに合わせた戦い方も心得ているようだ。

この、観客の誰しもが勝者を確信してしまっている、演劇じみた試合でジョーカーとなるのは、この太い腕一杯に仕込まれた巨大な空気圧シリンダ。八木製鋼所のごつい面々曰く、『握力だけはワシらの工場が一番じゃ！』らしい。頭部や腕部の掴みやすい場所で炸裂させれば、東風のお高い装甲でも握り潰せるだろう。

視界の外から振られたフックを、胴体の動きで予測し左腕の肘先を立てて受ける。そのまま開いた右手を東風の頭に伸ばすが、後ろに下がって避けられた。相手もこの切り札のことに勘付いているようで、執拗に追ってはこない。

「膠着状態になんて付き合ってられるか！」

相手のジャブをサイドステップで大げさかわし、一気に間合いを詰める。

東風は、まさか鈍重な機体が突っ込んでくるとは思っておらず、虚を突かれて反応が遅れたようだ。射程に入った。

今すぐにでも腕を振り抜きたいのを、まだ耐える。相手がようやくストリートを放ってくる。

今だ。短い足で斜めに地面を蹴り、前傾になって跳び込む。金色の拳が顔のすぐ側を、すれすれにかすっていった。センサカ

メラでそう感じるくらいだから、実際当たっているのかもしれない。その腕を肘関節ではさむように押さえつけて、がばっと手を開く。肘から圧縮空気を噴出させ、腕のレールに滑らせて突き出した。交差して軋む腕と腕。東風の頭を捉え、逃れられないように耳（？）のくぼみに長い指をかけて掴む。

「死んでくたばれえ——ッ——！」

拳打の時とは逆に肘から爆発的に空気を取り込み、超高速で手を閉じる。炸裂音を轟かせて、指の隙間から金の装甲が飛び散った。

黒い腕の装甲の間から煙が立ち上る。今の一撃で動力部が焼けてしまったらしく、腕はぴくりとも動かない。

とはいえ、東風は頭部を失って壊れた。力覚フィードバックにも確かな感触が残っている。最後に私が顔でも上げて動けることをアピールすれば勝利が確定する。

わずらわしいヘルメットを外そうとしていたが、嫌な予感に促され顔を上げた。

——王者は、倒れない。

閉じた黒い拳の向こうに、半分こっそり削られて、火花を散らしている頭部が覗く。一つだけになった目がこちらを睨み続けている。仕留めきれいでなかった。手を閉じる刹那に、奴は直感で腰を引いていたのだ。

まずい。機体に無理をさせすぎた。腕だけでなくそこらじゅうが

イかれて、アラートが多重に鳴り響いて不協和音を奏でている。もうろくに動くこともできなければ、勝てる要素もない。

東風が後ろに一步下がる。あちらはセンサカメラが一つ無くなっただけで、依然手足は健在。

「頭を半分削ったんだぞ？ あいつの脳味噌はスツカラカンか？！」

苦々しく悪態をついてみる。

頭蓋骨みたいな装甲の中で、切れたコードから火花が散っている。人間だったら——考えるまでも無い。

「ごめん、桜花。アルバス」

東風がもう一步下がる。どんな攻撃を放つつもりなのか、両手が高く振り上げられた。

息を呑んで、その一撃が振り下ろされるのを待った。

『これはどうしたことでしょう！ 無敵王者東風、まさかの棄権です！！』

「は？」

急遽流れたアナウンスに、会場から戸惑いの声が上がる。私も戸惑いの声を上げる。

東風はそんな周りの様子はお構いなしに、こちらに背を向け格納庫へと歩き去っていった。振り返り様、何かを訴えかけてきたよう

に見えたのは気のせいだろうか。

「なんだったんだ、あいつは——？」

一心に金の機体が消えた先を睨み続ける。

「たった今、競技会本部から通達が来ました。——優勝決定戦の実施が正式に決定です！ カードは東風と桜花！ 競技会初となる優勝決定戦です！！」

口を開けて呆然としている、吉野製作所の面々。ざわめき止まない観客席。唯一、なんだかんだで大金星を挙げたことになってしまった八木製鋼所の面々が、大喜びで機体の足元に駆け寄っていった。

0310：隔絶（後書き）

水洗便器に血の海を見ました。

口から原型を保った正露丸が戻ってきました。

——食いすぎ飲みすぎは良くないです。

姿をくらませたパイロットを探して、木々の生い茂るドックの裏側へ回った。時刻は朝の5時をまわったところ。山の向こうから太陽が昇る。

ふと落とした視線の先、地面に映った木の枝の影に、もっそりしたものが取り付いているのを見つけた。顔を上げる。

「そこにいたのか。試合前に少しは睡眠とっておいた方がいいんじゃないか？」

「……いつぞや聞いたような台詞だね、それ」

TETRAMという頭くらの高さのところで、松の木の幹に寄りかかって枝に足を投げ出して座っていたのは桜花。

「朝日がよく見えるよ。アルバスも一緒にどう？」

「いや、遠慮しておく。あんまり高いところは得意じゃないんだ」

「それは残念」

会話が途切れた。桜花は東を向いたまま固まっている。今までそんな素振りは見せなかった彼女だが、さすがに優勝決定戦を前にして緊張しているのだろう。

「そろそろ——」

「昨日の試合、どう思った？」

私の声を遮って桜花が尋ねてきた。

そこでようやくピンときた。ただの緊張ではない。彼女は先日の人間離れた試合を目の当たりにして、不安になっているのだ。

「激しい戦いだったな。競技会の歴史に残る素晴らしい一戦だったと思う」

「私もそう思うよ。——でも観客のみんなはきつと、今日の試合にあれ以上を期待してる。私なんかあの場に立って、どう立ち回ればいいんだろう。そんなことを考えてたら、居た堪れなくなっちゃってさ」

声を必死に張り上げて、震えを隠そうとする桜花。視線は依然朝日に向いたまま。

「……あ、ごめんね。今日はきっちり戦うよ。さっきのはただの愚痴だから——」

「俺が目本で見た中で、脛に焼きついている光景が5つある。1つは昨日の試合。あとの4つは紅の機体が試合中に魅せてくれた、熾烈ながら華麗な拳技と脚技だ。——観客もきつと桜花の魅力に気づいてる。みんな東風との試合を心待ちにしているはずだよ」

顔を合わせていなくて助かった。私の顔は耳まで真っ赤になっているはずだ。

「……調子いいなあ。4つって、八木ソーバとの試合は見えてないでしょう?」

桜花が、ふふつと口元をゆるめた。おどけて返事をする。

「さて、何のことかな」

彼女が枝の上で立ち上がった。

「誰かさんみたいに、試合を居眠りで寝過ごす訳にはいかないね。仮眠とるよ」

耳が痛い。が、元気になってくれたようで何よりだ。

桜花が枝を蹴って跳んだ。

跳んだ。——跳んだ? ちょっと待て。3 mの高さから自由落下した物体が弾性体から受ける力、は。

試合前に怪我をされたら困る。使命感に突き動かされ、空を仰いでよろよろと落下予測地点まで歩を進める。

「危ない——!」

「どいてえ——!」

叫んだのは同時。コンマ秒の内に桜花のドロップキックが腹部に突き刺さった。

——3 mの高さから自由落下した物体が弾性体に与える力、は、とても痛い。

「あちゃー。ごめん、生きてる？」

「……なんとかな」

べつたりと仰向けに倒れていたが、桜花に手を貸してもらって、もじもじ起き上がった。

「ほんとーにごめんね。体、大丈夫？」

「こつちこそ着地の妨害して悪かった。痛かったけど、案外体の方は何ともないみたいだ」

「アルバスー、桜花の奴は見つかったか？」

ドックの搬入口の方から翔の声が聞こえた。そういえば吉野製作所総出で桜花を探していたのだった。

「ああ。今そつちに行く！」

桜花は黙って後ろをついてくる。その顔はニヤニヤと笑っており、何やら良からぬことを考えついたようだった。

決勝リーグ7日目。優勝決定戦。

八木製鋼所の予想外の活躍により掴んだ、最後のチャンス。

『西より入場したのは、トヨクTETRAM株式会社の東風。背後より迫る影を寄せ付けずに、例年のごとく優勝旗をもぎ取るのか。パイロットは山田太郎です』

金色の王者がフィールドに足を踏み入れる。昨日の今日だが頭部は完全に修復されている。

相も変わらず観客は東風の勝利を信じ、大きな歓声を浴びせる。スケジュール外の試合だというのに会場は満員御礼だ。

『続いて東より入場したのは、復讐に燃える紅き修羅、吉野製作所の桜花。はたまた王者の上を駆け、優勝旗を奪い去るのか。パイロットは吉野桜花です』

シリンダダンパを対称に埋め込んだスマートな脚が、入場口から一步を踏み出す。バッテリーからコクピットまで内蔵した胴体部、大胆に軽量化された装甲からはフレームが覗く。強く握られた紅の拳は、満ち溢れる自信を物語る。そして2つの眼光が微塵も逸らさずに東風を睨みつけていた。

『構えて——』

眼前の金色の機体が半身に構える。

以前拳を交えた時は全く歯が立たなかった、最強のTETRAM。

今回はBCIの調子も戻り、私も桜花も万全の状態だが、それでも力量の差は歴然である。

右足を下げる。両拳を胸の前に構える。

それがどうした。一度は負けた試合、一度は潰えた道、一度は諦めた夢。それでも私はこうして彼の者と向かい合っている。

恐れは無い。馬鹿親父に、母に、翔に、俊男に、シャルちゃんに、そしてアルバスにあらん限りの礼を、恥じない戦いを見せるのみ。

ゴングの音が鳴り響く。

と同時に、一気に間合いを詰めて右拳を突き出す両者。

『桜花、殴り合いは——』

神代の声が聞こえる。あの時はこの声すら聞こえなかった。拳同士がぶつかり激しい金属音を立てる。

この一撃は自戒。あの試合を吹っ切る為に。

モニタには連打を放ってくる東風の姿。1撃目を手刀で落とし、2撃目を前腕で外側に受け流して側方にまわる。

しかし隙が無い。踏み込もうとしたところで、足刀蹴りに牽制され足を止めた。

殴り合えばパワーで劣った桜花が負ける。翻弄できるほど機動力に差はない。この状況を打破できるとすれば、最強の操縦技術、フエイントか。決して出し惜しみできる相手ではない。

拳を突き出すイメージ。トレースして左の上段順突きを放とうと

する桜花。東風がそれに合わせてガードを上げる。

「せいっ！」

操縦桿を荒々しく引き、叩き、動かす。紅の拳が機体間で止まり、ほぼ同時に腰を落として中段逆突きを放つ。

ガキン、と、鋼の音が鳴り響く。力覚フィードバックにも確かに手ごたえがあった。

軋んでいるのは桜花の装甲。紅の拳を覆う黄金の手の平。

「え……」

私はモニタに映っていた光景に目を疑った。完璧なタイミングで入ったフェイント。T E R A Mでは防御不能なはずのそれを東風は防ぎ、カウンターとして桜花の脇腹を突いていたのだ。

計器に目を走らせる。幸い戦闘に支障の出る損傷はない。飛び退き距離をあける。

『フェイント返し——』

神代が無線の向こうでぼつりと呟く。観客席が沸いているようで、ガーガーピーピー雑音が流れている。

そんな馬鹿な?! と普段なら叫んでいるところだが、昨日の試合で嫌というほど理解した。東風のパイロットの反応は異常だ。彼にパイロットとしての常識は通用しない。

足を止めた桜花に対して、東風から攻撃を仕掛けてきた。なんと

か気を取り直して、上段への連打と中段への回し蹴りを受ける。

続いて前蹴り——受ける為に前傾になって前腕の腹を下に向ける。違う——。必死にモニタを睨み四肢を動かしていたが、金の機体の動きに違和感を感じた。

ガードにまわした手を戻そうとするが間に合わない。前蹴りのモーションは途中でキャンセルされる。次にモニタに映っていたのは、カメラのすぐ鼻先まで迫った黄金の拳頭だった。

「くっ?!」

操縦席が揺れる。東風が放ったのは、前蹴りから俊敏な順突きへのフェイント。

フェイントを防いだことを自慢するように、とうとうあちらも使ってきた。思えば今まで幾度もこの技を使ってきたが、使われたのはこれが2度目になる。しかし気になったのは、あの一瞬感じた違和感。

考える時間をくれるつもりは無いらしい。東風が次々と拳打を放ってきた。

——中段突きを流す。

ひよつとするとあの違和感でフェイントを見分けられるかもしれない。

——下段蹴りを脛で受ける。

しかしただの思い違いだとすれば、それ以上に桜花を危険な目に合わせることになる。

「桜花、昨日の今日でごめん。下手するとまた壊しちゃうかも」

——上段順突き。

それでも私は十数年の年季を、私を信じたい。

「うっん、私達ならきつと大丈夫——」

違和感を感じたそれを視界から外し、迷い無く強い一步を踏み出す。

力覚フィードバックから、ミシリと心地よい反応が返ってくる。金色の顔を側方から捉えた正拳突き。対して東風の拳は桜花の肩に逸らされ、空を切っていた。

フェイント返し。東風に、王者に並んだ。

桜花の先攻。上段から中段の連打、回し蹴りのフェイント。東風はそれを見破り上段突きを放ってくる。3発目の突きはフェイント。こちらを読み取り、本命の一撃が振られる前に前蹴りで出鼻を挫いてやる。フェイントとフェイント返しの応酬。

瞬きする時間の余裕も無い。血がたぎったみたいに体が熱い。なにどうしてこんなにも爽やかな気分なのか。自然と笑みがこぼれる。

私の放った上段回し蹴りが、屈んで避けられる。東風が低い姿勢から、黄金の拳を雷撃の如くかち上げてきた。先日止めを刺された一撃だ。

とっさに後ろに跳んだが、東風は瞬時に軌道を修正して頭部に狙いを付けてくる。

「——ッ！」

4日前なら、例え万全の状態だったとしても避けられなかったかもしれない。

朝のアクシデントを思い出す。物凄い勢いで蹴りを入れてしまったにも関わらず、アルバスは無事だった。理由はおそらく、着地に備えて私が膝関節を緩めていたこと。

あれを応用すれば——。

地面を蹴って仰け反っている姿勢のまま膝を上げる。迫る雷撃の行く手を遮るように踵を叩きつけた。

シヨックアブソーバがアッパーの威力を削ぎ、顔に届かせることなく停止させる。

東風のパイロットが大層驚いたようで、拳を引きながら大きな隙を見せた。これを逃す手はない、上体を傾け地面を蹴って追う。

次の瞬間、モニタに金の拳頭が映った。相も変わらずの超反応。間髪いれずに接触、操縦席まで衝撃が伝わる。

全身の神経を研ぎ澄ませる。装甲が削がれていく。浅い。拳が抜ける。

操縦桿を倒す。さらに地面を蹴って間合いを詰めた。

痛んだ計器類の中でも一際真新しい赤色のボタンに人差し指を突き立てる。その瞬間右腕全関節のコントローラが切り替わり、まるでこれから流される大きな力に心奮わせるかのようにピクリと引きつった。

「おしとやかッ——」

四肢に回っていた電力の大半を右腕に注ぎ込む。熱膨張したフレームがギリギリと軋む。

「——パァーンチ！」

紅の拳を振り抜く。その様はまるで紅蓮。何物たりとも軌跡に残すことを認めない煉獄の炎。

ガードに戻している黄金の左腕を弾き散らし、胸部を正面から完全に捉える。貫通。拳は止まらない。背中に空いた大きな穴から、細かい金の装甲や金属片を放射状に吹き飛ばした。

電力配分が戻される。紅の腕が部品をそれ以上散らすこともなく、しなやかに風穴から抜き取られた。

東風の胸に空けられた真円の窓の向こうに、観客席が見える。しかし王者は倒れない。

嘘みたいに静かな世界で、破裂しそうな心臓の音だけが一定のリズムをとる。

喉が渴く。なけなしの唾を掻き集めて呑み込む。

砂埃が立った。

膝をついたのは東風。穴の空いた上体を傾けて、完全に沈黙した。

実感無くハッチを開き、操縦席から体を出す。次の瞬間、肌が震えた。静寂が破られる。

「え——？」

体で感じ取ったのは、声。フィールドを囲う観客席から、地震でも起こしているのかと思うくらい大きな歓声が浴びせられている。

「は、はは……」

思わず苦笑いをこぼした。無線からも、何やら声にならない金切り声が流れている。

「やった——」

急に感情が溢れ、再び体が熱くなる。涙が瞼の奥から、堰が壊れたみたいに込み上げてくる。皆の見える前でみつともない。でも止まらない。

東風の肩に腰掛けた、フルフェイスのヘルメットを付けているパイロットも荒々しく拍手を送ってくれている。

「やったんだ——！」

押し寄せる歓声に応え、自らの拳を振り上げた。

こうして、第25回TETRAM全州競技会の優勝チームは、吉野製作所に決まった。

「それでは桜花の優勝を祝しまして」

乾杯する前から酔っ払っている神代が、ビール瓶を片手に音頭をとる。

「お手を拝借う」

「それじゃあ終わっちゃうって！」

「とつとと始めろー！ 下がれー！」

ブーイングやら野次やらが周りから飛ぶ。ぐだぐだの内に、あちこちからグラスの当たる音が聞こえてきた。

試合後恒例の飲み会。この家でこうして騒ぐのも最後になるのかと思うと、とても感慨深く寂しい。

思えば日本に来てからいろんなことがあった。偶然会場で神代と出会い、吉野製作所に招待され、桜花が壊され、翔に殴られ、直ったと思えばハプニングがあった。そんな充実した滞在の中でも一番嬉しかったのは、やはり桜花の優勝だろう。昨年は棄権でフィードに立つことすらできなかった彼らが、ようやく本来の実力を示す

ことができたのだ。

なんだか視界が霞んでいる。目から心の汗を出してしまったようだ。

「ちょ、ちよつとちよつと、なんで泣いてるのよ?!」

「らいてらい!」

注釈『泣いてない』。首を振って、隣に腰掛けてきた桜花の言葉を必死に否定する。

「それならいいけど……」

彼女にグラスを持たせてビールを注ぐ。酌という習慣にもすっかり慣らされた。

「おめでとう。桜花と吉野製作所なら優勝できるって信じてた」

私も注いでもらい、同時に口を付ける。

「ありがとう。その吉野製作所の面子の中にはアルバスとシャルちゃんも入っているんだからね」

「――遊園地で何でも聞くんて約束してたよな。明日帰国するつもりだから、今日のうちに決めて貰えると助かる」

万が一優勝したら、なんでも言うことを聞くという約束。『なんでも』なんて偉そうなことを言ったところで、家電の修理以外にできることなんて、せいぜい便所掃除くらいしか思いつかないのだが。桜花は渋い顔をして、指で髪の毛をくるくると巻き取っている。

「うう……。決まっていることは決まっているんだけど、まだ心の準備が——って、明日帰るの?！」

「競技会も終わったし、皆が出るのと合わせようかな、と」

桜花達は明日ベースを明け払って吉野製作所に戻るそうなので、それに合わせて帰国するつもりだった。

空になった桜花のグラスにビールを注ぐ。

「ならウチに来ればいいじゃない。TETRAMのパーツもたくさんあるし、きっとアルバスなら楽しめると思うよ」

「そ、それは魅力的な提案だけど……」

競技会が1日長引いたのは予想外で、延長した滞在期間は無理を言って職場を休ませて貰っている。既にゾハル探して有給を使い切っており、いい加減帰らないとクビが危ない。これ以上シャルに自分の趣味につき合ってもらうのも気が引ける。

「なんなら、ずっといてくれても——」

「うぶ……」

桜花の言葉に被せるようにして、胃からアルコールが込み上げてきた。まだグラス一杯程度しか飲んでいないというのに、我ながら情けなくなる下戸っぷりだ。

「ちょ、大丈夫?」

桜花が背中をさすろうと体を寄せてくる。心ときめいている場合

ではなく、それはまずい。

「悪い、ちよつと夜風に当たってくる」

——今さすられたら、出る。一緒にとる最後の晚餐でマールライオンする訳にはいかない。よろよろと居間から逃げ出した。

桜花は未練でも残したかように、彼の閉めた襖を見つめていた。残された時間は少ない。早いところ覚悟を決めなければ。

「おー、桜花あ、こつち来て酌しろー」

性質の悪い酔っ払いの声が聞こえる。今日くらいは親孝行するの
も悪くない。ヤレヤレとため息をつきながら立ち上がった。
誰にともなく呟く。

「製作所の一員になって欲しいなんて、ずっと一緒にいてほしいな
んで、面と向かってお願いできる訳ないじゃない……」

ほのかに木の香りが漂う軒下を歩く。今宵は満月、酔いが醒める

まで向き合う相手としては申し分ない。

特等席には既に先客がいた。小柄な少女が縁側に座って足をブラブラさせている。

「こんなところで何してるんだ？」

近寄りながら声をかける。シャルは酔っ払いの姿を捉えて鼻で笑うと、そのまま愛想無く視線を庭に戻した。

「お前こそ、抜け出す暇なんてないくらい、積もる話もあるだろ」

「俺は酔い覚ました」

側方から歩き寄る。

「相変わらず弱いな、あたしは何リットルでもいけるぞ」

「お前の自慢は、正直リアクションに困る。隣いいか？」

廊下を無造作に這った長い金髪を跨ぎ、無言で頷いた彼女の隣に腰掛けた。

「……明日帰ろう。無計画な旅で、すまなかった」

「もうその一件は済んだ」

シャルは一言だけ発して口を閉じる。

「日本に滞在して、どうだった？」

「悪くはなかった」

会話が续かずに黙ってしまふ2人。微かに聞こえてくる宴会の声が、余計に不自然さを際立たせる。

いつもと違うシャルの様子。隔意、排除、拒絶。ベクトルが負に向かう不機嫌とも違う、絶対値がゼロの態度。隣に座っているにも関わらず、彼女との間に冷たい隔たりを感じた。

シャルの重い口が開く。耳をふさぎたくなる衝動を覚える。

「——吉野製作所にいる時のお前は、いつもより役に立ってて、いつもより楽しそうで、あたしなんかといるときよりよっぽど輝いてた」

「なんだよ、急に……」

ひきつった笑みで応対する。彼女にその先を言わせてはならない。抑えていた願望がちらつくから。

「それは——」

「あたしのいるべき場所がゾハルであるように、お前のいるべき場所はココだと思う」

思わず息を呑む。ごくりと、周りに聞こえるんじゃないかというくらい大きな音を立てた。

確かに吉野製作所の一員として滞在していた間、好きなことに没頭できて満ち足りていたし、自分の能力を存分に発揮できる環境に

心躍った。彼らさえ許してくれるのなら、このままここに残るのもやぶさかでない。

シャルと別れてここに残る選択肢も考えた。しかし、人様の家で充電しながら居眠りしているような少女を放っておけない。心残りがあると自分に言い聞かせて塗りつぶしたはずだった。

「いや、俺はお前がゾハルに帰るまで――」

「気づいたんだ」

シャルの強い口調に押され、言葉を切った。

「あたしはお前を、あの男と重ねて頼り切っていた。ここでサヨナラしよう、アルバス」

— 3 months ago —

太平洋上空に浮かぶトカマク型核融合炉、ゾハルの本部。私がいるのは、そのドーナツ型建築物の上部に取り付けられているデッキである。酸素が薄いため一般人は浮上中に出ることを禁止されており、こうしてセフィロト部隊の絶好の溜まり場となっている。

その日は、ギルグルになってからずっと面倒を見てくれたティファレット、そして任務のパートナーになることが多かったケセトと共にのんびりと蒼海を眺めていた。

脈絡無く、突然ティファレットが歌い出す。セフィロト部隊唯一の士官で、戦闘の際にはとても頼りになるお姉さんなのだが、普段はふわふわしていて何を考えているのかよく分からない。

二つの頭を持った竜がいた
太陽に向く悲しげな顔
月に向く不機嫌な顔
ぎこちない様子で湿った道を行く

二つの頭を持った竜がいた
互いが持つ譲れないこと
頭同士でケンカした
喉を噛み合い黒い血を垂らした

「変な唄……」

いつもと変わらない感想を述べる。
しかしこの生活が始まってポップスだのを聴く機会が少なくなっ
たせいか、気づけば彼女の唄を口ずさんでいることが多い。まあ、
それを人は、毒されたと言う。

「少尉の言語能力を考慮すれば、妥当かと」

ケセトがぼつりと呟く。会話に参加したくないオーラを漂わせて
おいて、こういう時だけ言いたいことを言う。言葉という記号に擬
態させた毒を吐く。

「あー、2人してひどいー」

頬を膨らませるティファレト。

「いやあね、シャル達の道しるべになればいいかなー、って思っ

「2つの頭とは私達のことですか？ 確かにあまり仲はよくはないですが……」

「ライラが少しは滑らかな人当たりをしてくれれば、それなりの付き合いをするのもやぶさかではない」

「奇遇ですね。私もあなたが少しは素直になってくれれば、面倒を見てやらなくもないですよ」

「こらこら、あなた達も仲よくやってよ」

私とケセトがいがみ合い、脱力したティファレトが遠巻きに見守るいつもの光景。

かつて世界を襲った大恐慌により、多くの国は大国の傘下となった。経済が安定してきたとはいえ、以前のように分離することは容易ではなく、痺れを切らした各州がテロじみた行為を繰り返すなど危険な状態が続いている。

ここ数十年の科学技術の発展は著しく、軍事への転用が危惧されている。そういった危険を未然に防ぐ為、国家に属さない組織が必要とされ、その結果設立されたのがゾハルである。サイボーグから編成されるセフィロト部隊と、優秀な軍人から編成される特殊作戦部隊からなり、国連軍の一部ながらほぼ独立した作戦指揮の下で行動している。

『セフィロト部隊、ダートは至急第1会議室へ出頭するように。繰

り返す——セフィロト部隊、ダートは至急第1会議室へ出頭するよ
うに」

廊下から放送の声が漏れてきた。

「あたし、か？」

「単独で御指名とは穏やかではありませんね。今度は何をやらかしたのですか？」

ケセトが、じと目を向けてくる。私だけ呼ばれるというのは初めてのことだが、しかしこれだけは言わせて欲しい。

「その、いつもポカしてるみたいな言い方を止める！」

2人のからかいの声を背中に受けてデッキを後にする。建物内に入ったところで、白髪初老の男性と会った。

「そこにいたか。——指示は聞こえたな？」

「は、はい！」

急いで背筋を伸ばして返事をする。

「俺もまだ内容は把握していないんだが、何かやらかしたか？」

「少佐までからかわないで下さい！」

アーテル少佐。直属の上司であり、ゾハルきつての技術士である。単なる兵器として接する他の上官と違い、暖かい眼差しを向けてくれる彼に、私は憧れを抱いていた。それに自惚れかも知れないが、私に対する接し方が他のセフィロト部隊員に対するものと違う気がして、どこか特別な意識を持っていた。

「……どうも嫌な予感がするな」

アーテルが白く短いアゴヒゲを撫でながら呟く。

予感の内容を聞くことなく、第1会議室の前に到着した。

大扉を開いたところで、あまりの重い空気に気後れした。滅多に顔を合わせない2人の技術士に、その他顔は知らないがゾハルのお偉い方々諸々。とてもイタズラをお咎めるような雰囲気ではない。アーテルと別れ、コの字型に配置された机の中央に足を進めた。別の入り口から入ってきた司令が正面の席につき、協議が開始される。一連の流れの説明後、誰に対してなされているのか、淡々とセフィロト部隊についての解説が始まった。

「——という経緯で、ゾハルに生命の樹を冠した10体のギルグルが配備されました」

ティファレトから聞いた話とまったく同じであった。ケテル、コクマー、ビナー、ケセト、ゲブラー、ティファレト、ネツアク、ホド、イエソド、マルクトのコードネームを持つ10体のギルグル。しかし私に与えられたコードネームはダウト、本来存在しない11番目のセフィラの名である。どういう訳か、そのことを尋ねてもティファレトは悲しそうな顔をするだけで教えてくれなかった。

「欠けたナンバーを補完することでセフィロト部隊は機能していたものの、ルーファス中尉が自己顕示欲を示すため独断でギルグルを製造したことにより、ナンバー外の11体目が完成してしまいました。それがダアトになります」

アーテル、ルーファス、レウム。3人ともセフィロト部隊の指揮をとっている士官であり、技師である。

名前を呼ばれた長身の男、ルーファスは口をへの字にして居心地が悪そうにしていた。

つまり私は正規のルートでない改造のされ方をしたらしい。目を覚ました時真つ先に謝ってきたティファレトの言葉が蘇る。

「そこまでいい。——理解できたか、ダアト？」

正面に座っている、カールした髭を生やした黒髪の中年男性、司令が口を開いた。

「ハッ！」

先程の説明は私に対するものだったらしい。しかし何故今になって伝えられたのだろうか。

「つい先程国連総会で、条項外の戦力を速やかに廃棄するように指示が下った。セフィロト部隊、ダアト、お前を廃棄する」

ざわめき立つ会議室。思考が停止する。

廃棄。セフィロト部隊としてのお払い箱。サイボーグとしてのお払い箱。

突然のことで、どう感情を表現したらいいのか分からない。議長が参加者達に自制を促し、協議は続く。

「解体は明朝行つ。独房で待機するように」

頭が真つ白になっている内に、協議は終了していた。次々に参加者達が部屋から出て行く。

「大丈夫か？ 立てるか？」

声をかけてきたのはアーテルだった。立ち上がろうとしたが、貧血気味になっていたようでよろめく。彼はそんな私の肩をそつと支えてくれた。

「あんなことがあつたんだ、仕方が無い。しばらく休もうか」

「いえ、あたしなら大丈夫です」

彼にこれ以上余計な迷惑をかけたくない。体を離して背を向けた。

「シャル……。此度こそは、お前を――」

アーテルの声を背に受け、会議室を後にする。今は優しい言葉が、頼りきりたくなりそうで怖かった。

信用しているということなのか、逃げられないと暗に伝えようとしているのか、廊下には誰もいなかった。自分の足で独房へと、最後の晩を迎えることになる場所へと向かう。

独房は鉄筋コンクリートに金属板が打ち付けられた頑強な構造。廊下側に並ぶ、通常より太い格子からはギルグルといえども抜け出すことはできない。

窓が無いせいで時間の感覚を失う。私は硬いベッドに腰掛けて考え事をしていた。

人は何故生きるのか。

生物の生きる目的は生殖の為だと聞いた。一生の内3000分の1しかない輝ける時を、ひたすら鳴き続ける蝉。体をボロボロにして川を上る鮭には頭が下がる。だがしかし、人間はそれには当てはまらない気がする。

ある哲学者は幸せを求める為だと言った。なるほど、人の活動は種々あれど、いずれも何らかの形で自身の飢えを満たすためのもの。ならば私達はどうして生きるのだろう。かつての居場所を失い、兵器として生きる毎日。幸せを求める権利すらない私達に、生きる理由などあるのだろうか。

考えるのは止めた。どうせ明日には、今度こそ土に還る。ベッドに横になって目を閉じた。

通路で反響して聞こえてくる歌声で、まどろみから目を覚ました。

Tom went to the mountain to
gather firewood,

このベクトルが明後日に向かった歌詞は間違いない、彼女のものだ。

Bob went to the river to wash
his clothes——

微妙に歌詞の続きが気になるが、カツカツと音を立ててこちらに近づいてくる2人に話しかける。

「なんの用だ、ティファレト。アーテル」

暗がりの中に浮かんでは、金の長髪の女と、白髪の老人。女の肩には、身長より大きな黒い物体が担がれている。

「——危ないから動かないでね」

ティファレトは質問に答えずに、黒い布を音を立てて勢いよく取り去った。

「アイン・ソフ——」

それが彼女の武器の名前。

ドーナツを積み重ねたような形状の筒を中心に、どちらが銃口か分からない同じ箱型の装置が取り付けられた銃身。桁違いな電力量を示す同軸ケーブルが2本、ティファレトの背中に繋がられている。それは超重兵器とでも銘打てばいいのだろうか、ガルガリンよりもさらに一回り大きい。

ティファレトは勇ましく旋回させてから再び肩に担ぎ、砲身軸上の小さな穴を牢に向けた。

紫色の光が放たれる。ファンの音が独房内に響くが、光線自体は無音。反動も無い。それが破壊力を錯覚させる。

瞬時に鋼の格子が赤熱して焼き切られた。あっという間に格子の上下が切断され、1人通るのに十分な隙間が空けられる。

FEL（自由電子レーザー）を用いた指向性エネルギー兵器。高周波線形加速器、RFリニアックにより荷電粒子の運動エネルギーを高め、ビームをアイン・ソフ中央部のヘリカルウィグラに通すことでコヒーレントな電磁波に変換する。人体に照射すれば物質を蒸散、剥離、分子結合を解離させ、プラズマ発生に伴う衝撃波により体組織を破碎することができる。

CO₂やルビー等媒体により波長が決まり、キャビティにより出力が制限される通常の工業用レーザーとは異なり、それらがある程度自由に変えられるFELは、その規模の大きさと莫大な電力消費がネックとはいえ、遠方の物体を秒速30万キロメートルで破壊する強力な兵器となる。

「さあ、逃げるわよ」

アイン・ソフの銃口を下げ、ティファレットが手を差し出してきた。こんな私を助けに来てくれたのだ、嬉しくないはずがない。しかし逃げてどうする？ 外に逃げたところで、今まで何体かのギルグルがそうだったように、他のセフィロト部隊に追われることになる。異物が大部分を占めているこの体だって、調整しなければ数日で動かなくなる。あまりに無謀。

だいたい、今更地上に戻って何ができる？ シャルロットは2年前に殉職している。唯一の居場所だったここを出て、行く場所なんてあるはずもない。

——無理だ。そんな賭けをする気力は残っていない。

「もう、あたしに構わないでくれ。とつくに死んでいたはずの体だ、覚悟は2年前に済んでる」

ティファレトと初めて会った日に交わした、握手のことを思い出す。あれから彼女のおおらかさにどれだけ助けられたか。もうこの手をとることはできない。拳をきつく握り締める。

「シャル……」

アーテルの悲しそうな顔には、いつにも増してシワが増えている。なんとかして感謝の気持ちを示そうと気張っていたが、結局彼には最後まで迷惑をかけっぱなしだった。

2人の姿を目に焼きつけ、背中を向ける。

「――2人とも、来てくれてありがとう。牢のことは適当に言い訳しておくから、騒ぎにならないうちに戻って」

と、背中に温かい感触を感じた。金属音を立てて、アイン・ソフが地面を転がる。

「馬鹿っ！ 一度死んでいようが、サイボーグになっていようが構わないじゃない」

私の背中から手を回しているのはティファレト。

「あなたの心はここにある。こうしてあなたは生きている。だったらされるがまま理不尽に負けるなんてことしないでよ！」

「ごめん、あたしは弱いんだ」

彼女の体を突き放す。心、か。生身の心臓は無いはずなのに、胸の奥が痛い。

「――すまないな、シャル」

アーテルが近づいてきたと思った次の瞬間、全身に激しい衝撃が走った。薄れていく意識の中、腹部に突き立てられた電極を見る。

「ゾハルのことは忘れて、穏やかに生きてくれ」

「気づいた時には、モーターボートごと海岸に打ち上げられていた。あとはお前も知っての通りだ。充電のために入った家でお前に会った」

シャルは話を終えた後、余韻をもたせることもなく、すぐにまた口を開いた。

「分かっただろ？ あたしは2人に文句を言っただけで、自己中心にゾハルに戻りたがっているだけなんだ」

話の最中もこちらに向けてくれなかった、彼女の顔を横から眺める。シャルが今まで私に見せていたあの顔は、きっと私を通してアーテルに向けられていたもの。

「――出会った時からずっと引っかかっていたんだが、お前はアー

テルに雰囲気がそっくりなんだ」

会ったことの無い人間に似ていると言われても、返答に困る。適当に相槌を打つ。

「もう一度言う。吉野製作所がお前の居場所だと思う。あたしは1人でもなんとかなる。だからお前はここに残れ。きっと桜花達も歓迎してくれる」

彼女は心の底からゾハルに戻ることを望んでいる。本人の言うとおり親友や上司に会いたいからなのか、ゾハルという組織とけりをつけるつもりだからなのかは知らない。しがない修理工が入り込む余地は無く、できるのはせいぜい行く道をほんの少し均す程度。私がいなくても、彼女の言うとおり『なんとかなる』のだろう。

シャルと出会ってから3ヶ月。なぜ支えてあげたいと願ったのだっただか。

「……分かった」

首を縦に振った。その瞬間、技師とサイボーグの妙な関係も終わりを告げる。

「世話になつたな」

「こちらこそ、いろんな経験をさせてもらえて——」

仕事でする程度の、形式ばかりの挨拶を交わした。話した内容はあまり覚えていない。

シャルはその満月の夜のうちに家を出て、私の前から姿を消した。

本日は快晴。朝から清々しく雀が鳴いている。しかし私はそんな中、もやもやした気分で廊下を歩いていた。縁側には当然ながら、あの金髪の少女の姿はない。

シャルは空港に着いただろうか。朝まで待つて、吉野製作所の車で退去がてら送ってもらえばよかったのに。いや、もう私が口出しすることではない。

居間を目指していたが、玄関の前で足を止めた。どうも外が騒がしい。すりガラスの向こうに黒い影が連なっている。

「おはよ。お客さん？」

応対すべきか迷っていると、桜花が居間の方向からやって来た。夜通し飲んでいたようで、眠そうにあくびをしている。二日酔いの素振りも見せないのは、父娘揃ってさすがだ。

「おはよう。分からない。そこで立ち話してるみたいだ」

肩をすくめて返事をする。彼女もすりガラスを眺めていたが、こちらを向いて同じように肩をすくめた。

「放っておいて、朝食に行こうか——」

桜花の誘いを受け体をひねる。と、呼び鈴が鳴ることもなく突然扉が開けられた。玄関の前に並んでいるのは、がたいのいい、おっかない面の男達が7人。記憶が正しければ八木製鋼所の男衆である。カチコミにでも来たのだろうか。私は桜花とともに、慌てて身構えた。

「姉さんのスカウトに来ました!!」

先頭の男が背筋を伸ばして声を張り上げる。

「は？」

呼応したのは同時。おそらく末代までからかわられるくらい、抜けた面をしていたと思う。

「姉さんのスカウトに来ました!!」

負けじと先程の男が声を張り上げる。ようやく相手方に敵意が無いことを悟った。彷徨っていた拳を下ろす。

「姉さん？ 桜花のことか？」

競技会で優勝した逸材である。欲しがる企業は多いのではないだろうか。まあ八木製鋼所が申し出てきたのは意外だったが。

「私？ ハリウッド女優並の扱いなら考えてあげなくもないですけど……」

おほほほ、と音響効果を入れたくなる、高潔っぽい振る舞いを見せる桜花。しかし男は、迷惑そうな表情で首を振り、予想外の人物

の名前を口にした。

「いえ、シャル姉さんです」

「へ、シャルちゃん？　なんで八木さんの製鋼所さんがシャルちゃんを欲しがるの？」

「そんなの決まってます。たった一晚の訓練でトヨクのTETRAMに勝っちゃった、とんでもないお人ですよ？！」

トヨクのTETRAMは東風。東風に勝ったのは八木ソーバと桜花。桜花に乗っていたのは桜花だから……。一昔前のレジスターみたいに音を立てそうな勢いで、思考を整理していく。

ガシャーンと結論。八木ソーバに乗っていたのはシャルということになる。

脳裏に蘇るのは、一昨日の試合。必死に考えないようにしていた、黒い機体に重なる少女の姿。

「あいつ、やっぱり——」

夜中のドンパチといい、どうしてあいつは人から見えないところで気張るのか。

「え？　どういうこと？　シャルちゃんはどこ？」

シャルの靴が玄関に無いことに気づいた桜花が詰め寄ってくる。

「多分空港に向かってる」

「なんで?!　さっぱり分からないよ！」

私だって分からない。彼女を送り出した理由が分からない。
そんな口の足りない、融通の利かない奴だから一緒にいたいと願
ったのではなかったのか。

私では彼女の事情に踏み入ることができない？　それがどうした。
私の立ち位置だからこそできることがある。彼女はそれを必要とし
ていたし、私もそれに満足していた。

上司の姿を重ねられていた？　それがどうした。雰囲気似てい
た？　知ったことが。そいつの上から私の姿を重ねてやる。あの顔
を私に向けさせてやる。

ここには3ヶ月前よりもさらに強くなった、彼女を支えてあげた
いと願う気持ちがある。

「すまん、俺行くよ」

「え？　ちよつと？！」

靴をつっかけて、八木製鋼所の男達を掻き分けて外に飛び出した。
桜花があたふたしながら追いかけてくる。

吉野製作所の皆にはきちんとした形で挨拶をしたかったが、仕方
が無い。

「もしかしたらこのままアメリカに帰るかもしれない。――ありが
と、感謝しきれないほど世話になった。こんな去り方でごめん！」

「へ？　え？　シャルちゃんを追うの？」

「ああ」

財布の中を確認する。空港までタクシーを走らせるくらい金は残っている。飛行機のチケットは、まあ後で何とかなるだろう。

「足はあるの？」

「いや、途中でタクシーでも拾う」

桜花は口を一字に結んでこちらを見ていたが、親指を立てて首を切る動作をした。いや、訂正。立てた親指を山の方に向けた。

「……山越え、谷越え、吉野タクシーなら今すぐにでも出せるけど、どうする？」

何かが吹っ切れたような、穏やかで爽やかな表情。

「酔い止めは必須だけどね」

木々に囲まれた山道を一人下っていく。朝早いせいか、もともと過疎している道なのか、前からも後ろからも車は来ない。

緑に囲まれ、空気も美味しく気持ちがいい。こんな道をドライブできたら、さぞ爽快だと思う。

アルバスは吉野製作所で雇ってもらえただろうか。腕は確かなのだから、もっと野心を持てばいいのに。いや、もう私が口出しする

ことではない。

始発までにバス停まで辿り着く予定だったが、まだ行程の3分の2程度しか歩いていない。あまり脚部のアクチュエータの調子が芳しくないようだ。

貸切状態だった道路の向こう、道の中央に人影を見た。早朝からランニングだろうか。ご苦労なことだ。

近づいていくにつれて、男の姿格好が明らかになる。金の短髪をつんつんに立てた青年。あちらは足を止めている。

「——見つけたぜ、ダアト」

5 mほどの距離まで近づいた時、男が口を開いた。平和ボケしていた脳味噌に、ようやく血が巡る。

灰色の制服。左腕には細長い六角形、生命の樹の部隊章。

「セフィロト部隊——」

「ああ、そうだ。てめえを潰しに来た」

男が口元を緩めて答えた。身じろぎせず直立しているくせに、妙に威圧感を感じる。すぐに駆け出せるように上体を前に傾けた。

「見たことの無い顔だな。新人か？」

「そういうことになるな、先輩。コードネーム、マルクトだ」

私がゾハルにいた頃のマルクトは、短気なおじさんだった。彼は

死んだのか。ちよくちよく入れ替わる部隊だ、驚いたり感慨にふけることではない。

それよりも気になるのは、彼が一昨日試合で一戦交えたパイロットなのかどうか、だ。もしそうなら気は進まないが、わざと負けてくれた礼を言っておきたい。

「東風を操縦していたのはお前か？」

「豆腐？ 何の話だ？」

「TETRAMの競技会で準優勝した東風だ！」

マルクトは返事の代わりに顔をしかめている。とぼけているのではなく、本当に彼ではないらしい。どういうことだろう？ 日本にセフィロト部隊員が2体も来ていたというのか。

「意味分かんね。お前まじうぜえよ……」

マルクトが動く。足を地面にすらせて横に開き、ゆらりと上体の力を抜く。腰に結わいつけられていた、同方向を向いた柄を掴み、大刀と小太刀をそれぞれの手で抜き取る。

背中に固定された鞘は、鮫皮を漆で固めた頑丈なもの。柄は小さい柄頭から、菱形の穴が並ぶようにして黒糸が巻かれており、刃との付け根には黄金色で四角い鍔がはめられている。清楚な趣と刃文の吸い込まれるような美しさから、美術品としても名高い日本刀。

2本の柄からは電力を供給するための同軸ケーブルが垂れ、上着の裾の下を通って背中に繋がれている。ただ斬って突き刺すだけの武器ではなさそうだ。

あいにくガルガリンはアルバスの家から持ってきていない。徒手空拳で戦うべく両拳を構えた。

マルクトは逆手に持った小太刀を肩の前で横に、順手に持った大刀を腰の前で刃を下に向けて構えている。切っ先は微塵もずれておらず、実力の高さをうかがわせる

あのバリバリ近接武器のケテブ・メレリでも、柄にサーマルガンが組み込まれていた。相手から離れているからとはいえ安心は出来ない。

マルクトが前の足をアスファルトに擦らせる。来ると思い身構えたが、彼はぴくりと眉を動かして静止した。

遠方から音がする。周期的な機械音。ガシャン――、ガシャン――。徐々に近づいてくる。

「ちっ、なんだこの音は……」

マルクトが苛立たしげに音のする方向を睨む。対して私には心当たりがあった。ショックアブソーバが衝撃を和らげている音。装甲やフレームが軋む音。

跳躍に備えた深い踏み込みが、山林を、地面を、揺らす。

細身のTETRAMが木々を跳び越える。見覚えのある紅の機体が私とマルクトの間に降り立った。

「桜花――?!」

どうして彼女の機体がここに？ 片膝をついたTETRAMに声を張り上げて問いた。

紅の顔が頷き肯定する。大切そうに胸の前で握られていた拳が開かれ、そこから寝癖頭の男がアスファルトに降り立つ。

「アルバスまで……」

技師はなにやら青い顔をして、口を押さえている。何かを嚥下して、やつのことで喋り始めた。

「あれはギルグルか？　よくもまあ見事に、次々に厄介事を抱え込むな、お前は」

「なんで、どうしてお前らがここにいる？」

もう会うことは無いと踏ん切りをつけておいたのに、どうして昨日の今日で再び顔を合わせる事になっているのか。

「それから、よくもまあ見事に秘密事を抱え込んでくれるな、お前は。八木製鋼所の連中に東風戦のことを聞いた」

「そう、か……」

それが再会の理由。私はパイロット間の真剣勝負にでしゃばり、干渉してしまった。一当事者であり、一愛好家である彼が憤慨するのも当然だ。

浮かぶ感情は、寂しさ。虚しさ。私は追いかけてきた彼に、何の期待を抱いていたのだろう。

「——ええと、その、なんだ。ありがとう」

「え……」

想定していたのと正反対の言葉に、思わず拍子抜けする。アルバスは視線を逸らして寝癖頭を掻いている。

「お前も吉野製作所のこと一生懸命考えてくれていたんだよな。まあ、やり方は非常識だなんて思っけどさ」

「それを言う為だけに、わざわざTETRAMを走らせてくる奴とどっちが非常識だ」

「違うない。……他にも話はあるんだが、まずはこの状況をなんとかしなくちゃならないだろ？」

顎で指された先では、心なしか先程より眉間にしわを寄せたマルクトと、桜花が睨み合っている。3倍近くの身長差にも関わらず、男に全く動じた様子はない。

「失せろ、オンボロ」

「オンボロゆーな！ アンドロイドだかサイボーグだか知らないけど、競技会優勝者の吉野桜花が相手よ！」

頭部につけられているスピーカーで桜花が言い返す。

「相手？ このポンコツが？ はっ、ロボ。ンの方がまだマシな見て呉れのもん作るぜ。くそ笑えねえ」

「おーおー、言ってくれるじゃない。でも目本人あんまり打たれ強くないから、オブラートに包んでくれると嬉しいな」

マルクトがチキリと刀を鳴らし、体の横で刃を水平にして構える。どう見ても有利なのは桜花だが、自信に満ち溢れた男の顔を見て嫌な予感がした。2体の間に割り込もうとする。

「オイ、お前の相手は——」

キーン。私の声を遮り、快晴の空へ澄み渡る鋭い金属音。

マルクトは一瞬の内に桜花の足元に踏み込み、脚に横薙ぎの一撃を打ち込んでいた。速い。私の目でも追うのがやっとだった。

とはいえ、鋼の装甲が目本刀で斬れるはずがない。小太刀の刀身が振動音を立てて震えている。刃こぼれしていないのは、さすがゾハルといったところか。

「おっ?!」

ワンテンが遅れて、ようやく桜花のカメラが足元の青年を捉えた。飛び退いて入り身に構える。

「狂騒の渦に誘え——」

男の声。小太刀に続いて大きな動きで振られた大刀。やはり斬ることはできずに、刃先が桜花の腕に触れる。いや、そもそもあの振り方は、対象を斬ろうとしていなかった。

「っ?!」

急に歪む視界。頭蓋骨の中で耳鳴りが激しく反響している。不快な頭痛に耐え切れず、額を押さえた。

アルバスが平然と立っているのが見える。ギルグルに限った現象らしい。

「——シェヒーター」

マルクトが口元を歪め、己が武器の名前を呟く。ぬめった舌が醜悪に下唇を舐める。

アスファルトに紅の拳が沈む。大きな金属板が転がる。桜花の装甲が剥がれ、フレームの根本から四肢が落ちていく。無表情な双眸をこちらに向けて紅の頭部が落ちていく。抜き損じたジェンガを彷彿させる光景。桜花は自ら崩壊していく。

道路の真ん中に築かれた赤い山の前で、ショックアブソーバのスプリングがころころ転がった。

「桜花ッ?!」

アルバスがバラバラになった機体に駆け寄っていく。ここからは操縦席に乗っていたはずの桜花の姿を確認することは出来ない。

巻き込んでしまった。世話になった人を。

止んだ頭痛に代わって、男に対する、自分に対する怒りが体を支配する。これ以上他人に凶刃を向けさせるわけにはいかない。桜花とアルバスに背を向ける。

「お前の相手はあたしだろ！ 来い、殺し合いに付き合ってやる！」

ガードレールを跳び越え、林の中に飛び降りる。

「言われなくても。——ったく、廃品め。余興にもなりやあしねえ」

マルクトは崩れた桜花を一瞥してから追った。

低木をまとめて跳び越え、前傾で着地。すかさずコンプレッサで排気、ラバーアクチュエータを締め、前の足を踏み出して林の中を駆ける。

種々多様な木々が生い茂る、広葉樹林。刀を振るう妨げとなることを期待する。

後ろを振り返るが、追ってきたはずのマルクトの姿が無い。まさか桜花のところへ戻ったのだろうか。

天上より降り注ぐ、葉の擦れる音。見上げるよりも先に、地面を蹴って横に跳んだ。男は斜め前方、私が先程までいた場所に着地し、振り向き様に双刀を横に薙ぐ。

「——ッ！」

飛び退こうと踏ん張った脚が絡む。それでも反射的に反らした上体を、大刀の切っ先が掠めた。そのまま後ろに倒れこみ、地面を転がって距離をおく。

膝が地面を離れた時には既に、返された刃がこちらに振られていた。速く、的確で、迷いない。命を奪うことに特化した立ち振る舞い。

垂直に振り落とされた大刀を入り身になってなんとかかわし、全力で地面を蹴って飛び退く。流れる地面と緑の茂み。運よく樹の幹に背中をぶつけることなく間合いを離れた。

マルクトは刀を下ろし、だらしなく首をゆるめている。

「——何が殺し合いだ、てめえがしてるのはせいぜい鬼ごっこだろ

うが。……終いにするぜ。お遊戯に割いてる時間なんてねえんだよ」

小太刀が投げやりに、横の樹木に振り当てられる。代わってこちらに向けられる大刀。

「狂騷の渦に誘え——」

再開する、ひどい耳鳴り。頭に血が上る。

また、この音だ。いや、音ならギルグルの機能でフィルタリングされているはず。もっと別の——

マルクトが走り寄る。斜めに切り上げられる大刀。耳鳴りのせいで集中が欠ける。木の陰に回りこんだ。

みどり。緑。視界一面が緑に覆われた。

認識する。緑。葉。あたり一帯の空間を覆いつくす木の葉。

「しまった——」

目くらまし。目に映っているのは、揺れながらゆっくりと落ちていく葉。聞き取れるのは葉の擦れる音。完全にマルクトの姿を見失った。

私の視界の外より、胸部中央、人工の心臓を挟むように屠殺者は突き出される。

再び鳴らされる鋭い金属音。

私はパニックで指一本動かせなかった。自分の胸を見下ろす。黒のブラウスに刃は突き立てられていない。

舞い落ちていた最後の木の葉が腐葉土の上にのる。私の眼前には、灰色の背中。作業着の肩に縫い付けられているのは生命の樹の部隊章。

マルクトは大刀を突き出したまま口を開いた。

「——なんで、てめえがここにいる？」

刃の切っ先は、黒い皮手袋をした掌に触れている。その腕の前に突き出している主は、口元に微笑を浮かべた、鋭い目の女。長身痩躯、背中まである黒髪を頭の後ろで縛っている。

「ビナー？」

女の背後から、か細い声が上がった。

「んああ、久しぶり——でもないか」

女は軽く後ろを振り返り、シャルと目を合わせる。

「さつさとあのTETRAMのところに戻ってやれよ。流し見たところ、やばそうな感じだったぜ」

男みたいな口調も、ラフな格好と無骨な雰囲気にもマッチしており違和感はない。

「あ、ありがとう！」

シャルは突然の加勢に戸惑っていたが、彼女の言葉通りにその場を走り去った。

マルクトは横目で駆けていく少女の姿を追う。しかし追いかけることはしなかった。いや、できなかった。

「俺の記憶が正しければ、てめえは武臓の査察で短崎にいるはずだが――」

シャルの姿が木々の中に消え、男が視線を戻す。

「まあ、なんだ。私もそのつもりだったんだけど、先方の都合があったさ。気づけばT E T R A Mのパイロットをやっていた」

女がくつくつと愉快そうに笑う。マルクトが理解できないといった様子で、眉間を寄せた。

「ダアトを潰す邪魔をしゃがったな。なぜだ、ビナー？」

「鬼ごっこに混ぜてもらおうと思って」

「……馬鹿かてめえは？」

先程にも増して険悪な雰囲気漂う。

「冗談はさておき、久しぶりに血肉を沸き踊らせてくれた礼、とでもしておくか」

「あの非力なサイボーグが、てめえを、ね？　それも冗談だろ。…気が済んだなら、さっさと道を開ける。邪魔だ」

「悪い、戯言はフィルタリングで遮断されて聞こえねえんだ。——あんたが失せな」

ビナーが空いていた左手をシッシツと振る。

「うぜえ……、斬るぞ？」

突き立てられた大刀はそのままに、小太刀の切っ先も彼女に向けられる。

「私の力を知っているくせに、それでも刃を向けるのか……」

女はわざわざ体を乗り出して、喉元を切っ先に近づけた。冷たい目でマルクトを見上げ、言葉を続ける。

「やってみろよ。レヴィアタンなら、あんたの兵器を完全に無効化できる。相性も理解できねえような馬鹿には、その身に静の極地を刻んでやるさ」

沈黙したまま2人は向かい合っている。

マルクトは焦りを含んだ目で睨み付けている。対してビナーは敵意を受け流すかのように嘲笑を浮かべている。

やがて男が舌打ちを鳴らした。小太刀が引かれ、大刀も下げられる。マルクトは双刀を納め、来た道に体を向けた。

「俺はあいつを潰すまで追い続ける。そこまで邪魔を続ける気か？」

返事を聞くことなく、その場を立ち去る。

「いいや、今回はたまたま目についたから手を出しただけの話。今度は私の目の届かない所で勝手にやってくれ」

ビナーも後ろを向き、皮手袋の右手をひらひらさせて歩き去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6446g/>

双頭の竜

2010年10月10日14時51分発行